月とライカと吸血姫
ノスフェラトゥ
5
牧野圭祐
ill.かれい
Луна, Лайка и Носферату
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

月とライカと吸血姫　5

牧野圭祐

イラスト　かれい

5
牧野圭祐
ill.かれい
月とライカと吸血姫
ノスフェラトゥ
Луна, Лайка и Носферату

Contents

〈前奏〉 прелюдия …… 10

〈第一章〉 星海遊泳 …… 14

〈第二章〉 月の女神 …… 34

〈第三章〉 誰がために …… 120

〈第四章〉 史上初の悲劇 …… 220

〈間奏〉 интерлюдия …… 234

〈第五章〉 遺された想い …… 237

〈第六章〉 猟犬たち …… 296

Луна, Лайка и Носферату

●Cover & Logo design／Junya Arai + Bay Bridge Studio

ミハイル・ヤシン
イリナ・ルミネスク
レフ・レプス
ローザ・プレヴィツカヤ

Side ～アーナック連合王国～
フョードル・ゲルギエフ
「リュドミラ、良い案はないか……」
「まもなく、我々も宇宙遊泳を実行します」
リュドミラ・ハルロヴァ
サンダンシア・ソフィ・アリシア
Side ～ツィルニトラ共和国連邦～

目次

前奏　прелюдия

第一章　星海遊泳

第二章　月の女神

第三章　誰がために

第四章　史上初の悲劇

間奏　интерлюдия

第五章　遺された想い

第六章　猟犬たち

あとがき

月とライカと吸血姫（ノスフェラトゥ）5

牧野圭祐
ill.かれい

人物紹介 Луна, Лайка и Носферату

■ レフ・レプス …… 訓練センター副長官を務める青年。空軍大佐。人間初の宇宙飛行士。

■ イリナ・ルミネスク …… 訓練センター教官を務める吸血鬼。空軍中佐。人類史上初の宇宙飛行士。

■ ミハイル・ヤシン…… 訓練センター教官。空軍中佐。宇宙飛行士。

■ ローザ・プレヴィツカヤ …… 訓練センター教官。空軍中佐。人間女性初の宇宙飛行士。

■ セミョーン・アダモフ …… 空軍中佐。宇宙飛行士。レフたちと同じ『夢の六人』の一人。

■ スラヴァ・コローヴィン …… ロケット・宇宙船の設計主任。

■ ヴィクトール …… 訓練センター長官。空軍中将。大戦の英雄。

■ クセニア・コローヴィナ…… コローヴィンの娘。

■ フョードル・ゲルギエフ …… 第一書記。共和国の最高指導者。

■ リュドミラ・ハルロヴァ …… ゲルギエフの側近、文章担当秘書官。

■ バート・ファイフィールド …… ANSAに勤める技術職の青年。『アーナック・ワン』の広報員。

■ カイエ・スカーレット …… ANSAに勤める新血種族の才媛。『アーナック・ワン』の広報員。

■ アーロン・ファイフィールド …… バートの兄。連合王国初の宇宙飛行士。

■ サンダンシア・ソフィ・アリシア …… 連合王国の若き女王。

「この物語はフィクションです。登場する人物・団体・名称等は架空であり、実在のものとは関係ありません」

конфиденциальный
旧リリット国
[閉鎖行政領域体]
ライカ44
首都:サングラード
ツィルニトラ共和国連邦
クレミヤ制御試験場
アルビナール宇宙基地
Союз
Цирнитра
Социалистических
Республик

前奏　прелюдия

東歴一九五七年一一月三日。

雌の猟犬ライカが宇宙船に乗り、歴史上で初めて地球周回軌道に到達した。

彼女の名はマールイ。

死を運命づけられていた哀かなしき実験犬。

宇宙で彼女が何を見たのか、知る者はいない。

宇宙で彼女が何を想ったか、知る者はいない。

しかし、月の女神は知っている。

彼女の瞳ひとみが自分を捉えたことを。

彼女の心が高鳴ったことを。

そして、月の女神は待っている。

いつの日か、地球の友人がやってきて、冒険譚を聞かせてくれることを。

月の女神は待っている。

友人が偉大な一歩を踏み出し、夢を叶える瞬間を。

三八万キロメートルの彼方かなたで待っている。

星の海に浮かび、孤独に待ちつづけている。

宙そらを夢見たあなたが訪れるときを。

熾烈な宇宙開発競争を繰り広げる東西の二大国、ツィルニトラ共和国連邦とアーナック連合王国。両国は数多くの偉業を打ち立て、とくに有人宇宙飛行の分野では古くからの人類の夢をいくつも叶えてきた。

一九六〇年一二月、イリナ・ルミネスク（共）『人類史上初の宇宙飛行』
一九六一年四月、レフ・レプス（共）『人間初の宇宙飛行』
一九六一年五月、アーロン・ファイフィールド（連）『連合王国初の弾道飛行』
一九六一年八月、ミハイル・ヤシン（共）『史上初、一日以上の宇宙滞在』
一九六一年九月、スティーヴ・ハワード（連）『連合王国初の宇宙飛行』
一九六二年四月、ローザ・プレヴィツカヤ（共）『人間女性初の宇宙飛行』

以降は技術進歩の過渡期となり、競争もしばらく停滞していた。
そして東歴一九六四年一〇月、共和国が新たな挑戦を成功させる。
史上初の宇宙飛行を実現した宇宙船『ミェチタ号』の改良版――『真ミェチタI号』で、三つの史上初を同時に達成する。
『複数人の搭乗』『打ち上げから帰還まで、船内で宇宙服未着用』『非軍人の搭乗（工学者と医師）』。

世界は驚愕し、喝采を送った。

一方の連合王国は史上初を謳うような派手な成功はないが、組織一丸となって有人月面着陸専用のロケットや宇宙船を研究開発し、月への道を着実に歩む。

しかし両国とも順風満帆ではない。技術革新の困難さと増大する予算が開発現場を苦しめる。その問題解消の手段として、連合王国のサンダンシア女王が提言した『共同開発』があるが、両国間には大きな隔たりがあり、実現には至っていない。

連合王国政府は「ＡＮＳＡには共同開発の準備がある」という通知を共和国政府に対して公式に出したものの、共和国は分野別に二種類の反応を示す。

もとより協調の姿勢を見せていた生活に身近な分野――『気象衛星』や『医療研究』では歩み寄りを見せた。

しかし、競争の根幹である『有人宇宙飛行』と『惑星探査』においては、共和国の最高指導者ゲルギエフは「検討する」として、いつまでも保留している。

そして一九六五年。両国の積み重ねてきた研究の成果が花開くとともに、第二幕開戦の火蓋が切られた。

第一章　星海遊泳

藍の瞳　Очи　индиго

　雪花の舞うアルビナール宇宙基地に、五〇〇キロメートル上空の宙そらから緊張を帯びた声が降る。

《──こちら『瑪瑙アガードII』！》

　宇宙船『真ミェチタII号』で地球周回軌道を飛行中の二名の宇宙飛行士、コールサイン『瑪瑙アガードI＆II』。その一挙一動に管制室の面々は固かた唾ずを呑のみ、『瑪瑙I』の偉業を船内で見守る『瑪瑙II』の言葉を待つ。

《──まもなく『瑪瑙I』が……！》

「行けるか……！」

　宇宙飛行士との交信を担当するレフ・レプス大佐はエアロックから船外に上半身を出した『瑪瑙I』の無事を願い、前のめりの姿勢になる。

　どうか、成功してくれ。

　宙へ祈りを捧ささげたそのとき、『瑪瑙II』から弾はじける声が届く。

《──出ました！　今『瑪瑙I』が宇宙空間に出ました！　人類史上初めて、宇宙を泳いでいます！》

「成功だ！」

　管制室内で歓喜が爆発する。レフは隣に腰かけている設計主任のコローヴィンとがっしりと握手を交わす。

「チーフ！　やりました！」

「うむ」

ずっと硬い顔をしていたコローヴィンは一瞬表情を和らげたが、すぐにいつもの険しい目つきに戻ると、浮かれる技術者と職員を一喝する。

「騒ぐな！　問題はここからだぞ！　『瑪瑙I』の様子と数値に注視しろ！」

ビリリと緊張が走る。

宇宙遊泳に注目しているのは、任務についている者だけではない。共和国連邦全域にテレビとラジオで生中継されているのだ。

宇宙船の外に出た『瑪瑙I』□□『夢の六人ミエチタ・シエスチ』のひとりであるセミョーン・アダモフ中佐は、長さ五メートルの命綱を頼りに、星の海をふわふわと自由に泳ぐ。

レフは一度深呼吸をして、通信を試みる。

「『瑪瑙I』へ。今の気分は？」

するとすぐに、興奮した声が返ってくる。

《──最高だ！》

東歴一九六五年三月一八日。共和国は『真ミェチタII号』で『史上初の船外活動』に成功。人間が星の海を泳ぐ姿は全世界にとてつもない衝撃を与えた。

またしても苦汁を嘗なめさせられた連合王国は、一部の報道機関が「宇宙遊泳の白黒映像は地上で撮影された偽物だ！」といちゃも

んをつけるも、世間の評価は「負け犬の遠吠え」だった。

　報道が過熱する裏で、レフは宇宙飛行士の生還に安あん堵どしている。

　共和国政府の隠いん蔽ぺい工作によって世間一般はまったく気づいていないが、じつは死亡事故寸前の危機が続発したのだ。

　今回もいつもどおり、打ち上げ前からさまざまな懸念があった。

　宇宙空間に出て精神は崩壊しないか？

　太陽放射を生物が浴びたら危険ではないか？

　科学者の警告を受けて、まずは犬で実験をする予定だったのだが、諜ちよう報ほう員から「ＡＮＳＡが宇宙遊泳を決定した」という緊急報告が届くと、ゲルギエフは「犬を飛ばしていたら先を越される。人間を打ち上げろ」と命じた。

　この非情な命令に対し、当然コローヴィンは悩んだ。

　しかし、搭乗するセミョーンから「訓練を重ねた私なら必ず成功します！　祖国のために飛びます！」と熱意をぶつけられ、やむなく承知したのだ。

　そして、生中継されるなかで打ち上げは実行され、ゲルギエフの期待に応えて宇宙遊泳は見事に成功した。共和国民も興奮して放送に釘づけだった。

　ここまではよかった。

　致命的な問題が発生したのはここからだ。

　宇宙遊泳の真っ最中に生中継はいきなり終わり、サーカス番組に切り替えられた。

　悪いことが起きたと察する共和国民も多かっただろう。しかし追及してはいけない。政府が隠したことを知る必要はないのだ。

　言うに及ばず、サーカス番組の裏では、レフやコローヴィンたちが手に汗を握る、まさに命がけの曲芸が宇宙空間で行われていた。

順調に船外活動をしていたセミョーンだったが、宇宙服が異様に膨張して、船内に戻るためのエアロックに入れなくなった。

慌てた彼は意識喪失寸前になりながらも、自分で宇宙服の空気を抜き、かろうじて助かった。

危機はそれだけでは終わらない。

船内の酸素濃度が上昇し、爆発寸前となる。

これを何とか回避すると、今度は姿勢制御装置が故障し、着陸予定地点を大幅に外れることが発覚。すると上層部は「他国の領土に墜落して機密が漏れるくらいならば、永遠に周回軌道にいてもよい」と冷酷な判断を下した。

管制室は色めき立つ。

「そんな非道が許されるか！　必ず国内に着陸させるぞ！」

コローヴィンの考えた着陸指示をレフは宇宙船へ伝達する。

「こちら『真夜中ポールナチ』！　『瑪瑙アガードII』へ！　つぎの周回時に、手動着陸を許可する！」

しかし着陸地点は、想定から二〇〇〇キロメートルも離れた極寒の針葉樹林。『瑪瑙II』は見事に着陸を成功させたものの、宇宙服は防寒性能がなく凍死の危機。さらに飢えた熊や狼おおかみに襲われかけ、あと少し救助が遅れれば命を落としていた。

―これらの危機はすべて隠いん蔽ぺいされ、史上初の成功だけが華々しく伝えられる。報道機関は連合王国の敗北を煽あおり、共和国を祝福する。そして、搭乗者であるセミョーンたちは記者会見で誇らしげに偉業を語っていた。

「本当にこれでいいのだろうか……」

会見を裏から見ていたレフは嫌な予感に襲われる。

これまでの有人宇宙飛行を振り返ると、危機は何度もあったが、奇跡的に死者は出ていない。

だが、そんな奇跡はいつまでつづく？

月への道に待ち受ける障害は、幸運だけで乗り越えられるものではない。複雑な新技術を導入するほど、死亡の危険性はますます高まる。

にもかかわらず、連合王国に対する勝利が最優先で計画は進む。

五か月前に打ち上げられた『真ミェチタI号』も同じだ。世間に明かされていないだけで中身は異常だった。

このとき三つの史上初を同時に達成したが、それらはゲルギエフの常軌を逸した発想が生み出した史上初で、当初の計画にはその三つすべてが存在しない。

『史上初の複数人搭乗』は、最初は二人の予定だったのだが──

「連合王国の新型宇宙船が二人乗りなら、我々は三人乗せろ！　詰め込めば入るだろう！」

無茶な要求でも、命令は絶対だ。

しかし、ロケットも宇宙船も二人乗り用の設計なので、三人を詰め込むには宇宙服を置いていくしかなかった。

結果、『打ち上げから帰還まで、船内で宇宙服未着用』となった。

また、『非軍人の搭乗（工学者と医師）』も狙ねらったわけではない。

非軍人が選ばれた理由は、政治的な意向と軋あつ轢れきを調整した結果で、肉体的に貧弱だった彼らはたった四か月の訓練で無理やり飛んだ。

「科学者の搭乗により、すばらしい実験ができた！」と共和国政府は盛んに喧けん伝でんした。詰め込まれた科学者たちは座っているだけで精一杯だったというのに……。

それでも連合王国の出で端ばなをくじくには用が足りるものであり、ゲルギエフはしてやったりとほくそ笑んだ。

しかし、政治宣伝以外の目的がない『真ミェチタ計画』をいくら達成しても、月へは一歩も近づいていない。今回の宇宙遊泳も偉業には違いないが、ただ宇宙に人間を出しただけ。そんな無駄な計画は、この先いくつも予定されている。「二〇日間の長期宇宙滞在」「命綱なしの宇宙遊泳」など、話題性はあるが、限りある予算と時間を奪うだけのサーカスで――

ああ！　なんと馬鹿馬鹿しいことか！

レフは胸の奥で呪じゆ詛そを吐く。

このひどい状況を改善したくても、無理だった。レフの上司であるヴィクトール中将は上層部に「予算と飛行士の無駄遣いだ」と訴えたが、分厚い権力の壁に跳ね返されて、「胃薬代で給料がなくなる」とボヤいている。

上層部が現場を蔑ないがしろにする体制は、成功確率一割以下で実験体イリナを宇宙に飛ばしたときから変わっていない。

いや、変わっていないどころか、相対的に見て悪化している。

計画の難易度が上がり、無人飛行や試験機は何度も失敗。アルビナール宇宙基地の周辺には爆発したロケットの破片が散らばっている。

そんな事故が、もし有人飛行中に起きたら。

「……」

レフは首筋を流れる汗を拭ぬぐう。

基本的には前向きなレフが不安に苛さいなまれるのは、もうひとつ理由があった。

コローヴィンの体調だ。

開発現場がどれだけ無理難題に苦しんでいるかは、彼を見れば一目瞭りよう然ぜんだ。めっきり白髪が増え、目は落ち窪み、肌に張りがない。そして、彼は公言していないが、幾度となく体調を崩し、入退院を繰り返しているのだとレフは伝え聞いていた。

レフの目の前で胸を押さえて苦しみ、倒れたこともあるコロー

ヴィン。

　宇宙開発の未来と同じくらい、レフは彼の体調が心配だった。

　女王の瞳　Ｑｕｅｅｎ　ｅｙｅｓ

　一九六五年、五月。青紫色の紫雲木ジヤカランダが開花して初夏を告げるころ。

　連合王国の首都にある宮殿で、若き女王サンダンシアは首相から週に一度の報告を受ける。

　主題は紛争について。

　首都から一四〇〇〇キロメートルも離れた極東地区で起きている紛争から、この夏、ついに軍隊の撤退が始まる。

「現地に設置した軍事援助司令部も、年内に解散する予定です」

　首相の報告にサンダンシアは安あん堵どする。

　まずひとつ、念願が叶った。

　万国博覧会のカンファレンス以来、どんな相手に対しても怯ひるまずに意見を伝えられるようになり、首相には早期の撤退を訴えつづけてきた。無論、無知な自分の意見など政府の重鎮たちは参考にしていないだろうが、それは関係ない。大事なのは、気持ちを伝えられたことだ。

思い出すだけで身が震える核戦争の危機をきっかけに、世界は大きく変わり始めている。

今回の撤退が実現したのは、反戦運動の激化に加えて、共和国との関係性の改善が大きい。極東地区から先に手を引いたのは共和国だ。一時は戦争に発展しかけていた紛争も、両国の撤退を機に、解決に向かうのは間違いない。

しかし、共和国政府に対する疑念は残っている。

かの国は、相も変わらず徹底的な秘密主義を貫いており、ゲルギエフを頂点とする幹部たちが何を考えているのか、サンダンシアたち連合王国にはさっぱり想像がつかない。

そこで首相に共和国の現況について訊たずねると、彼はこう答えた。

「諜ちよう報ほう員の報告によれば、経済状況はかなり悪く、国内外に反ゲルギエフ勢力が多数いるようです」

ゲルギエフが強引に進めた農業拡大政策は大失敗に終わり、あろうことか連合王国から小麦を輸入する羽目になっていた。

もはや、政権はいつ転覆してもおかしくない。

両国関係が改善してきた今、振り出しに戻るような政変は起きないでほしいと願うサンダンシアだが、願うこと以外には何もできなかった。

「―つづいて、宇宙開発についてのご報告です」

公務に忙殺されるサンダンシアにとって、このときが一週間でもっとも楽しみで、胸の高鳴る瞬間だった。

「では、お願いします」

サンダンシアが興奮を隠して平坦な声で促すと、首相はもったいつけて言う。

「まもなく、我々も宇宙遊泳を実行します」

「えっ！」

と、思わず前のめりになったが、サンダンシアはグッと堪こらえる。

「こほん……準備が整ったのですね」

「ＡＮＳＡからは『共和国を追い越すのは時間の問題』という自信に溢あふれた報告が届いています」

首相はＡＮＳＡの報告書を見せる。

有人月面着陸を目指す『ハイペリオン計画』の日程が前倒しされた。上方修正の大きな理由は、優秀な新血種族ダンピールの大量雇用。

この社会変化を起こした一番の立て役者はカイエ・スカーレットだ。

彼女の活躍で新血種族全体の印象が好転し、多くの新血種族が彼女に憧あこがれてＡＮＳＡの門を叩たたく。

今やカイエは『ハイペリオン計画』の中心メンバーで、月面着陸の達成に必要不可欠なコンピューター誘導システムの開発責任者となった。

そして、時として仕事に集中しすぎる彼女を、補佐役のバート・ファイフィールドが助けている。

以前のバートとカイエは『無理やり推し立てられた広告塔』という感じだったが、精せい悍かんさを増したふたりは堂々とＡＮＳＡの顔を務めている。

サンダンシアはふたりを見るたびに、「もっと私もがんばらなくては！」と鼓舞される。

片や、気がかりなのはレフとイリナだ。

ふたりは親善大使として世界各地を回り、共和国のすばらしさを語る姿がたびたび報じられるが、本心はどうなのだろうか。万国博覧会のカンファレンスで、彼らは共同開発に暗に同意してくれた。その選択は共和国の方針とは違うはずだが、彼らの温かくて優しい想いが伝わってきた。

やはり、月への旅は競争ではなく、人類の英知の結晶であってほしい。

その気持ちをあらためて首相に伝える。

「私個人としては、ぜひ共同開発を実現してほしいと願っています。互いに協力し合えば、費用の負担も軽くなるでしょう」

有人月面着陸に莫大な費用がかかることは議会で批判されつづけている。共和国の内情はわからないが、あちらも当然苦しんでいるだろう。

「私は共同開発の障壁となっている軍事機密は、軍縮が進めば取り払われると信じています」

「陛下、私もそう思います」

サンダンシアの言葉に、首相は大きく頷うなずく。彼自身、一昨年の国連総会ではつぎのように演説していた。

『―将来、宇宙開発にはより多くの国々が参加するでしょうし、我々は良い前例を作るべきです。両国の代表団を月に送るべきと私は考えます。たとえば、連合王国が有人着陸船の開発を進め、共和国が無人探査機で月面の調査をして、結果をひとつにする。宇宙船の搭乗員に共和国の宇宙飛行士を含めることを約束します』と。

利己的だが、もし受諾されれば儲けもので、拒否されても世界に向けて平和路線を強調できる。

そうは言っても一筋縄ではいかない。

科学分野の協力は友好国同士でも難しく、連合王国内には反対派も多くいる。競争の勝利を目標としてきた人々や、機密の盗難を恐れる者、そして、『主義の異なる国家』を敵視する新聞社や下院議会。

また、そもそも、いくら連合王国側が心を開いても、鉄の壁が相手国に存在する。

最高指導者ゲルギエフ。

競争意識が強烈な彼に共同開発を受け入れさせるためには、連合

王国が圧倒的な技術力を見せて、敗北を悟らせるしかない。

　だが、相手は強敵だ。

　つい先日、偵察衛星がアルビナール宇宙基地を撮影したところ、尋常ではない大きさの発射塔が映っていた。まだ建造中のようだが、用途はまったく不明。それを見たＡＮＳＡの技術者は「東の妖術師チーフデザイナーが新たな魔法を放ってくるのでは？」と戦々恐々とし、クラウス博士は畏敬の念を込めてこのように発言している。

『連合王国は予算も人材も共和国に勝っている。技術も並んだ。だが、残念なことに、東の妖術師に比肩する天才がいない』と。

　サンダンシアは、性別も年齢もわからない東の妖術師に向けて、心のなかで問いかける。

　きっとあなたも、宇宙に夢を見ていて、本当は争いたくないのでしょう？

　レフさんとイリナさんと話したときに、私はそう確信しました。

　いつかあなたとも話をしてみたいです。

　しかし、もし共和国が負けたら、あなたは、どうなってしまうのですか……？

黒竜の瞳　Очи　Цирнитры

　牡ぼ丹たん雪ゆきのような箱柳トーポリの綿毛が爽さわやかな風に舞い、母なる大地を白く覆う。

　それは短い夏の訪れを表す風物だ。

　国土の大半が寒冷地に位置する共和国だが、六月にもなれば外がい套とうを着ることもなくなる。

　しかし、気温がいくら上がっても、ゲルギエフの心は凍りついていた。

　宇宙遊泳を達成したわずか三か月後、連合王国に追いつかれた。しかも連合王国は『史上初の商業用通信衛星で一二か国に同時中継する』という大々的な宣伝をして、何百万人もの視聴者に目撃させた。途中で放送を打ち切った共和国をあざ笑う、華やかな成功だった。

　執務室でチェスに興じていたゲルギエフだが、五分以上も駒を指す手が止まっている。

「手はないのか……追いつかれてしまうではないか……」

　チェスの相手をするリュドミラ・ハルロヴァ秘書官は苺の甘露煮ヴアレニエをスプーンで潰つぶしながら、つまらなそうに言う。

「追いつかれてしまう？　私はそうは思わないよ」

「秘策でもあるのか!?」

　ゲルギエフの瞳ひとみが輝いたが、リュドミラは首を横に振る。

「すでに追いつかれたと言いたいの。だって、ミェチタIII号とIV号のランデヴーは妖術師が見せた幻影じゃない」

「ぐっ……」

　周回軌道上で宇宙船が並行飛行ランデヴーを行うのは、複雑で特殊な技術が必要になるため、一九六二年の時点では不可能だった。

そこでゲルギエフは「並行飛行に見せかけてハンバーガー野郎を痛めつけろ」とコローヴィンに指示し、手品のような打ち上げで世界中の人々を騙だました。

　しかし、もはや妖術の効力は切れた。

　ゲルギエフはげんなりと頭こうべを垂れ、弱々しく駒を指す。するとリュドミラは冷笑し、容赦なく彼の女王の駒を取る。

「あっ、待て……！」

「待たない。無人探査も追いつかれるよ？」

　共和国は火星の植民地化を狙ねらって無人探査機を送りつづけるも、失敗を重ねていた。ところが、およそ一年前、連合王国が火星の地表の撮影に成功。「生命の存在しない死の大地」と発表して世界の話題をさらった。

　そして一九六五年六月現在、共和国が唯一先行するのは『月の無人探査』のみ。

　リュドミラは女王の駒を指先で弄もてあそぶ。

「諜ちよう報ほう員から報告があったけど、あちらは数か月以内に、新型宇宙船でランデヴーに挑戦するんだって。このまま開発が順調なら、連合王国の有人月面着陸は一九六八年には実現するという噂うわさ」

　危機感や悔しさを微み塵じんも出さず、彼女は事実だけを突きつける。

　追い詰められたゲルギエフの心は永久凍土の如ごとく冷たく固まる。もはや史上初の人工衛星、史上初の有人宇宙飛行の威光は消えかけている。

　なぜ追いつかれたのか。

　最大の原因は、ＡＮＳＡのような宇宙専門の統括組織がなく、開発現場のすべてが軍の支配下にあり、軍事利用が優先されるからだ。

　ロケットや宇宙船を開発する設計局は無秩序に乱立し、各局の主

任は予算を獲得するために、政治家や軍の幹部を手当たり次第にパトロンにつける。

　結果、各所で方針が異なり、しがらみが生まれる。人間関係はこじれ、ゲルギエフでさえも全体像を把握できない有様だった。

　この混迷極まる状況を作ってしまったのは、ほかならぬゲルギエフ本人だった。

　まず、設計局を必要以上に増やした理由は戦略ではなく、「工業生産を少数に任せると、結託して工業界に権力を握られるのではないか？」という恐怖心によるもの。

　確かに権力を握られる可能性は否定できないが、宇宙開発においては完全な愚策である。

　さらなる悪手は、第一設計局のコローヴィンが提出した『有人月面着陸計画』を承認しながら、着陸の前段階となる『有人月周回飛行』については第五二設計局の計画を承認したことだ。

　戦略的な狙ねらいなどない。

　自分の息子が第五二設計局に勤めているから選んだだけだ。

　かつての大戦で我が子をひとり亡くしたゲルギエフは、もうひとりの息子を溺でき愛あいしており、その親馬鹿を第五二局長が利用した。結果、ふたつの設計局がそれぞれ異なるロケットと宇宙船を計画するという異常事態が起きた。しかも、第五二局長は優秀なミサイル開発者だったが宇宙船については無知で、いつまで経っても設計図すら完成しない。

　怒り心頭に発するコローヴィンは馬鹿馬鹿しい状況を打破すべく、各方面に「月周回飛行も私に担当させろ」と働きかけたが、敵対派閥に妨害されていた。

　これでは、連合王国に追いつかれて当然だった。

「ねえ、まだ息子を贔ひい屓きするつもり？」

　苛いら立だちを露あらわにリュドミラはゲルギエフに詰め寄る。

「私は前々から現場の整理をすべきと忠告してたわよね？」

「うむ……」

　額に脂汗を浮かべるゲルギエフはチェスの盤面に目を落とす。

　リュドミラは追及の手を止めない。

「宇宙開発だけじゃないわ。あなたは失政を重ね、宮廷クーデターを企てられ、ついには暗殺されかけた」

「ああ。そうだ。君が掃除していなければ、私は今ごろ墓の下にいただろう……」

　栄華をどこへ置き去りにしてきたのか。

　最高指導者についた当時は「連合王国を葬り去る！」と豪語し、数々の改革を推し進めた。

　しかし核戦争の危機では連合王国の要求に応え、譲歩した。相手の軍事力が二〇倍以上だと発覚したため、平和共存政策に舵かじを切ったのだ。

　この選択は軍の自尊心を傷つけ、国防大臣を激怒させた。また、極東地区の紛争から撤退した理由は隣国との対立によるものなのだが、これも軍との亀裂を深めた。

　悪いことに、宇宙開発は軍部の直下にある。だからゲルギエフが有人月面着陸を声高に叫んでも「月への挑戦や有人飛行など軍事的に無意味」と最低限の協力しか得られない。共同開発についても「軍事機密が漏れる」と断固反対の姿勢を取られる。

「どうして上う手まくいかないのだ……」

　躁そう鬱うつの傾向があったゲルギエフの心からは躁状態が消え、悲観で埋まる。気を紛らわそうと、共和国のプレイヤーが世界チャンピオンを独占しつづけているチェスを始めてみたが、集中できない。

　今、信じられるのは、忌き憚たんのない意見を言ってくれるリュドミラだけ。

「リュドミラ、良い案はないか……」

　すがりつく最高指導者をリュドミラは突き放す。

「国内経済はボロボロ。宇宙での成功まで失えば、あなたは建国史上で最悪の指導者として名を残すわ」

　辛しん辣らつな指摘は鋭い氷柱つららとなり、ゲルギエフの心臓を貫く。

「……わかった。息子の件は考え直す。設計局も整理しよう。それで、どうにか月への競争に勝てないか？」

「チェスではね、劣勢を覆して勝つのは難しいの。でもね……」

　リュドミラは蠱こ惑わく的てきな微ほほ笑えみを浮かべて、盤上からゲルギエフの騎士ナイトの駒を取る。

「まだ手駒はあるじゃない？」

　戦場の天使のように慈しみを持って駒を愛でる。その深緑色の瞳ひとみは不気味な光をたたえている。

第二章　月の女神

藍の瞳　Очи　индиго

ふわりふわりと、紺こん碧ぺきの空から乳白色の傘がいくつも舞い降りてくる。

宇宙飛行士候補生のパラシュート降下訓練だ。

背丈の短い夏草が広がる平原から彼らを見上げるレフは、自分が補欠だった頃を懐かしむ。

よく生きていたな、と。

今行われている訓練は、『大気圏再突入後にパラシュートで帰還する』という無謀な作戦のためではなく、緊急脱出のためのものだ。この四年のあいだに宇宙船は改良されて逆噴射による軟着陸が可能になった。

そして二四歳になったレフは訓練センターの副長官に昇格し、春先に仲間に加わった二期生一〇名を地上で迎える立場となった。

レフの前に副長官を務めていたサガレヴィッチは、僻へき地ちの閉鎖都市に異動した。異動の理由をレフは知らないし、詳細を知ろうとも思わない。他人をあまり嫌うことのないレフだが、イリナを痛めつけた彼は最後の最後まで嫌いだった。

「同志大佐！　訓練完了しました！」

二期生から声をかけられたレフは胸を張り、「よし」と頷うなずく。威厳を持って偉そうに振る舞うのはいつまで経っても慣れないが、有人月面着陸を成功させるために、与えられた役割をしっかりと果たす。

降下訓練を終えて宇宙開発都市『ライカ44』に戻ると、湿地帯を

赤く染めていた麗しい夕日は針葉樹林の向こうに沈んでいた。

　訓練後にいつも立ち寄る炭酸水の自動販売機は新型になり、無味無臭のもの以外に、糖蜜入りの柑かん橘きつ風味が買えるようになった。

　変化したのは自動販売機だけではない。

　居住区には集合住宅が増えて、開発区には新しい施設がいくつも建てられた。無重力訓練のための巨大プール、トレーニング施設に研究所、プラネタリウム、市民生活を充実させる店舗などさまざまだ。

　そんななかで「退化した」と不評なのは、宿舎の食堂で提供される煮込みスープ・ブリュシチだ。調理を担当していた女性が町を去って以来、誰もが「味が落ちた」と文句を垂れている。彼女の後釜には若い女性が入ったが、味の再現に四苦八苦している。調理に奮闘する者の正体が国家保安委員会──〔運送屋〕であることを知るのは、レフを含めたごく一部だ。

「ぷはぁ～。やっぱり味も匂においもないやつが一番だ」

　レフが二期生たちと炭酸水を一杯やり終える頃、自動販売機の裏にある薄暗い赤松林でごそごそと何かが動いた。

　猫か犬かと思うと──

　きらりと月の石の首飾りが月光を反射して輝いた。

「あっ、偶然ね」

　松の木陰から出てきたのは、タンクトップにカーゴパンツというラフな格好をしたイリナだ。

「どうして松林から出てくるんだよ」

「早く飲みたくて急いで来ただけ」

　イリナはツンと澄ました顔で柑かん橘きつ風味の炭酸水を買い、香りを楽しむと、こくこくと美お味いしそうに飲む。

　二期生は困惑の苦笑いを漏らす。

　それもそのはず、イリナと自動販売機の前で鉢合わせる確率が異常に高い。彼女は「偶然」と言ったが、奇跡と思えるほどに偶然が頻発している。そして二期生は気を使ったのか、レフとイリナに挨あい拶さつをして共同宿舎に帰っていく。

　レフにとっても、こんな偶然ならいくらつづいても構わない。炭酸水を飲むイリナの後頭部に松の葉がくっついていたのを見つけて、レフはそっと取ってやる。

　こんな間の抜けた彼女も、訓練センターの教官を立派に務めている。

　吸血鬼ノスフエラトウは太陽光に弱いので、主に日没後や室内での訓練担当だ。かつて、レフが彼女の担当をしていたときは吸血鬼の体質に合わせて昼夜を逆転させていたが、ひとりの『吸血姫』のために皆が合わせるわけにはいかないので、彼女が人間に合わせている。

　当初、二期生たちは、『史上初の宇宙飛行士』『吸血鬼』というふたつの冠を持つイリナに対して分厚い壁を感じていたようだが、少しずつ打ち解けてきた。

　とはいえ、基本的には人間に対して冷たく厳しいイリナなので、二期生からは『ヴィクトール中将よりも怖い鬼教官』という評価を与えられている。教官というポジションは、甘やかしがちなレフより、彼女の方がよほど性に合っているかもしれない。

「何？　じろじろ見て。あげないわよ」

　炭酸水を奪われるのではと誤解された。

「違うよ。教官の仕事はどうかなって気になっただけだ」

「んー……」

　イリナは顎あごに手を当てて答える。

「本当に難しい……。教える側に立ってみて、高所恐怖症だった私にレフがどれだけ骨身を削ってくれていたか、よくわかった」

　あらためて感謝されると照れくさく、レフは冗談めかして返す。

「大変だったよ。高所恐怖症に加えて、人間嫌いで生意気で、俺にも同期にも上官にもすぐに喧けん嘩かを売るし」

　からかうとイリナはプイとそっぽを向いた。

「……あの頃は若かったの」

　大人ぶって言うが、彼女はまだ二一歳。

　それでも、出会ったときに比べると見違えるほど美しく垢抜けた。鬱うつ蒼そうとした森で暮らしていた一七歳の少女が醸かもす、触れると崩れそうな危うさは薄れた。世界各国を周遊するなかで人目に晒さらされたこともあるのだろう、宝石の原石が磨かれるように、この世にふたつとない神秘性を漂わせる。首に提げた月の石の輝きと同じで、彼女が望もうが、望むまいが、不思議と惹ひきつけられる。

　身長があと一〇センチメートル高ければ、ファッション界のトップモデルにもなれるだろう。

「ニヤニヤしてる！」

「あっ、ごめんごめん」

　見た目がいくら大人っぽくなっても、頬ほおを膨らませたり、木陰から出てきたりするような彼女の可か愛わいらしさは変わらない。

「ほら、レフ。もうすぐ時間でしょ。早く着替えなきゃ」

　今夜は居住区に新しく建てられた高層住宅の完成を祝うパーティーだ。開発施設の増築や二期生の加入で既存の宿舎が手狭になってきたため、『ミェチタ計画』の頃から住んでいるレフたち一期生や技術者、職員用に新居が用意された。

　皆が『宇宙市民住宅』と呼ぶ一二階建て二棟の建物は、ゲルギエフが建設を推進する粗悪な量産集合住宅ゲルギエフカではなく、エレベーターまで設置されているきちんとした住まいだ。

　宇宙市民住宅の特徴的な点は、ふたつの棟をつなぐ廊下の中間に交流ホールがあることだ。ビリヤード台やチェス盤が置いてあり、電気蓄音機や小型の映写機まで備わっている。このホールは、一期

生の「同志で談笑できる空間が欲しい」という要望で実現した。

　また、宇宙飛行士たちには自動的に最上階の部屋があてがわれた。少しでも宙そらに近い場所にいるべきだという配慮だった。

　至れり尽くせりで、近日中の引っ越しを皆が楽しみにしている。

「それにしても豪華だよな……」

「ええ、この国の謳うたう平等って何かしら……」

　国内が深刻な不況でも、宇宙開発には多額の予算が注ぎ込まれているのをレフは肌身で感じる。

　しかし、これもいつまで継続されるのだろうか。

　他の分野と比較すれば恵まれているが、月を目指すには必要最低限の予算しかなく、年々予算を増やしている連合王国に比べるとまったくもって貧弱だった。

　白しら樺かばの木々に囲まれた広場に宇宙市民住宅は聳そびえている。昼間は白い壁が森の緑に映えるが、太陽が落ちて以降、街がい燈とうに照らされて闇やみにぽつりと浮かび上がる様は、まるで宇宙を行く船のようだ。

　新築を祝うパーティーは共和国の伝統に則のつとり、住民となる者たちが客を出迎える。

　レフやミハイルら男性陣はスーツを着て玄関の前に立つ。

　一方、女性陣は純白の民族衣装サラフアンを纏まとう。そのなかで、イリナはひとりだけ色鮮やかなブラウスと巻きスカート姿で目立っている。彼女の故郷である旧リリット国の民族衣装サデイエだ。「アーニャにもらった大切な服なの」とイリナは言っていた。

　アーニャは今、この街から遠く離れた医学研究所で働いている。一年に一度だけ近況報告の手紙が届くが、面会は叶わない。イリナの病院脱走を企てた罰なので仕方がなかった。命があるだけでも儲けものだ。だからこそ、イリナはアーニャにもらったものを宝物にしていた。

　ローザはイリナの衣装を見て「蝶ちようの刺し繍しゆうが可か愛わいい」と褒ほめる。

　もしふたりが出会った頃ならば、「イリナの衣装だけ違うんだけど」と目くじらを立てていただろうが、今はまったくそんなことはない。以前は『サングラードの白しろ薔ば薇ら』として孤高の気高さを誇っていたローザだが、最近は棘とげが取れ、美しさだけが際立っている。

女性の飛行士は二期生を含めてもイリナとローザだけで、ローザが『人間女性初の宇宙飛行士』になって以降、彼女たちは親睦を深め、近ごろでは種族を超えた特別な絆きずなで結ばれているとレフは感じる。

「おい、レフ」

ぼんやりとふたりを見ていると、ミハイルに耳打ちされた。

「どっちに見み惚とれてるんだ？」

「えっ！」

びっくりしてレフは小声で返す。

「変なこと言わないでくれよ……！　どっちでもないよ……！」

どっちでもないというより、どっちも見てたが……。

ミハイルはニヤリと笑い、レフの脇腹を肘ひじで小突く。

「しゃんとしろ。客人が来るぞ」

気づけばパーティーの開始時間だ。

レフとミハイルは玄関の両脇にわかれて立ち、姿勢を正す。

男性の宇宙飛行士は共和国だけでも七名いるが、『史上初の宇宙飛行士』の座を賭かけて争ったミハイルはレフにとって無二の友だった。

ぞくぞくとやってくる居住者の友人や親類に、女性陣が飾りパンカラヴアイと塩を振る舞う。

飾りパンは、パン生地で美麗な花模様を表面に施したもので、新居祝い以外にも結婚式や葬儀など、人生の節目に出される特別な食べ物だ。

パンと塩は古代から富と健康の象徴とされ、「私たちはどんなに食べ物がないときでも客人を歓迎します」という意味がある。

しかし、一昨年の大凶作で全国的に食料不足になったときでも『ライカ44』には優先的に食料が回ってきたので、図らずも皮肉めいた歓迎になってしまい、誰もが苦笑してしまった。

招待客へのもてなしが終わると、居住者は交流ホールに集まる。

テーブルには郷土料理や大量の蒸留酒ジーズニの瓶びんがところ狭しと並び、ホールいっぱいに集まった人々には笑顔が溢あふれる。

宇宙飛行士たちは率先して蒸留酒を注いで回り、乾杯の準備をする。

レフはイリナに苔桃果汁リンゴンベリーの炭酸水を渡す。

「君はこれだ」

「お祝いの日くらい……駄目？」

「お祝いの日だからこそ、べろんべろんになると問題だ」

イリナはムスッとしつつも、「わかったわよ」と炭酸水を取る。

皆にグラスが行き渡ったのを確認すると、レフは前に出てグラスを掲げる。

長々とした挨あい拶さつはいらない。

「新たな人生ジーズニのために！」

「乾杯！」

蒸留酒ジーズニをグイッと飲むと、身体からだの芯を熱い液体がとおり抜け、胃の底を燃やす。

つづいてミハイルが乾杯の声を上げる。

「宙そらのために！」

「乾杯！」

杯の重なる音が響き、皆はグラスを煽あおる。

つぎは年配の技師班長が叫ぶ。

「祖国のために！」

乾杯は一度や二度では終わらず、飽きるまで延々とつづく。

この儀式に参加していると泥酔してしまうので、レフは副長官としての威厳を保つために乾杯の輪を抜け、窓際の椅い子すに腰かける。

むせ返るような熱気に新生活の始まりを感じ、レフは初めて『ライカ44』に来た日のことを思い出す。

まだ何者でもない候補生だったレフは、絶対に宇宙飛行士になってやるという決意を胸に秘め、バスを降りて新雪の上に一歩を踏み出した。

そして、毎日を必死に生きていたら、いつの間にか月日は経ち、夢の先に来ていた。

喧けん噪そうのなかで少しばかりの郷愁に浸っていると、苔桃果汁リンゴンベリーの炭酸水を持ったイリナがレフの隣に来て、窓をガラリと開ける。

「このホールのなか、お酒の匂においがすごくて息が詰まるのよ……」

外の空気を胸いっぱいに吸って吐くと、イリナはレフの隣にちょこんと腰を下ろして言う。

「ねえ、屋上に行かない？」

突然の提案にレフは首をかしげる。

「始まったばかりだぞ？」

「だって、この場にいるだけで酔いそうで……」

イリナはパタパタと手で扇あおぐ。いつもは雪のように白い頬ほおが薄うす紅べに色いろに染まっている。

「……飲んだのか？」

「舐なめただけー」

　舌をペロッと出し、誤ご魔ま化かすように苔桃果汁の炭酸水をちびちびと飲む。

　まったく困ったものだ。迷惑をかけなければ飲んでくれていいのだが、誰彼構わず絡んでいくのが目に見える。

　そんな心配をしていると、レフは二期生から乾杯を求められたので応じ、軽く雑談する。彼らにとってイリナは鬼教官であり、酔うと甘えた声を出すなど夢にも思わないだろう。

「ねぇー、レフ～。屋上は～……？」

　そう。こんな甘えた声を──

「ん？」

　隣のイリナに目をやると、彼女は茱グ萸ミの実の果実酒を飲んでいた。

「待て。いつの間に酒を持ってきた？」

　イリナが指した先を見ると、真っ赤な顔をしたセミョーンが人差し指で首を軽く弾はじき、「呑のめ呑め」とニンマリする。

「やめてくれっ……！」

　ここにいたら危険だ。

「おいしい～」

「飲むな！」

　脱出を決めたレフはミハイルに声をかける。

「ごめん。イリナを酔い覚ましに屋上に連れて行く。この場を任せてもいいかな」

「了解。食い物を持って行け」

　ミハイルはパンや肉の煮凝りホロデーツなどの料理をどさどさと盛りつけると、「ごゆっくり」と悪戯いたずらっぽく微ほほ笑え

み、レフに差し出した。

　エレベーターを降り、レフとイリナは屋上へ出る。

　夜風が湿った夏の匂においを運んでくる。

　交流ホールの喧けん噪そうが嘘うそのように静かだ。

　一二階建ての屋上は街を囲む壁や針葉樹林よりも高い。青い月の光に照らされる広大な湿原がよく見える。

「涼しくて気持ちいい～」

　ふらふらとイリナは千鳥足で歩く。グラスにたっぷり入った苔桃果汁リンゴンベリーの炭酸水をこぼしそうになりながら、塗料が乾いたばかりの鉄てつ柵さくによりかかる。

「柵を乗り越えるなよ」

　レフはイリナの隣へ行き、料理の盛られた皿を地面に置く。気分だけでも祝宴を味わおうと、蒸留酒をちょっとだけグラスに入れてきた。

　さっそく飲もうとすると、イリナに顔を覗のぞき込まれた。

「さっきの乾杯、『新たな人生ジーズニのために』って言ってたけど、レフはどんな人生がいいの～？」

「ん……？」

　それはいつも胸に秘めている想いだ。

「叶うなら、宇宙飛行士として生涯を終えたい」

　地位と名誉を手に入れて立派な新居に住むというのは、端はたから見たらすばらしい人生なのだろうし、レフも当然、美お味いしい料理と酒を楽しんで暮らしたいという思いは人並みにある。

　だがそれは二の次だ。

「じゃあ、足腰が立たないおじいちゃんになっても、宇宙飛行士を

やってる？」

　からかう感じではなく、イリナは真剣な目で訊きいてきた。

　あまり考えたことはないが、人生という括くくりなら老後まで含むだろう。

「ずっと宙そらを飛んでいたいし、もし体力的に無理になったら、教官として指導に専念するかな。ところで君はどうなんだ？」

　彼女の答えも宇宙飛行士だろうが、あえてレフは問うた。

「パン屋さんになる～」

「は？」

　全然違った。

　イリナは皿からパンを取ると、レフに見せつけるようにしてパクッと食べる。

「うさぎ型の可か愛わいいパンを作るパン屋さーん……なーんて、ふふっ。じょうだーん。びっくりした？」

「やっぱり酒は飲むな……」

　呆あきれると、イリナは「ごめんなさーい」と小鼻をぴょこつかせる。

「私もレフと一緒。親善大使でいろいろ旅するのはおもしろいけどー、やっぱり、もう一度宇宙へ行きたいなァ……。私、死ぬまでずっと、ずーっと、宇宙飛行士をやるのー！　よぼよぼのおばあちゃんになってもずっと！」

　いつもより饒じよう舌ぜつなイリナは星空を見上げて目をきらきらさせる。

「おばあちゃんになっても？」

「だって、遠くの星に行くには、何十年もかかるでしょ？　月だけじゃなくて、もっと遠くも見てみたいの。あぁ……伝説の吸血鬼なら生き血を吸って、一〇〇〇年でも生きられるのにーっ！」

悔しげに牙きばを覗のぞかせるイリナは話をつづける。

「二一世紀になったら、万博で体験したような宇宙旅行もできるかなァ……？」

宇宙の果てへ旅立つアトラクション『スペース・フライヤー』。星間飛行の幻想的な光景とともに、当時の気持ちが蘇よみがえる。

あのときは宇宙から離れて国家の宣伝ばかりしている状態が悲しくて、イリナとともに浮かない顔をしていたら、バートに心配されて焦ってしまった。

「宇宙を飛んでから、もう四年以上も経つんだな……」

いつしか地上にいることに慣れてしまった自分にレフは気づいている。

子どもの頃から抱いだいていた夢を叶えたけれど、同時に大事なものを失ってしまいそうで、ときどき怖くなる。

だからこそ、再び宇宙飛行士に選出される望みが薄くても、自主的に訓練をつづけているのかもしれない。

しかし、訓練をすること自体も難しくなっていた。精神的な面ではなくて、物理的な面での困難だ。

訓練センターの機器は訓練生のためのもので、教官用ではない。だからレフが使えるときは講義時間外に限られる。

その上、職務も忙しい。副長官が管理するのは候補生だけではない。訓練センターに属する技師や教官も含まれており、大変な責務だった。

さらに、親善大使に加えて『最高会議の委員』という国家の要職に自動的に選ばれてしまった。断りたくても断れず困惑するレフに、同じく委員を務めるヴィクトール中将は忠告した。

『政界進出に興味がないなら、党や委員会には必要以上に関わるな。有名人のお前と親しくなりたい輩やからは山ほどいる。あの手この手で誘ってくるぞ』

さまざまな重圧がのしかかり、日々は繁多な任務に忙殺される。

それでもレフがへこたれずに訓練をがんばれるのは、イリナの存在が大きかった。

彼女も同じく多忙で、しかも吸血鬼ゆえに日中の活動が難しいという制限がありながら、自主訓練に励んでいる。

とくに彼女が力を入れているのは戦闘機の操縦だ。

『ライカ44』に来るまでは飛行機に乗ったことすらなかったイリナだが、飛行士の資質があったらしく、レフが教えてやるとぐんぐん上達し、今では単独飛行も可能な腕前に成長した。

しかし彼女にとって、飛行機の操縦自体は目的ではない。今後、宇宙飛行士に選ばれる条件として、航空技術や操縦経験は必須なのだ。

有人月面着陸にはコローヴィンが製作を進める新型宇宙船──故郷の名を与えられた『ロージナ』を使用するが、彼自身が「未来の機械」と呼ぶように、着席しているだけの宇宙船『ミェチタ』とは根本的に異なる。また、連合王国の新型宇宙船『ハイペリオン』の対抗機にあたるものだが、それとも設計思想が違う。

革新的な点は、分離可能な三つの機体構成にある。

『軌道船（前部・球形）』

宇宙空間での活動拠点であり、研究、睡眠の空間。科学機器、地上波放送を聴くための全波ラジオ受信機、応急処置キットなどが装備されている。

『帰還船（中部・釣鐘型）』

打ち上げ時と帰還時に乗り込む。降下のための制御装置、無線機器、生命維持装置、パラシュートシステムなどを搭載。帰還時には宇宙空間で軌道船と機械船を切り離し、この機体だけで大気圏再突入を行うため、空力加熱から保護する遮熱コーティングが施されている。

『機械船（後部・円筒形）』

メインエンジンや推進剤を搭載。方向制御、運動制御システムや無線通信ユニットなどもある。外部には大きな太陽電池パネルが二枚設置されており、飛行中に左右に展開する。

操縦は基本的には完全自動だが、全幅の信頼を寄せられるものではない。緊急時には手動操縦に切り替え、電子機器を操って危機を乗り越える。ランデヴーとドッキングの腕前を磨く必要があり、船外活動は状況判断が重要になる。そして、共和国の宇宙船として初めてコンピューターが搭載される予定だ。

もはや強きよう靱じんな肉体と精神だけが求められた時期は過ぎた。

宇宙飛行士として月を目指すならば、レフとイリナは限られた時間内で、つぎつぎと更新される最先端の技術と知識を習得していくしかない。

ふたりと同じ宇宙飛行士では、ミハイルが二回目の宇宙飛行を目指している。

昔は栄光だけを追い求めていた彼だが、宇宙船の窓から見た美しい地球に心を打たれ、純粋に宙そらの虜とりこになった。

そんなミハイルは二期生から「月にもっとも近い男」と評されている。万能で優れた資質を持っている上に、『史上初』という冠の付かない宇宙飛行士なので親善大使の役目も少なく、訓練の時間を取る余裕があった。

無論、飛行士たちが訓練を完璧にこなしたところで、宇宙船が月に着陸できるかどうかは開発現場次第なのだが。

「―みんな、どうしてるかな……」

遠くを眺めていたイリナがボソッとつぶやいた。

「まだ乾杯してるんじゃないか？」

レフが答えると、イリナはハッと顔を上げる。

「あっ、違うの。アニヴァル村のこと」

　共和国連邦内の旧リリット国にある山村・アニヴァルは、吸血鬼一族が暮らすイリナの故郷だ。人民を統制したい中央政府によって『呪われし種』は世間から隔離されているので、一般的な国民は村の内情をまったく知らない。

　しかし、先の世界大戦時に人間の軍隊によって蹂じゆう躙りんされた暗い歴史は知られていて、イリナの両親も残酷に殺されたと、レフは彼女自身の口から聞いていた。

　そんな故郷についてイリナは全然話さず、レフからも軽々しく話題を振れなかった。

　だから、今何を思っていたのか気になるし、少々心配にもなって訊たずねる。

「どうした。珍しいな」

「これを着てたら、思い出しちゃって……」

　イリナは民族衣装サデイエのスカートの端を指でつまむと、切ない眼まな差ざしを夜空に向ける。

「夜になるとバルコニーに出て、星や月をよく見ていたの」

　酔いは醒さめたのだろうか。パン屋になると冗談を飛ばしていた陽気な彼女は影を潜め、月夜を司る姫のように闇やみに佇たたずんでいる。

　それでも、こんなときでないと故郷の話はできないので、レフは以前から気になっていたことを訊たずねる。

「村には一度くらい帰ったのか？」

「ううん。どういう顔をして帰ればいいのかわからなくて」

　いくら隔絶された土地とはいえ、彼女の偉業は風の噂うわさで届いているだろう。もしかしたら、アニヴァルからの手紙は検閲ですべて破棄されているのかもしれない。

　そのことを彼女に伝えると、「いいの」と首を横に振る。

「向こうも帰ってきてほしいなんて思ってないんじゃないかしら。

私、村を捨ててきたわけだし」

「捨てた……？」

「そうよ」

　鋭い夜風を受けた黒髪がふわりとなびき、尖とがった耳が露あらわになる。

「宇宙を飛ぶという夢のために、人間の街へ行く。村を焦土にした科学の力を借りるのよ。そんな真ま似ねは許されないというのに」

　実験体として囚とらわれていた彼女の覚悟をあらためて突きつけられ、レフは胸がチクリと痛む。

　イリナは北西の彼方かなたに目を向ける。暗くら闇やみの果てには険しい山脈が広がり、そのさらに向こう側にアニヴァル村がある。

「いくら私が人間を受け入れて、あなたたちに受け入れてもらっても、村のみんなはそうはいかない。『呪われし種』という言葉の呪いは強いの。でも、それでいいわ。村は村。私は私。私の故郷はこの地球。そして、この街で宇宙に夢を見るあなたたちと一緒に生きていくと決めたから」

　イリナは月の石の首飾りを外すと、月に乾杯するように高く掲げる。

「私のために」

　レフに向けられる彼女の瞳ひとみは情熱を秘めた緋ひ色いろに輝く。

「それが私の人生ジーズニよ。わかったかしら」

「ああ、乾杯だ」

　レフは蒸留酒の入ったグラスを掲げ、くいっと飲み干す。

　依然としてアルコールに弱いところ以外は、彼女もずいぶん変わった。

出会った頃は人間の上に立とうとして、孤独さや弱さを隠し、高貴な吸血鬼を演じている部分があった。

だが今の彼女は違う。

史上初の宇宙飛行士として各国を旅するうちに、世界の特権階級から最底辺までを肌で感じ、ひと回りもふた回りも強くなった。

そんな彼女が明白に変化したきっかけは、連合王国での、ふたりの女性との出会いだろう。

新血種族への差別が吹き荒れるなか、カイエは類たぐい希まれな能力でＡＮＳＡの中枢に食い込み、コンピューターで新時代を切り開いていた。

サンダンシアはイリナと同い年ながら超大国の女王として堂々と振る舞い、核戦争の不安を打ち払うメッセージを世界に向けて発信した。

イリナは同年代の彼女たちに相当な刺激を受けたらしく、帰国してから悔しそうに唇を噛かんだ。

『私は人間の作ったロケットで宇宙へ飛ばしてもらって、パラシュートで降りただけだよね。それなのに彼女たちと同じ舞台に立ってる。私と実験犬マールイの違いって、生きてたか死んでたか……それだけ。私には偉そうなことを言う資格なんてない』

世界的な名声に不釣り合いな自分が嫌だったのだろう。

共和国に戻ってからというもの、彼女は前以上に訓練や勉強に励み、名誉と名声に相応ふさわしい存在になろうとしている。

きっとなれるだろう。

そして自分自身もならねばいけないと、レフは決意する。

月面に降りるに相応しい人間になるのだと。

　木製ハーモニカで演奏される『フライ・ユー・トゥ・ザ・ムーン』が無線から聞こえてくる。

　それはラジオ放送ではない。

　連合王国の宇宙飛行士が、地球軌道上で誇らしげに奏でる旋律だ。

　一九六五年八月、連合王国がランデヴーに成功する快挙を達成。

「月への競争の勝者は？」という連合王国の大手新聞社が一九六一年より定期的に行っている世論調査で、四年間ずっとリードしてきた共和国はついに逆転を許した。

　共和国のランデヴーがじつは妖術であるという事実はまだ暴かれていないが、連合王国の勢いと秘密主義への疑念がこの結果を生んだのだ。

　当然、共和国の上層部は大騒ぎで、『宇宙開発計画の見直しについて』という題目での臨時会議を決定。

　サングラードにある城塞区画ネグリンの閣僚会議館に招集されたのは、各設計局の主任や軍の幹部、国防大臣。ヴィクトール中将も呼び出された。

『ライカ44』に残るレフたち飛行士勢は「見直しとは、どういう変更がなされるんだろうか？」とあれこれ想像しながら、切羽詰まったゲルギエフがとんでもない暴案を出さないように願い、ヴィクトール中将の帰還を待つしかない。

そして、一週間後。

飛行士一期生と二期生は訓練センターの大教室に集められ、ヴィクトール中将から会議の報告を受ける。暴案を警戒していたレフやイリナだったが、予想外の報告内容に、良い意味で唖あ然ぜんとなる。

宇宙開発計画全体にゲルギエフが改革の大おお鉈なたを振るったのだ。

まず、『真ミェチタ計画』が中止となった。この計画に関しては、前々から「政治宣伝のためだけで無意味」「予算と時間の無駄遣い」という反対意見が多かったので、妥当な決断と言える。

それでもあっさり引き下げたのは驚きだ。ゲルギエフは「中止は以前から検討していた」と言い訳をしたらしいが、連合王国のランデヴー成功が決定打だろう。

つぎに、有人月面着陸計画について。

本来ならばコローヴィンに一任すべきところを、ゲルギエフの親馬鹿で第五二局長の案も承認し、『月周回飛行』と『月面着陸』という重要な計画が分裂していた。

ここにメスが入った。

──第五二局の計画は廃止。全権をコローヴィンに委ね、一本化する。

ゲルギエフが息子を切り離した。不満を漏らす第五二局長だが、「宇宙船開発の進しん捗ちよくがゼロ」と追及されると反論できない。

結局、第五二局長は『軍事宇宙ステーション』の担当になり、彼が開発した月周回飛行用のロケットはコローヴィンが引き継ぐことで決着した。

これで上う手まくまとまったように見えるが、まだ大きな問題が残っている。

高い打ち上げ能力を要求される、月面着陸用のロケット開発だ。

連合王国は『クロノスロケット』の開発を順調に進めているが、コローヴィンの構想する『C-Iロケット』は何年間も迷走を重ねている。

『C-Iロケット』のエンジン開発担当者は、最初は共和国最高のロケット工学者・グラウディンだった。グラウディンは実績で指名されたのだが、この男は、若き日のコローヴィンに嫉しつ妬とし、冤えん罪ざいで鉱山送りにしたという後ろ暗い過去を持つ。

そんな因縁を持つふたりが、簡単に手を取り合えるわけがなかった。

エンジンの推進燃料について、コローヴィンは燃料にケロシン・液体酸素を推し、グラウディンはヒドラジン・四酸化二窒素を推す。双方に長所と短所があり、計画を進めるにはどちらかが折れるしかないのだが、このふたりの場合は科学的主張に加えて私し怨えんまであるため、いつまで経っても歩み寄りが見られなかった。

以前には、業を煮やしたゲルギエフがふたりを食事に招待し、関係性の改善を図ったこともある。だが、グラウディンは「ケロシンは性能が劣る」とコローヴィンの意見にまったく耳を貸さず、目も合わさない。

最初は我慢していたコローヴィンだったが、グラウディンがあまりに不ふ遜そんな態度を取りつづけるので、次第に熱くなり、こう言い放った。

「ヒドラジンにこだわるのは軍に取り入るためだろう？　戦略ミサイルに使えるからな！　だがあれは有毒で危険な物質だ！　アルビナールの大惨事を忘れたとは言わせないぞ!?」と。

一九六〇年一〇月、アルビナール宇宙基地で発射試験中のミサイルが爆発し、一五〇名近い死者が出た。二度と繰り返してはならない悲惨な事故だ。

それでもグラウディンは一歩も引かず、コローヴィンの考え方を貶けなす。反論の応酬がつづき、最終的にはゲルギエフも止められないほどの大喧げん嘩かになった。

「金属の空箱しか造れない素人が口出しするな」

グラウディンが罵ののしれば、コローヴィンが暴論を吐く。

「よしわかった！　ロケットはＡＮＳＡの製品を輸入する！」

「ならば連合王国に亡命しろ！」

　グラウディンは怒鳴って退場し、完全に決裂。困ったコローヴィンはやむを得ず、優秀な航空機エンジンの科学者を後任に指名した。

　しかし、航空機とロケットでは勝手が違うために何度も躓つまずき、『Ｃ-Iロケット』は何年経っても完成が見えていない。

　今回の臨時会議でも解決策は挙がらず、ゲルギエフは重々しげに唸うなって閉幕を宣言した。

　ヴィクトール中将は心底疲れたという顔つきをする。

「内紛をＡＮＳＡの連中に知られたら失笑の嵐だろうな」

「まったくですよ……」

　バートやカイエがあんぐりと口を開ける姿が目に浮かび、レフはトホホと額に手を当てる。

　どんよりとした空気が漂うと、ミハイルがパンパンと手を叩たたく。

「ロケットエンジンの件はともかく、『真ミェチタ計画』が中止され、チーフが月計画に専念できる体制が整いそうなのは朗報だと思う」

　彼の言うとおりで、現場にとって良い方向へ進んだのは間違いない。

　しかし、レフは一抹の不安感に囚とらわれる。

「俺たち飛行士のいない場所ですべてが決められてしまうのは、どうにかならないのかな……。もし『真ミェチタ計画は継続』と決議されていたら、『命綱なしの宇宙遊泳』という曲芸を誰かが演じねばならなかったわけだし……」

　イリナが呆あきれた様子で言う。

「でも、会議への参加を訴えても却下されるだけよね」

　ヴィクトール中将が付け加える。

「仮にレフが参加しても、意見が採用されることはまずない」

　宇宙開発現場の実情を知らされた二期生たちの顔に、困惑の色が浮かぶ。

　レフは国民的英雄で、宇宙飛行士内ではもっとも上の階級にいるが、物事を変えられる権力はない。焦ったゲルギエフが暴走した場合、いったい現場はどうなるのか。

　考えれば考えるほど心配になり、レフはヴィクトール中将に訊たずねる。

「同志ゲルギエフは、まだ余裕がある雰囲気でしたか？」

「会議の最初は陽気に張り切っていたが、話し合いがもつれるとムッと塞ふさぎ込み、暗い顔になっていた。こう言ってはなんだが……精神的に不安定なようだな……」

　政府批判にならないように、ヴィクトール中将は声を弱めた。

　共和国は『夢ミエチタ』を捨て、どこへ向かうのか。

　それは一国民がいくら考えてもわからない。

　連合王国との宇宙開発競争が戦争だというのならば、軍人であるレフたちは命令に従って飛ぶしかない。従わざる者は解雇されるだけだ。

　しかし、二期生たちが溜ため息いきばかり吐つくのを見ていると、レフは嫌な予感がしてならない。宇宙への期待を多かれ少なかれ抱いてやってきたであろう彼らは、わずか数か月で確実に失望したはずだ。

　この悩みは表に出てしまっていたようで、報告会が終わって宇宙市民住宅に向かっていると、イリナに「ずっと難しい顔してたわよね」と指摘された。

　レフは少し考えて、イリナに相談しようと決める。

「気にしすぎかもしれないんだけど──」

　と、二期生に対する懸念を告げた。

　すると。

「私もそう思う」

「君もか……」

　イリナは物憂げに言う。

「彼らが国の嘘うそを鵜う呑のみにして生きてきたのなら、余計につらいでしょうね」

　国民的新聞紙『真実イースチナ』も、国営放送ＴＡЦＣも、どちらも虚飾にまみれている。夢や希望が大きいほど、裏切られたときの衝撃も大きい。

「もし俺が二期生なら、きっと絶望する」

「私も。人間なんて信じられなくなっていたはずよ」

　副長官としての管理責任を果たさねば。レフは思いを強くする。

「できることは限られるけど、警戒しよう」

　ところが、懸念は一か月も経たないうちに表面化してしまった。

「二期生のひとりが体制に対する問題発言をしたため、追放処分となる」と報告を受け、レフは青ざめる。

　事件は二期生のみが出席する教養科目『社会主義に関する講義』で起きた。

　問題を起こした二期生は著名な大学教授に対して「なぜこの国は一党独裁で、連合王国のような二大政党制ではないのか」と疑問を呈した。

　問題発言である。

監視の厳しい共和国では発言ひとつで逮捕されるが、例外として、創造性が必要な場所──たとえば宇宙開発の現場では、ある程度の議論は許されていた。

ところが彼は、さらにゲルギエフに対する批判をぶちまけた。

「最高指導者が世界に向けて嘘うそを吐つくのは問題だと思う。宇宙遊泳の危機を隠し、連合王国だけでなく地球すべての市民を欺いている」

これが決め手となり、追放処分となった。

レフとイリナも公おおやけの場でかなり危うい発言をしてきたが、厳重注意のみで見逃されてきた。

理由はただひとつ、ふたりは『国家の英雄』だからだ。

連合王国の万国博覧会で共同開発を肯定したあとで、監視役として同行していた〔運送屋〕の彼女に、「もう一度やったら事故死もあるわよ」と警告された。

自分の考えを自由に言えないのは歯は痒がゆいが、共和国民である以上は受け入れるしかない。

今回の二期生の一件を受け、飛行士全員が訓練センターの会議室に集められ、ヴィクトール中将から厳しく忠告される。

「国家と指導者への批判は絶対にするな。命の保証はしない」

しかしヴィクトール中将は本気で怒っているわけではなく、「胃薬がいくらあっても足りん……」と苦々しくボヤく。

そして飛行士たちは、追放された二期生について「あいつの気持ちもわかる」と同情し、責めはしない。政府主導の『嘘ローシ』や、行き過ぎた秘密主義に不満を感じている者も多いのだ。連合王国の宇宙開発は全世界に堂々と公開されているのに、なぜ自分たちはこそこそ隠しているのかと、心のどこかで疑問や後ろめたさを覚えてしまう。

その閉塞感はレフもずっと抱いている。

たとえば、レフとイリナの新聞連載をまとめた本『宇宙への旅

路』もそうだ。

　宇宙飛行士の自伝という体裁を取っているが、連載の大部分を書いたのは、国内すべての出版物を事前検閲する組織『文献出版総局グラヴリート』の局員だった。

　レフとイリナが実際に書いた箇所は、宇宙飛行中の体験くらい。開発技術を隠す嘘と、甘い蜂はち蜜みつを塗りたくった国家礼賛は局員の手によるものだ。イリナの生い立ちは綺き麗れいに書き換えられ、人間への恨みつらみなど皆無で、「すばらしき共和国と偉大な指導者たちへの賛辞」で埋め尽くされている。

　発売当時、内容を知らされていなかったイリナは「ふざけないでよ！」と激げつ昂こうして出版差し止めを要求したが、当然はねのけられた。怒りの収まらない彼女をなだめようとしたレフは、「人間の馬鹿！」と八つ当たりされ、手のひらをガブリと噛かまれた。

　そんな嘘うそだらけの『宇宙への旅路』だが、唯一の共和国公認本なので、世界中の人々はこぞって買い、真実だと思い込んだ。そういう意味では、共和国の戦略は成功しているのだろう。最初は怒っていたイリナも否定するのが無駄だとわかり「もういい。つぃるにとらきょーわこくばんざーい。げろぎえふばんざーい」と諦あきらめてしまった。

　また、この本に関して、レフはひとつ大きな不満がある。

　万国博覧会のあと、レフがバートとカイエに向けて「改訂版を出す予定があるので、あなたたちとの出会いを書いてもいいですか？」と訊たずねたところ、「もちろんです！」と快諾してもらえたので、イリナと一緒に張り切って原稿を書いた。だが、連合王国に対する好意的な部分が検閲で引っかかり、全部削除されてしまった。

　結果的に約束を破った形になり、レフもイリナも連合王国の同志に対して、とても申し訳ないと思っている。しかし謝罪もできないので、彼らが事情を察してくれることを願っていた。

　出版物への規制は、宇宙開発関連以外でも非常に厳しい。

　国内で流通するすべての出版物は同人誌も含めて検閲対象になり、不適切と判断されたものは発禁処分となる。文学でも芸術で

も、市民は本を自由に読めない。

しかし、果敢にも規制に反抗する人々が多く存在する。彼らは発禁本を複写・製本し、人から人へと極秘に流通させる非合法の手段──通称『地下出版サミズダート』を使う。

国内にあるタイプライターや複写機はすべてが当局の管理下にあり、地下出版は処罰される危険性が高いが、自由の志士たちは執念で監視の網を潜くぐり抜ける。カーボン紙を使って書き写し、写真を撮って複製するなどの手作業で製本し、頒布する。

本だけではなく、音楽も規制の対象だ。

連合王国側の文化であるジャズやロックは、ジャンルそのものが「敵性音楽」と指定されていたが、ゲルギエフが寛容だったので当局も厳しく取り締まらなかった。公園からジャズの生演奏も聞こえたほどだ。

しかし二～三年前から、国家体制を脅おびやかす自由主義的音楽事件が起きていた。

全世界で爆発的な人気を誇る四人組ロックバンド『ザ・ビーズ』が、鉄のカーテンの隙間から、共和国内にじわじわと侵入してきたのだ。

政府が彼らの音楽を禁じても、ラジオの周波数を外国の局に合わせれば雑音が混じるが聴けるので、恋愛中心の歌詞と明るく親しみやすい楽曲は共和国の若者を虜とりこにした。

レフは親善大使として各国を回るなかで、彼らの人気を目の当たりにして唖あ然ぜんとしたことがある。宇宙飛行士がいくら英雄視されても、ファンが歓喜のあまり失神などしない。

人気絶頂のバンドのメンバーが宗教批判をして連合王国で叩たたかれ、今後のコンサート活動のいっさいを中止したが、それもまた共和国の若者に熱く支持された。

レフもイリナも彼らの音楽を気に入り、外遊先でレコードを買って帰ろうとしたところ「禁制品だ」と持ち帰るのを止められた。敵対文化の自由な精神や、祖国とは違う世界の存在が知れ渡ると困るのだ。

市民を統制したい政府は『ザ・ビーズ』を徹底的に弾圧する。

レコード所持者を摘発し、歌う者を捕らえ、長髪を真ま似ねる者の髪を剃そる。国営通信ＴＡЦＣは名指しで非難する。「堕落した音楽軍団『ザ・ビーズ』の蜂毒は精神を汚染する。演奏を見た者は泣き叫んで失神する」と。

それでも共和国の若者は自由への憧あこがれと渇望から彼らを求める。

外国のラジオ放送を聴き、録音し、病院のゴミ箱から拾ったレントゲン写真をレコードに加工して闇やみ取引で売買する。外国のラジオ放送では「西側の音楽」だけでなく、「嘘うそ偽いつわりのない報道」や「発禁指定された文学作品の朗読」も楽しめるので、当局は妨害電波を放って対処する。

しかしどれだけ壁を築いても、蜜蜂ビーズは軽々と飛び越え、大衆を刺して回る。

イリナも蜂毒に冒されたひとりで、彼らの歌を口ずさむことがままある。「当局に目をつけられるから気をつけた方がいい」とレフは注意するのだが、「無意識よ」と悪びれる風もない。

「異常な国家体制に付き合ってたら息も吸えなくなるわ。レフもそう思うでしょ？」

「思うけどさ……」

共和国の片田舎で生まれ育ったレフは、宇宙飛行士になるまでは「規制で縛られるのは当然」と思って生きてきた。

しかし、親善大使として世界を回れば回るほどこの国は異常だと思い知らされ、そして、その異常さに市民も気づき始めている。

とはいえ、自由に満ちた連合王国での、新血種族に対する差別も異常だとレフは感じて、いったい何が正しいのかわからなくなる。

それはイリナも同じらしい。

親善大使として二〇か国目を回ったときに「どこに住むのが一番快適で幸せなのかよくわからないわ」と困惑を浮かべた。それでもやはり、「共和国はおかしい」という意見は一致していた。

追放された二期生についての話が終わると、ミハイルは淡々と思いを口にする。

「いつか共和国が崩壊して、隠されていた真実がすべて明らかにされたら、世界中の人たちは苦笑いするだろうな」

こう思っているのは彼だけではない。公おおやけの場では口にしないが、レフやイリナ、ローザを含め、宇宙飛行士たちは皆、宇宙開発の真実の公表を願っている。

その気持ちはヴィクトール中将も重々承知しており、冗談で返す。

「胃薬を増やすことを言うな。薬代を請求するぞ」

するとイリナが思案顔で言う。

「でも今のままだと、本当に月に到達しても、『捏ねつ造ぞう』と疑われるんじゃないかしら」

皆の乾いた笑いがむなしく響いた。

夏草に纏まとわりついた暑気を雨が洗い流すと、蟋コオ蟀ロギの羽音が優しく響く夜が訪れる。短い夏が終わり、秋となった。

一日の職務を終えたレフはまっすぐ家に帰らず、ジャズバー『ズヴェズダ』に向かう。残業があったせいで午後一〇時を回っており、道行く人影はまばらだ。

ジャズバーには、以前はイリナとよく行ったが、副長官に昇進したときにヴィクトール中将から「教官の男女が勤務時間外に頻繁に会うのは、職務上好ましくない。候補生にも示しがつかない」と注意された。確かにそのとおりだとレフもイリナも納得し、ふたりで行くのは控えている。

そもそも最近は趣味で行っているわけではない。宇宙開発に関する論文を読んだり、航空雑誌を読んだりと業務外の勉強をするためだ。

新居は広々としていて眺めも良く気に入っているが、快適な反面、一度部屋に入ると集中力が切れてしまうことが多々あり、帰る前にできるだけ日課をこなすように心がけている。

真っ赤に塗られた樫の扉を開けると、酒の香りと紫し煙えんとともに、テナーサックスの甘い音色が外へ流れてきた。

『フライ・ユー・トゥ・ザ・ムーン』だ。

宇宙開発の応援歌として連合王国で愛聴されているこの曲は、共和国では闘争心を焚きつける音楽という位置づけだった。しかしレフにとっては月への想いを感じさせてくれる素敵な曲だ。

軽い飲み口の果実酒を片手に、人のまばらな奥へ進む。

レフがよく座る片隅の席を見ると、今夜は先客がいた。

薄暗い洋灯ランプの下、色素の薄い白金色の髪の若い女性がひとり、気だるげにグラスを見つめている。

「……え？」

レフは一瞬目を疑った。

ローザだ。

業務後にそのまま来たらしく、軍の長袖そでシャツを着ている。

ここで見かけたのは初めてだ。祝宴以外の場で彼女が酒を飲んでいるのは記憶にない。

レフは声をかけようと一歩近づいたが、彼女の横顔を見て、足を止めた。

頬ほおに悲しみの色が浮かんでいる。

何かあったのだろうか？

話しかけるべきか、それとも、気づかなかったふりをして離れた席に座るか迷ってしまう。相手が男性なら「どうした？」と迷わず声をかけるのだが、物憂げな女性に対してはどうやって接したらいいのかわからない。

と、そのまま一〇秒ほど突っ立っていたところ、顔を上げたローザと視線がぶつかった。

「あっ」とローザはびっくりしたように目を泳がせたが、平静を装おうとしたのかパッと微ほほ笑えみ、レフに向けて軽く手を挙げる。

立ち去れなくなったレフはおずおずとローザに近づく。

「や、やあ。ひとり……？」

「見てのとおりよ」

ローザは氷だけが残っているグラスに目を落とす。目元はほんのり赤く染まり、瞳ひとみは濡ぬれたように潤んでいる。

レフはとりあえず隣に腰を下ろそうとしたが、彼女の方が先に席を立った。

「……話があるの。ちょっと散歩しない？」

深刻そうな彼女の誘いを断るわけにはいかない。手にしていた果実酒を急いで飲み干すと、彼女と店を出た。

ネオンの消えた路地を抜けて、街がい燈とうの灯ともった白しら樺かば並木をゆっくりとした歩調で進む。

ローザはかなり酔っているのか、足元がふらつき、ときどきレフ

にぶつかりそうになる。

「大丈夫か？」

「ええ……」

　話があると言ったローザだがずっと黙っている。レフからは訊きにくいので、気まずいような沈黙がつづく。

　ひんやりとした風が白樺の葉をさわさわと鳴らす。

　舗装路を歩くふたりの靴音だけが静かに響く。

　淀よどんだ夜空を見上げると、細くて黒い雲が星座を切り分けるように棚引いている。

　そして、並木道の終わりが近づく。

　ここまで来ても、何も話していない。

　悩みの相談なら乗ってあげたいが、さて、どうしたものか。

　歩きながら、レフは横目で窺うかがう。

　すると、ローザはゆるやかに足を止めた。そして、目を伏せたまま静かに口を開く。

「私……」

「ん？」

「ミハイルと結婚する」

「けっこ……えっ!?」

　思いもよらぬ単語が飛び出して、レフは思考が追いつかない。

「ま、待って。結婚する？　ミハイルと？」

「そう。結婚することになった」

　嘘うそか冗談かと思ったが、彼女の目つきは真剣そのものだ。ふたりがそんな関係だったとは全然気づかなかった。

「びっくりしたよ……！　おめで――」

　刹せつ那な、レフは強烈な違和感に襲われて言葉を呑のんだ。

　ローザの表情は強こわ張ばり、唇が微かに震えている。

　彼女は祝福を求めていない。

　バーで飲んでいたときから様子がおかしいが、言いにくい事情でもあるのか？

　レフは慎重に探りを入れる。

「いつ、結婚を決めたんだ……？」

「さあ……」

「もしかして、ミハイルが勝手に届け出を……？」

「そんなわけないでしょ……」

　どういうことだ？

　疑問が膨らみ、レフが首をひねると、ローザは強い口調で吐き捨てる。

「政府の命令」

　ガツンと頭を殴られた思いだった。重い表情の理由がわかった。

　つまり、それは――

　レフは恐る恐る、その言葉を口にする。

「強制結婚か？」

　ローザは濁った目でこくりと頷うなずく。

「ヴィクトール中将が反対してくれたみたいだけど、覆らなかったそうよ」

　この国では、結婚は政府の『命令』の対象に入っている。一般市民への命令はきわめて稀まれだが、婚姻登録が当局によって強制執

行されるため、逃れるすべはない。

　だから、彼女はずっと複雑な表情をしていたのだ。ローザとミハイルが望んだ結婚ではないのだから。

　しかし、同期のふたりが強制結婚の対象になるなんて。まだ信じられないレフは、悪いと思いつつもローザに訊たずねる。

「なぜ、君たちがそんな目に遭うんだ？」

「『宇宙飛行士夫婦』の構想ですって」

　合点がいった。

　祖国のために、生いけ贄にえになってくれというわけだ。

　ローザは大げさに肩をすくめる。

「結婚ならば事故の危険はないし、予算をかけずに宣伝できる。連合王国には女性の宇宙飛行士はいないから、絶対に真ま似ねできない。結婚ならば全世界から祝福してもらえる。宇宙飛行士二世の誕生も期待できる。いいことずくめってわけ」

　この国の方針として理解はできる……が、こんな話題作りにどれほどの価値があるというのか。

「俺たちを利用するばかりで……理解の範はん疇ちゆうを超えてるよ」

　レフが苛いら立だち気味に息を吐くと、ローザが「待って」と首を横に振る。

「誤解しないで。びっくりしてるし、まだ受け入れられないけど、私はこれでいいと思うことにした。私が『人間女性初の宇宙飛行士』という栄誉をもらえたこと自体、国家戦略の一環だから」

　まるで自分に言い聞かせるような勢いで彼女は言った。

「そりゃ、宇宙飛行はそうかもしれないけどさ……」

　どうにも納得できないレフに、ローザは少しだけすっきりしたような顔を見せる。

「これは、まだミハイルにも伝えてないんだけど……私、強制結婚とは関係なく、飛行士を辞めて現場を退しりぞくつもりだったから、ちょうどいい機会かなと思ってる」

「辞める？」

　ローザは自じ嘲ちようめいた苦笑いを漏らす。

「だって、二期生に女性がひとりもいないのは、私の宇宙飛行が散々だったからだもの」

　すべて隠いん蔽ぺいされたが、ローザは宇宙飛行のあいだ、ずっとひどい目に遭っていた。

　彼女が搭乗したのは、『偽のランデヴー』をするためにミェチタIII号の後続機として打ち上げられたミェチタIV号。

　ランデヴーに見せかけてテレビ中継を成功させたところまでは良かったが、そのあと、テレビに映らなかったところでいくつもの試練が彼女を襲っていた。

　異常な宇宙酔いで意識が朦もう朧ろうとなったローザは船内で嘔おう吐とし、帰還に向かうはずが制御プログラムの誤作動で地球から離れ、パニックになって死の恐怖を何度も泣き叫んだ。誤作動は修正されて地球に生還できたものの、着陸時には顔面を激しく打ちつけるなどの怪け我がをした。最悪な飛行となり、コローヴィンは不具合を謝った。

　しかしローザは政府の隠蔽の方針に従い、記者会見で「すばらしい飛行体験だった」と全世界に嘘うそを吐ついた。

　その後、非公開の中央委員会で、上層部によるローザの評価がなされた。

　嘔おう吐とやパニックの原因が機器の不具合だったという不幸は考慮されず、イリナ、レフやミハイルと比べて彼女の評価は著しく低かった。それゆえ、『人間女性初の宇宙飛行士』が誕生した以上、体力面で劣る女性を二期生以降に入れる必要はないという判断が下されたのだ。

「しかも私がやったのは偽のランデヴーだし……嘘ばかりで、誇れるものがないのよね」

しょぼんと肩を落とすローザをレフは励ましたいが、慰めの言葉は彼女には似合わない。

「ちょっと、飲みすぎた？」

あえて軽い調子で声をかけると、ローザはハッと顔を上げて、バツが悪そうに口元に苦笑を漂わせる。

「……あのバー、初めて行ったんだけど、なかなかいい場所ね」

「俺は常連だけど、ミハイルもよく来るよ。彼に美お味いしいお酒を教えてもらうといい」

「そうするわ。それで、結婚の件だけど、明日、みんなには正式に伝えられると思うから、それまでは内緒にして」

ローザは人差し指を立てて唇に当てる。

「わかった。秘密にしておくよ」

強制結婚を告げられたとき、ミハイルがどういう反応をしたのか気になったが、発表されるまでは触れるのをやめておこう。

「じゃあ、帰ろうか」

レフとローザは白しら樺かば並木を戻り、宇宙市民住宅へ向かう。

まもなく日が変わる時刻なので人通りはまったくない。秋が近づくと薄手の軍服では肌寒く、レフは襟を立てて亀のように首を引っこめる。すると、並んで歩くローザに恨めしそうに見られる。

「誰にも話すつもりなんてなかったのに、いきなり現れるから……」

「いやいや。こっちこそ、びっくりしたよ……」

「でもね、バーに来たのがあなたじゃなかったら、きっと黙って立ち去ってた」

そう言ってローザは星空を見上げ、遠い目をする。

「ふたりきりで話したのって、ずっと前、宇宙飛行士の選抜試験に

失敗したとき以来かな……」

「そんなこともあったな。炭酸水を君がおごってくれた」

　パラシュート降下試験で気を失ってしまったローザを、レフは身を挺していして救った。その帰途、彼女は隠していた弱さをレフに打ち明けた。

　男性に負けたくない一心で訓練に励み、『サングラードの白しろ薔ば薇ら』の異名を獲得するまでに至ったけれど、宇宙飛行士になるための特訓で体力の限界を思い知らされた、と。レフはそのとき、初めて知った。自尊心が高くて周囲を寄せつけない彼女も、じつは星形の茴香芹チヤービルに夢を見る、繊せん細さいな心を持つひとりの女性だったと。

　軽いはにかみを浮かべて、ローザはポソッと言う。

「助けてくれて、本当にありがと……」

　あらためて感謝されるとむず痒がゆい。

「昔の話はいいって」

「あなたにとっては昔かもしれないけど、私は今もつづいてる」

「ん、今も……？」

　ローザは立ち止まると胸に手を当て、揺れる瞳ひとみを下に向ける。

「ミハイルは一緒に訓練をしてきた同志で、すばらしい宇宙飛行士で、尊敬してる。でもね……私にだって、言えない想いがあるの。伝えたいけど、ずっと我慢してた……。言うのは、違うと思ったから。でも今日、私は、祖国のために……」

　ローザは服の胸元をぎゅっと握りしめ、声を絞り出す。

「祖国のために……想いを捨てる」

唇を強く結び、込み上げるものを堪こらえる彼女。

言いたかった気持ちはレフにも伝わる。しかし、返事はできない。今この瞬間、何を言っても彼女を傷つけてしまうだろう。

返事の代わりに、彼女の背に、軽く手を当てる。

君の幸せを祈る、と。

星の瞬またたきが聞こえそうな静けさのなか、初秋を告げる夜風は颯さつ々さつと草葉を鳴らし、ふたりの背中から胸へひゅうと吹き抜ける。

やがてローザは一歩前に出ると振り向き、しっかりとした強い視線をレフに投げる。

「ごめんなさい。忘れて」

レフは何も言わず、深く頷うなずく。

再び歩き出すと、ローザの足取りも声色も幾分軽くなっている。

「レフ、ひとつ訊きいていい？」

「ああ、何でも答えるよ」

「イリナとの強制結婚を命じられたら、どう？」

「っ!?」

あらぬ方向から銃撃を食らったみたいに心臓が跳ねる。

「ど、どうって訊かれても、結婚とかそういう関係じゃないし……」

「もう一度言うわね？」

ローザは棘とげのある声でレフを刺す。

「イリナと強制結婚」

しどろもどろになるレフ。

「だ、だったら、結婚するしか……」

「よろこんで？」

「いや、そんなことは！」

「……」

　無言で見つめてくるローザの圧力に抗しきれず、レフの口からぼろぼろ言い訳が零こぼれる。

「だって、イリナが何て言うかとか、いろいろあるだろ？　あいつ、強制結婚なんて絶対に認めないって！　人間の決めた規則なんて私には紙かみ屑くずだとか何とかって……！」

　手をぶんぶん振って否定すると、ローザはアハハと吹いた。

「焦りすぎよ。あなたって本当に―彼女が好きなのね」

「ンなっ、今、何て……」

「幸せになってね」

　ローザはくすくす笑いながら、目尻に溜たまった涙を指で拭ぬぐい取った。

　そして翌日。訓練センターの会議室にて、ヴィクトール中将の口から『ミハイルとローザの結婚』が告げられる。

　飛行士たちはロケットの排気管が鳴るようにどよどよと騒ぎ、イリナも「け、けけ、結婚ッ!?」とレフの服の袖そでをぐいぐい引っ張って目をしばたたかせる。

　だが、当事者であるミハイルとローザは受け入れて落ち着いており、皆も強制結婚がまかりとおる国家だとは承知しているため、ざわめきはすぐに収まった。

　ヴィクトール中将は気遣わしげに咳せき払ばらいをすると、眉み間けんに皺しわを寄せる。

「私は監督責任者として、お前たちの人生を預かっている身であ

る。なので、通常ならば結婚はうれしいのだが、強制である今回は個人的な感想は控え、決定事項だけを告げる。結婚登録式は来年、一九六六年春の予定。政府の後援で盛大に行う。『立会人』にはレフとイリナが指名されている」

　初耳でレフはどきんとなり、イリナと顔を見合わせる。これはミハイルとローザも知らなかったようで、目を丸くしていた。

　立会人は式で重要な役割を果たす。

　結婚登録証の署名は新郎新婦だけでなく、「同世代かつ同性の友人」の立会人二名を合わせた四名分が必要という規則があり、さらに立会人は式の前や披露宴でも盛り上げに一役買う。

　宇宙飛行士の立会人という政治宣伝には引っかかりを覚えるレフだが、立会人自体は光栄な務めであり、レフもイリナも快諾した。

　するとセミョーンがニヤリといやらしい笑みを浮かべてレフに問う。

「立会人のふたりの結婚はいつなんだ？」

　やはり来たか。レフはうんざりと額に手を当てる。昨夜のローザとの一件から、この手の質問が飛んでくるだろうと予測していた。

　一方、無防備だったイリナは直球をぶつけられ、顔を真っ赤にする。

「ありえないっ！　なんで私が人間のレフなんかと結婚しなきゃなんないのよ!?」

　レフは用意していた回答で防壁を張る。

「そうだよ。人間と吸血鬼の結婚なんて聞いたことない」

　ところがミハイルがすぐに糺ただしてくる。

「新血種族を考えれば、ふたりの結婚はおかしくない」

「うっ……」

　防壁はあっさりと突破された。そこへローザがさらに乗ってく

る。

「お似合いだと思うけど」

　イリナがわめく。

「ローザまでやめてくれる!?　強制結婚なんて絶対に認めない！　人間の決めた規則なんて私には紙かみ屑くずよ！」

　ハッとなるレフ。昨夜、喩たとえとしてローザに言った内容とまったく同じだ。レフはそっとローザに目を向けると、温かな苦笑いを返された。

　汗だくだくになったイリナは取り澄ました顔つきになり、「訓練してくるわ。時間の無駄」とひとりで退出。

「ルミネスク鬼教官の弱点はレフさんか……」と二期生に噂うわさされて気まずいレフは、居心地の悪さを我慢しながらミハイルの様子を窺うかがうが、彼はとくに感情の起伏もなく、強制結婚に対する本当の気持ちがわからない。

　べつに追及しなくてもいいのだが、やはりどうしても気になるので、会議が終わるとミハイルに「話がある」と声をかけ、訓練センターの裏手に呼び出した。

「大変だな、突然のとんでもない命令で」

　レフが心配すると、ミハイルは嘯うそぶく。

「『史上初の宇宙飛行士夫婦』だ。これで俺もようやく『史上初』の冠が手に入るな」

「あのさぁ……」

「冗談だよ。昨日、命じられた直後に彼女には謝った。相手が俺で申し訳ないと」

　ミハイルは眉まゆの根を曇らせる。皆の前では見せなかった表情だ。

「彼女には彼女の人生があっただろうに、俺が割り込む形になってしまった。だが、それが使命ならば仕方ないと割り切ることにし

た」

「割り切れるのか……？」

「愚問だな」

　苦笑いを含んで彼はそう言った。

　ふたりが幸せになるといいのだけど……と、レフが心のなかで祈っていると、ミハイルに肩を叩たたかれる。

「俺と彼女の問題だ。気にするな」

「いや、気にするよ。だって君とローザだ……」

　ミハイルは真率な目をして深く頷うなずく。

「彼女とはしっかりと約束した。結婚する以上は君を幸せにすると。いい加減な気持ちで一緒になるつもりはない。彼女は美しい心を持った同志であり、すばらしい女性だと思っている」

　この結婚に対する真しん摯しな想いがわかり、レフは身体からだがほぐれるような安あん堵どを覚える。

「それでも昨日の別れ際、彼女の顔が暗くて心配だったんだが……今日の様子を見る限り、誰かへの未練は断ち切ったようだな」

　ミハイルの視線が妙に鋭くなった。

「ん……？」

　レフは顎あごに手を当ててすっとぼける。

「へぇ……誰だろ……？」

　するとミハイルはおもしろくないこと夥おびただしいという具合にレフを見据える。

「誰だろうか」

「あー……」

　顎あごに当てた手をそのまま上にずらして、目元を覆う。

　まいったな。

　言い訳も何もできない。

「……うん。でも、ミハイルはすばらしい宇宙飛行士だって言ってたぜ」

　ニコッと笑ってみる。

　するとミハイルもニコッと笑い返した。

「そうか、そんなことを言ってたんだな」

「あと尊敬もしてるって！」

「そうか」とミハイルは言いながら、いきなりレフの身体からだに腕を回し、力強く締め上げる。

「痛ぁ！　ちょっ！」

　軍隊格闘術サンボの関節技だ。

「このくらいは罰、許されるだろ？」

「俺は、何も┉ッ」

　逃れようとすると別の関節をきめられ、レフは大地に崩れる。ミハイルは技をかけつづけ、レフの身体がギシギシと悲鳴を上げる。

「待って、まって……」

「ふっ、君とは一生涯戦うことになりそうだな。月への道は譲らないぞ」

「へ┉」

　平和的に戦おう……と訴えようとしたが、口から吐き出されたのは息だけで、レフの意識は母なる大地に埋もれていった。

結婚騒動が起きる裏で、月への道は着々と築かれている。

月の女神という名を与えられた無人月探査機『ディアナ』。これまで、月探査に関する『史上初』はすべて、コローヴィンが指揮する『ディアナ計画』が達成してきた。

一九五九年、無人月探査機『ディアナII号』は月へ到達。『ディアナIII号』は月の裏側の写真撮影に成功。

そして、結婚騒動が起きる裏で、史上初の『無人月探査機の月面軟着陸』に挑戦している。

この計画はとても重要だ。

軟着陸を達成して月面の近接撮影をしなければ、有人宇宙船での着陸は実行に移せない。なぜなら、遠方からの写真だけでは月面が固い岩盤だと確定できないからだ。もしも月面が塵ちりの層だった場合、月着陸船はまっすぐ着地できない。そうなると搭乗員は帰還不能になるので、人類は月面に降りられないのだ。

また、探査機の軟着陸は、神話への挑戦でもあった。

古来より月は空想や信仰の対象で、古今東西で多種多様な世界が描かれてきた。その月へ降り立ち、現実の月世界を写真に収めることは、コローヴィンの壮大な夢のひとつだ。

しかし、計画は上う手まくいっていない。

軟着陸を目指したディアナはIV□V□VI号と三機連続で失敗。惨さん愴たんたる結果に軍部は鼻息を荒くする。「月計画など打ち切って、コローヴィンを軍事衛星の開発に専念させろ！」と。

つぎの『ディアナVII号』で成功させねば、もうあとがない。

だが、コローヴィンは有人飛行計画も進めており、無人探査計画だけに時間を割けない。さらに体調も悪化しており、ひとりで抱えられる許容量を超えている。

そこで彼は大きな決断をする。無人探査機の開発を、信頼できる技術者に引き継ぐことにしたのだ。

「同志諸君に私の愛娘を託したい。諸君ならば彼女を月へ導けると確信している」

天才科学者に期待された技術者は士気が最高潮になる。不眠不休で問題改善を試み、ロケット側の改造にも着手する。地上での実験を繰り返し、成功の手応えを得た。

そして――

一九六五年一〇月四日。一九五七年に史上初の人工衛星『パールスヌイ』の打ち上げが成功した記念日に、『ディアナVII号』で月面軟着陸に挑んだ。

過労で入院していたコローヴィンは医者の警告を無視して病院を抜け出し、アルビナール宇宙基地の管制室に現れ、指揮を執る。

宇宙への打ち上げは問題なく成功。『ディアナVII号』は月を目指し、三八万キロメートルの道を四日間かけて旅をする。

月面の目的地は広大な『嵐の大洋』。

果たして、軟着陸は成功するのか。

注目しているのは、管制室の面々だけではない。

遠く離れたレフたちは訓練センターのホールに集まり、成功を祈る。イリナは月の石の首飾りを胸元で握りしめる。共和国政府もＡＮＳＡも、両国の市民も、世界中の人々が月世界の正体を待ち望んでいる。

管制室のコローヴィンは成功を知らせる信号をひたすら待ちつづける。

息を吐くことすらもためらわれる、永遠とも思える沈黙のなか──

レコーダーの針が動く。

信号が記録される。

「きたぞ……！」

記録はつづく。誤作動ではない。

信号が届く。

「止まるなよ……！」

成否はまだわからない。月の女神は微ほほ笑えむのか。

職員たちは固かた唾ずを呑のんで見守る。

針も記録も止まることなく、順調につづいている。

「成功したか……!?」

やがて、不安と期待は確信に変わる。月面からの便りには、ごつごつとした荒野が写っていた。塵ちりの層ではない、着陸可能な固い岩盤だ。

空想世界に別れを告げるときがきた。

コローヴィンは立ち上がり、拳こぶしで天を突く。

「成功！　成功だ！」

技術者や職員たちは抱きしめ合い、歓喜の雄叫びを上げる。同志に囲まれたコローヴィンは頬ほおを上気させる。

「諸君のおかげで人類の念願を達成した！　しかし立ち止まるな。今日の成功は明日への一歩にすぎない。つぎは『ディアナVIII号』を月の周回軌道に乗せる。だが、今日だけは、世界中の同志とよろこびを分かち合おう！」

職員から拍手喝かつ采さいを浴び、コローヴィンは両手を挙げて応える。

そのとき。

「―っ……」

彼の身体からだがぐらりと揺れた。苦しそうに胸を押さえると、床に突っ伏すように倒れる。

「チーフ!?」

歓喜の空気は一転、動揺に変わった。

夕空は薄墨色の朧おぼろ雲ぐもで覆われている。月が衣を纏まとうのは、素肌を見られて恥ずかしいからだろうか。

ディアナVII号の快挙により、世界中の人々は月面の景色を知った。しかし、指揮官が入院したと知るのはごく一部の関係者だけだ。

職務でサングラードを訪れたレフとイリナは仕事の合間を縫い、コローヴィンの見舞いに向かう。

心臓の発作で倒れた彼は、高官専用の高級病院に運び込まれた。大事には至らなかったが絶対安静で、現場への復帰は保留という診断を受けた。レフもイリナも一刻も早く見舞いたかったのだが、日々の業務に忙殺されて足を運べず、入院から一週間経ってようやく来られた。

病院の入院患者一覧表にコローヴィンの名はなく、『スミノフ教授』という物理学者を装っている。もし東の妖術師チーフデザイナーの病が公おおやけになると、国内の開発現場の士気は落ち、連

合王国に安あん堵どを与えてしまうため、絶対に隠さねばならないのだ。月への競争が決着するまでは―あるいは国家が崩壊するまでは、彼の存在は永遠に秘ひ匿とくされるのだろう。

　サングラードの街区に建つ高級病院は堅牢な七階建てで、スミノフ教授は五階の端にある個室に入院している。清掃が行き届いたリノリウムの廊下を歩きながら、イリナはぶつくさと文句を垂れる。

「あのおじさん、ポンコツのくせにすぐ無理するんだから。壊れても知らないわよ」

　ずいぶんな言い方だが、ただの照れ隠しだとレフはわかっている。コローヴィンが倒れたと聞いた日は「死んじゃったらどうしよう……」と涙目になり、眠れないほど心配している様子だった。

　かつて、実験体として廃棄されかけたイリナを、彼はゲルギエフを脅迫してまで救おうとした。それを知ったイリナは深く胸を打たれ、感激していた。両親を亡くしている彼女にとって、コローヴィンは親同然の存在だ。

　そんな気持ちは、いっさい態度に出さないが。

「チーフをポンコツ呼ばわりして、しかも許されるのは君くらいだな」

「ポンコツはポンコツよ。ロケット馬鹿のポンコツおじさん」

「頼むから、チーフの血圧を上げるなよ……」

　雑談を交わしていると、廊下の角を小柄な男性が曲がってきた。中折れ帽を目深に被かぶり、薄手のコートの襟を立てた男性は壁に手をついてゆっくりと歩いてくる。

　その姿にレフは見覚えがある。慎重に顔を隠しているが、滲にじみ出る風格と凄すごみは隠しきれていない。

「なあ、あれ……」

　するとイリナも気づいたらしく、小声で答える。

「ポンコツ……」

おそらく逃亡を図っている。これまでの入院で幾度となく脱出した前科があるので間違いない。レフとイリナは声を潜めてそっと近づき、小柄な男性の行く手を遮さえぎる。

「スミノフさん。どこへ行くんですか？」

レフが声をかけると、小柄な男性はピタリと停止した。帽子と襟の隙間から、眼光鋭い顔が覗のぞく。やはりコローヴィンだった。

「ちょっと一服。外で吸わないと怒られるんでね」

コローヴィンは懐から煙草たばこの箱を出す。

と、イリナが瞬時に煙草を奪い取り、ギロリと睨にらむ。

「病人でしょ！　このポンコツロケッ──もごっ」

レフはイリナの口を手で塞ふさぐと、周囲に聞かれないように小声でコローヴィンを説得する。

「現場に用があるなら俺たちが代わりに伝えます。お願いですから、今は安静にしていてください。廊下で騒いでいると医者が来ますよ。〔運送屋〕も見張っているかもしれません。窓のない地下室に縛りつけられたくはないでしょう？」

「翼竜ジラントよ。生意気を言うようになったもんだな」

コローヴィンは帽子のつばを上げ、目尻に深い皺しわを刻んだ。

広々とした病室には開発計画の書類や専門書が散乱しており、もはや仕事場だ。

レフとイリナは脇にあるソファから紙の束をどかして腰かけ、コローヴィンはおとなしく寝台に横たわる。

「家内と娘にはよく叱しかられるが、君たちにも怒られるとはな。だが、今が正念場だから、ゆっくりしていられないのだよ。せっかく月計画のすべてを勝ち取れたのに、寝ているあいだに奪われたらやり直しだ」

　心臓発作で運び込まれたコローヴィンだったが、入院の一番の理由は大腸にできた出血性のポリープを摘出するためだという。心臓が安定して回復を確認できたところで、今後数年間の万全を期すために摘出手術をするそうだ。

「ポリープくらいで大げさに入院などしなくてもいいんだがな」

　そうは言っても身体からだのあちこちにガタがきているのだから、無理は禁物だとレフは思う。しかし、家族が何度注意しても脱走するくらいだ。レフが言って聞くわけがない。

　だが、イリナはお構いなしに世話を焼く。

「もっとひどい病気な気がする。身体の隅々までちゃんと調べてもらって」

「調べた結果、ポリープだった。心臓の発作なら以前からの長い付き合いだ」

　イリナは眉まゆをひそめる。

「それだけじゃないと思う。だってこの病室、嫌な血の臭いが満ちてるの」

「私には消毒薬の臭いしかわからないな」

「あのね！」

　イリナはソファから立ち上がって、コローヴィンの枕元で話しかける。

「あなたって、宇宙船やロケットはネジの一本まで念入りに調べて、悪いところがあれば直すでしょ？　どうして自分の身体には無関心なの？」

「……ふむ、一理あるな」

　コローヴィンは納得したように頷うなずき、自分の胸を拳こぶしで軽く叩たたく。

「心臓が悪いので、鋼鉄製のポンプに取り替えようか。血液はケロシンだ。身体が燃えて活気が漲みなぎるだろう！」

「心配してあげてるのに！　そのまま月まで飛んでいきなさいよポンコツロケット馬鹿！」

　噛かみつかんばかりに荒ぶるイリナの両肩をレフは掴つかみ、枕元から引き離す。

「まあまあ。ここは病院だ。大きな声を出さないように」

「だってポンプにケロシンって……！」

　ムッとするイリナをソファに座らせ、今度はレフがコローヴィンを説得する。

「チーフ。身体からだを大事にしてください。今でも覚えています。俺が宇宙を飛ぶ前日、発射台であなたが胸を押さえて倒れた姿を……」

　思い出すだけでつらくなり、声が詰まってしまう。

　イリナも再び枕元に来て、強く訴える。

「ちゃんと再検査して。直感だけど悪い病気だと思う。脅しじゃないわよ。吸血鬼って味覚がない代わりに鼻が利くの。とくに血の臭いには敏感なの。わかった？」

　ふたりから責められたコローヴィンはやれやれと頭を掻かく。

「了解した。再検査を受けて、治るまで入院していよう。しかし、ただ寝ているわけにはいかない。月探査と新型宇宙船の開発については、ここから細かく指示を飛ばす。そのための人員を用意させる。これでどうだ？」

　イリナは鼻を鳴らして満足そうに頷うなずく。

「それならいいわ。でも、無名のスミノフ教授なんだから目立たないようにね」

　レフはホッとした反面、気がかりな点もある。

「ところでチーフ。病院を抜け出さなくてはならないほど、開発は遅れているのですか？」

　コローヴィンは不安を払いのけるように手を振る。

「『ディアナVIII号』は優秀な同志が必ず完成させる。年末に行われる予定の月周回飛行は成功するだろう。問題は有人飛行だ」

　そこまで言うと、むくりと上半身を起こす。

「新型宇宙船『ロージナ』だが、現在の試作品は、マネキンも載せてはいけない段階だ。打ち上げれば一〇〇パーセント失敗する」

「一〇〇パーセント……」

　レフとイリナが重苦しい顔になると、コローヴィンは晴れやかな声で言う。

「心配するな。『ロージナI号』の打ち上げ予定まで、まだ一年ほどある。それまでに完成させる目め処どは立っている。時間がかかるのは、あまりにも革新的で、私以外の技術者が戸と惑まどっているからだ。まあ、私に任せておけ。一〇〇パーセント成功させよう！」

　漲みなぎる自信はふたりに勇気を与える。

　ところが一転、コローヴィンは深刻な面持ちになる。

「目処すら立っていないものは、『Ｃ-Iロケット』だ」

　原因は聞かずともわかる。ロケット科学者グラウディンとの確執に端を発する遅延だ。

「奴がヒドラジンなどに固執しなければ現状はまったく違ったんだが。毒燃料の上に宇宙船を据えて、君たちを乗せられるわけがないだろう。もし漏れて爆発したら、どうやって責任を取るつもりだ。奴も軍部も、飛行士をロケットの部品か何かと勘違いしている」

　コローヴィンがケロシン燃料にこだわった理由を知り、レフは少し胸が熱くなる。

　しかし。

「いくら私が良いことを言っても、現実はこれだ」

　コローヴィンは呆あきれた様子で、枕元に置いてあった書類を取る。グラウディンの代役を任せた科学者が作った設計書だ。

「見てくれ。第一段に小型エンジンを三〇基搭載している。三〇基を同期させるなど正気の沙さ汰たではない。こんな妄想、二一世紀になっても不可能だ」

　イリナは首をかしげる。

「連合王国のロケットは、エンジンはどうなの？」

「大型エンジン五基を計画しているようだ。くわしく知りたければ、君たちがソファからどかした紙の束を見るといい」

　なんだろうと、レフとイリナは紙の束を確認する。

　手書きの設計書のようだ。

　表紙には『プロジェクト・ハイペリオン』『大型ロケット・クロノスV』『超大型ロケット・ギャラクティカ（開発中止）』とある。

「ん……？　これは……？」

　内容を把握した瞬間、レフの背中に汗がブワッと出た。

「ＡＮＳＡの計画書!?　こ、こんなものが手に入るんですか……？」

　イリナは訝いぶかしげにコローヴィンに目を向ける。

「私たちが知らないだけで、とっくにわかってたの？」

「落ち着きなさい。それは原本ではなく、私が作ったものだ」

「作った？」

「あれらを参考にしてね」

　と、コローヴィンは病室の隅の段ボールを指す。連合王国の大衆紙や航空専門誌、ＡＮＳＡの資料などが大量に入っている。

「あちらさんは秘密主義ではないので資料はいくらでも手に入る

し、諜ちよう報ほう機関からも多くの情報が得られる。それらを組み合わせれば、開発状況は想像できる。国は違えど、同じ地球上で、同時代に生きる人類が作っているのだよ。自動車は四輪、飛行機の主翼は二枚。相手はＵＦＯを作ってるわけではない」

　理屈はわかるが、紙の束に書かれた内容は、ひとりで導き出したものにはとても思えない。こういう凄すさまじさが『東の妖術師チーフデザイナー』と恐れられる所以ゆえんだろう。

　そこで、レフはふと気づいた。

「この設計書をもとに、連合王国と同じものが造れれば、上層部が躍起になっている競争に負けることはないのでは……？」

　レフの言葉に対し、コローヴィンは棘とげのある声で返す。

「どうだろうね。予算も人員も統率機関も、蟻ありと鯨くじらほど違うからな」

「そうでした……」

「それから、ひとついいかな。目先ではなく将来を考えたとき、ハイペリオン宇宙船よりも私のロージナの方が圧倒的に優れている。未来に残るのはロージナだ」

　きっぱりと断言する姿に科学者の矜持を感じ、レフは「同じものを造る」などつまらないことを言ってしまったと恥じる。

「すみません、余計な質問をしました」

「いや、君がそう思うのも無理はない。私の製品は未完成も甚はなはだしく、現場で指揮をせず、寝台に転がっているんだからな。こんな大事なときに、我ながら情けなくなるよ……」

　珍しく弱気を見せるコローヴィンに、イリナが温かみのある口調で諭す。

「でも、一〇〇パーセント完成させるんでしょ。ロケットだって、不可能が可能になるんじゃないの？　自信がないならケロシンを注射してあげるわ」

「ははっ、君は気持ちいいほどに辛しん辣らつだな」

　レフとしてはイリナが無礼すぎて毎度ハラハラするが、ふたりにはふたりの関係性がある。コローヴィンは彼女の指摘で反省したように、自分の額をコツンと叩たたいた。

「しかしだね、諜ちよう報ほう員の入手した設計書類を見る限りでは、同じものを造るかと問われると、私には疑問がある」

「もっと良いものが作れるから？」

　イリナが問うと、コローヴィンは少し唸うなり、もったいつけて答える。

「……まあ、疑問というか、私の勘違いかもしれないし、無名の教授が機密に触れるのは問題だからな、ここはＡＮＳＡのお手並み拝見といこう」

　ＡＮＳＡと聞いて、レフは、ぜひコローヴィンに伝えたかった願いを思い出す。以前『宇宙への旅路』の改訂版を執筆したとき以来、胸にしまっていた事柄だ。彼の科学者の矜持を感じた直後に言うべきではないかもしれないし、下へ手たしたら反国家的だと受け取られかねないのだが、この機を逃すと叶わないのではないかという想いがレフに発言を決断させる。

「チーフ。じつは俺、連合王国の万国博覧会に行ったとき、向こうの技術者と『チーフのロケットで連合王国の宇宙船を飛ばせたら最高だ』……なんて約束を交わしました」

　アッとイリナも話を合わせる。

「私もそれいいなって思ったの」

　ところがコローヴィンは「ん？」と眉み間けんに皺しわを寄せるので、レフは慌てて付け加える。

「非公式のやり取りで、個人的な希望です！」

　コローヴィンは複雑な表情を浮かべる。

「我らのロケットを差し出すのは難しいぞ」

「そうですよね……。すみません、ついその場の勢いで……」

「気持ちはわかるし、共同開発は良い考えだと思うが、むやみに口外しない方がいい。上層部には連合王国を敵視している連中も多いんだ。言わずとも、わかるだろう？」

「仰るとおりです……気をつけます」

　レフは首の後ろを掻かいて頭を下げる。突っ込んだ話をしたくても、注意されてしまっては切り上げるしかない。しかし、彼が共同開発について「良い考え」と言ったのは聞き逃さなかった。その言葉だけで救われる思いだ。

　軽く様子を見に来たつもりが長居してしまった。そろそろ帰ろうかと思ったとき、コローヴィンは枕の下から一冊の雑記帳を取り出した。

「これは何だと思う？」

　表紙に『我が闘病記』と書いてある。

「入院中の日記……？」

「私がそんなものを書くと思うかね？」

　コローヴィンは瞳ひとみをきらりと光らせる。

「闘病記は偽装。中身は、月へ行くための斬新な案だ」

「ええっ!?」

　レフは前のめりになる。

「どんな案ですか!?」

　イリナもぐぐっと雑記帳に寄る。

「見せて！」

「待て」

　コローヴィンは人差し指を口に当てて「静かに」と制する。

「これは病人が暇ひまを持て余して書いている妄想録で、未完成だ。敵に見つかるのは避けたいので偽装した。中身については、時

期が来れば君たちに明かそう」

「わかりました。楽しみに待ちます」

　今すぐに読みたい気持ちを抑える。彼の言う『敵』とはグラウディン陣営か〔運送屋〕あたりだろうが、もし中身を知っていると何らかの拍ひよう子しに口に出てしまう可能性があるので、知らない方がいい。イリナも理解したようで、名残惜しそうに雑記帳を見て口を尖とがらせ、「また見せてね」と諦あきらめる。

　コローヴィンは雑記帳を元あった場所に戻すと、不愉快そうな顔をした。

「ところで、先日、馬鹿げた話を聞いた。『宇宙飛行士夫婦』という構想があるそうだな」

「あ……ええと」

　言葉に詰まるレフの代わりに、ふくれっ面つらのイリナが不満をこぼす。

「くだらないわ。誰がよろこぶの？」

「いや、本当にすまない」

　コローヴィンは軽く頭を下げ、自分を諫いさめるような口調で言う。

「止めたいのだが、一介の工場長である私には手立てがない。君たちに謝っても仕方ないが……誠に申し訳ない」

　チーフに謝らせるのは間違っている。申し訳ないのはこちらだ。

「ミハイルもローザも、チーフの気持ちはわかってくれているはずです」

「それならいいんだがね」

　そう言ってコローヴィンは懐をまさぐる。何かを探しているようだ。

「これかしら？」

　廊下で奪った煙草たばこをイリナが見せつけると、図星だったようで、コローヴィンはバツの悪そうな笑みを浮かべる。

「帰る前に、病人の戯れ言にちょっとだけ付き合ってくれるか？」

「もちろんです」

　レフとイリナは畏まってソファに座り直す。

　コローヴィンは「よいしょ」と寝台の端に腰かけると、真剣な目つきでふたりを見つめる。

「ご覧のとおり、すっかりポンコツになってしまった私だが、昔は宇宙飛行を夢見ていた。自分で作ったロケットと宇宙船で無重力を体験し、宙そらから地球を見てみたいと思っていた。今でもその気持ちはあるが、この身体からだで宇宙を飛んだらおそらく生還できないだろう。だから、君たちに夢ミエチタを託す」

　切々と語っていたコローヴィンは、一度はにかんだように咳せき払ばらいをすると、語調を強めて話をつづける。

「私は政府の幹部にこう言いつづけてきた。『宇宙開発は国家のため、軍のため』と。しかし、大おお嘘うそだよ。この国で自分の思いを遂げるためには、舌の上どころか身体中に蜂はち蜜みつを塗らねばならない。甘ったるくて、胸むな糞くそが悪くなる」

　苦々しく顔を歪ゆがめてベーッと舌を突き出す。

「私は賞も金もいらないし、名前もスミノフで構わん。だが地位と勲章は絶対に必要だ。肩書きのない夢や希望は権力に踏み潰つぶされる」

　コローヴィンはゆっくりと立ち上がり、レフとイリナの前に歩み寄る。

　もともと小柄だった彼は病でさらに小さくなったが、濁りのない瞳ひとみの輝きはどんな権力者よりも力強い。

「宇宙から生還した者は、地球四六億年の歴史のなかでわずか数名。君たち宇宙飛行士の言葉でしか語り得ない真実がある。それはどんな銃剣よりも強く、何者にも勝る武器だ。君たちを利用したい輩やからもいるだろう。当然だ。価値があるのだからな。そういう

連中を汚いと思っても離れるな。私のように利用して踏み台にしろ。いいかね？　夢はもう、夢ではない。宇宙船ミェチタによって君たちは夢の体現者となり、月探査機ディアナによって月世界の神話は幕を閉じた。君たちが生きる世界はすべてが現実だ」

　コローヴィンはレフに手を差し出し、握手を求める。分厚い皮膚に覆われた技術者の手をレフはしっかりと握る。

「翼竜ジラントよ。今は宙そらから離れていても、力の限り飛びつづけろ。いつかは強い追い風が吹き、情熱は月に届くだろう」

　気持ちが伝わってきて、レフは心が熱くなる。

「はい、チーフ！」

　そしてコローヴィンはイリナに向き合うと、まじまじと見つめる。

「子どもだった君も、すっかり綺き麗れいになったな」

　イリナの頬ほおにポッと紅が差す。

「なっ、なんなの……」

「戯れ言と言っただろう。さて、荒涼とした月の大地に、美しい彼岸花リカリスが咲くことを楽しみにしている」

　コローヴィンが握手を求めると、イリナは無視して腕組みする。そして「んー……まあ、いっか」と頷うなずくと、上着の衣嚢ポケツトから小さな革袋を取り出す。

「これ、貸してあげるわ」

　革袋をポンと手に載せられたコローヴィンは、袋の中身を手のひらに出す。

　一枚の銅貨だ。一九四三年という発行年が見えて、思わずレフは声を上げる。

「あっ、それ……！」

　レフが渡したお守り──月への乗車賃だ。ずっと持ってくれていたことはうれしいが、チーフの手に渡るなんて。

　意味がわからず目が点になっているコローヴィンにイリナが教える。

「私とレフ、ふたりからのお守り。さっさと治して返してね。早く返さないと利子がつくわよ。一〇〇倍、二〇〇倍……いいかしら？」

　ふっとコローヴィンは相好を崩して、「禁煙するかな」と独りごちた。

　病室を出たレフとイリナは玄関に向かう。

　別れ際のコローヴィンは元気そうだったが、イリナの言った『悪い血の臭い』が心の奥に引っかかっている。しかし、この高級病院は共和国でも随一の最新機器と名医を抱えている。無茶をしなければ大丈夫だろう。

「チーフの脱出を阻止するために、見張りを立たせるべきだな」

「そうね。あとは、年末の『ディアナVIII号』が成功するように願いましょう。失敗したらショックで来年一年間また寝込んじゃうわ」

　玄関口を出ると、朧おぼろ雲ぐもの隙間から、薄い三日月が顔を覗のぞかせていた。『ディアナVIII号』は三八万キロ先に浮かぶあの衛星を周回するのだ。

　イリナがふっと病院を振り返る。六〇室ほどある病室の六割ほどに明かりが灯ともっている。

「高官専用の病院だから、偉そうな人間もたくさん入院してるんでしょうけど……月面着陸の瞬間は見られるといいわね」

「急いじゃ駄目だけど、早く達成しないとな」

　紅葉した七竈リヤビーナの木から渡わたり鴉がらすが飛び立つと、赤く熟した実がポロポロと零こぼれ落ち、レフの革靴にコツンと当たった。

　もうすぐ冬が来る。

　月の大地に人類が立つ日は、あと何回冬を越えたら来るのだろうか。

コローヴィンに託された技術者たちの努力が実り、一九六五年一二月三一日、『ディアナVIII号』は史上初の月周回に成功。このまま月軌道をぐるぐると回る衛星になり、月の観測をする。

軟着陸につづく快挙に世界は沸き立つが、現場の職員はよろこびを自粛した。なぜなら、コローヴィンはサングラードの病院で手術をしていて現場に不在なのだ。

本来ならば、彼が指揮する予定だった。しかし、イリナの助言で詳細な再検査をしたところ、ポリープ以外に大きな癌がんがふたつも見つかった。結果、手術の予定が大幅に変わり、大事な日に重なってしまった。

当然コローヴィンは「年明けに手術を延期しろ。基地へ行く」と訴えたが、医師らに説得されて「身体からだを最優先で治す」というイリナとの約束を守り、渋々、病院を出るのを諦あきらめた。そして、星の海を航海する『ディアナVIII号』が月まで八万キロメートルを切ったあたりで宙そらに手を振り、名残惜しそうに手術室へ入っていった。

そんな状況のためレフもイリナも成功を盛大に祝う気にはなれず、訓練センターの食堂で、職員たちと夕食を兼ねた簡素な祝杯をあげるだけにする。

食堂に集まった者たちは新年を明日に控えてそわそわしていた。

今年も無事に終わったとレフは安あん堵どする。大きな事故はなく、二期生も国家批判で追放処分を受けた者以外に脱落者はない。セミョーンは「月周回の祝賀会と、チーフの退院祝いと、そして新年祭も兼ねて大祝宴会を開こう！」とうずうずしている。

レフはミハイルとローザに冗談を飛ばす。

「もしチーフの退院が遅れたら、ふたりの結婚式と合同でのお祝いになるかもな？」

「ではいっそ、チーフに戸籍登録の職員役をやってもらおうか」

共和国の結婚式は一般的には市役所で行われていて、職員が司会を務め、新郎新婦は職員の前で戸籍登録書に署名をする。近年では

結婚の様式も変わり始め、結婚宮殿という豪華な建築物も建てられるようになってきた。

　イリナがミハイルの提案に乗る。

「おもしろいかも。東の妖術師チーフデザイナーが職員に変装してたなんて、あとでＡＮＳＡの人たちが知ったときに驚くわ」

　ローザは顎あごに手を当て、小首をかしげる。

「式の場所って、サングラード市役所なのかしら？　できれば立派な宮殿で挙げたいけど……」

「希望を伝えてみようか。俺たちにもそれぐらいの権利はあるだろう」

　ミハイルもローザも結婚を前向きに捉えて準備をしている。ふたりはまるで長年付き合っている恋人のように見えてきて、レフは不思議な気持ちになる。

　そうしてしばらく談笑していると、大きな音を立ててドアが開く。駆け込んできたヴィクトール中将が動揺に溢あふれた顔で「お前ら、聞け！」と声を張り上げる。

　ただならぬ雰囲気に、皆は雑談をピタリと止める。

「チーフの手術、失敗したそうだ。意識が戻らないらしい……！」

　和わ気き藹あい々あいとした空気は一瞬で凍りついた。

「これから病院に向かう。宇宙飛行士は皆を代表して来い」

『ライカ44』を飛び出したレフたちは軍用機の機内で年を越し、夜明けにはサングラードの病院に駆け込んだ。

　集中治療室を硝がら子す越しに覗のぞくと、人工呼吸器などの医療機器を付けられたコローヴィンが横たわり、静かに胸を上下させている。

「チーフ……！」

　レフがいくら呼びかけても声は届かず、イリナはただ呆ぼう然ぜ

んと突っ立っている。

　手術担当医は悲痛な面持ちで語る。「短時間で終わる手術だったはずが、想像を遥かに超えた厳しいものになり、命を救うだけで精一杯だった」と。病気を長年放置していた上に、若い頃に強制労働で痛めつけられた身体からだはもはや限界に近く、手術に耐えられる状態ではなかった。

　レフはできるかぎり冷静に、医師に問う。

「いつ回復するんですか」

　医師は自信なさげに答える。

「本人次第だ。明日急に目覚めるか、ずっと目覚めないか……我々には断言できない」

　彼を責めてもしょうがないとわかっているので、レフは奥歯を噛かみしめて我慢する。だがイリナは医師に詰め寄り、涙目で訴える。

「なんとかしてよ！　手術しなきゃよかったんじゃないの!?」

　医師は悔しそうに顔を歪ゆがめる。

「我々も全力を尽くした。言い訳になってしまうかもしれないが、再検査で癌がんが見つかっていたからこそ、かろうじて一命を取り留めた。もしポリープの摘出だけだと思って手術を始めていたら、手の施しようがなかった……。だから、再検査を勧めたあなたは、命の恩人だ」

「恩人なんて……助けてから言ってよ……！」

　今にも泣き出しそうに顔を歪ませてイリナは力なく床にへたり込む。

　悲痛な空気のなか、レフはもう一度コローヴィンに目を向ける。

　死んだように横たわっている彼は、見舞いで会ったときより、ひと回りもふた回りも小さく感じる。生命維持装置を付けられた姿を見ていると、さまざまな感情が胸に去来する。

　大病を患わずらい、手術に耐えられないほどの身体で指揮を執っていたのか。チーフが戻らなかったら宇宙開発はどうなってしまうんだ。最初に倒れたときに無理やり入院させるべきだったのではないか。

　やりきれない喪失感に襲われていると、ミハイルに肩を組まれた。

「そんな顔をするな。あのチーフがこのまま目覚めないと思うか？」

　指摘されてハッとなる。

「……ああ、そうだね。きっと、今は疲れて眠ってるだけだ」

　弱気になってはいけない。レフは自分の頬ほおを両手でパチンと叩たたく。

　ローザは悲痛な表情でコローヴィンにハキハキと話しかける。

「チーフ。あなたに結婚登録式の招待状を送ります。私は宇宙飛行士として迷惑ばかりかけてしまいましたが、絶対に来てください」

　ミハイルは彼女の隣に立ち、ふたりは胸に手を当てて祈る。

　しゃがみ込んでいたイリナはすっくと立ち上がり、硝がら子す窓に近づくと両手を腰に当てる。

「ねえチーフ。頭までポンコツになって、約束を忘れちゃったのかしら」

　涙に濡ぬれた薄うす紅べにの瞳ひとみで彼女は力強く告げる。

「早く治しなさい」

　レフは胸に拳こぶしを当て、短い言葉に想いを込める。

「チーフ、現場で待っています」

　訓練をつづけ、二期生を引っ張って育てる。それが宇宙飛行士である自分に与えられた使命だ。

黒竜の瞳　Очи　Цирнитры

委員会の決定により、コローヴィンの状態は極秘事項とされた。問題は彼の代役だ。国内の現場でも神格化されている謎の設計主任を務められる者などいない。

議論の末、長年コローヴィンの補佐を務めていた第一設計局の次席を後任と決定する。しかし代役は代役だ。知識は豊富だが統率力や判断力に欠けて、派閥争いや軍部からの非難に抗あらがえる精神力も政治力もなかった。

宇宙開発の中心人物を失った影響は徐々に表面化し、現場に歪ゆがみと混乱が生じる。

とくに深刻なのが、新型宇宙船『ロージナ』の開発だった。

政府の決めた打ち上げ予定に合わせるために、方針が固まらないまま見切り発車になっている。現場で開発に従事する下級技術者はコローヴィンの不在を知る由もなく、上からの指示に従って動くしかない。

経済力で劣る共和国が連合王国に勝まさっていた大きな理由は、コローヴィンという天才科学者を擁していたからだ。たったひとりの力に頼るという無理な構造が彼の身体からだを蝕むしばんだ挙げ句、すべての計画を破は綻たんに導こうとしている。連合王国のように、ＡＮＳＡの下に各研究所や企業が連携して組織化されていれば、仮にクラウス博士ひとりが退場しても大混乱は起きないだろう。

共和国が自壊していく一方で、潤沢な予算を注ぎ込む連合王国の長期計画は実を結び始める。一九六六年初頭には無人月探査機の月面軟着陸に成功し、月周回軌道への投入も連続で達成。『ディアナVII号＆VIII号』の成果に並ぶ。

この時点で、ランデヴーに成功している連合王国は共和国を完全に追い抜いた。

草木も凍る氷点下が連日つづき、多くの生物は身を寄せ合って息を潜める二月。

サングラード近郊の平原に建設中の巨大観光施設『すばらしき楽園』がまもなく完成する。ゲルギエフの指示で建設が開始されたもので、連合王国の万国博覧会とテーマパークに対抗した「少年少女のための遊園地」を謳うたっているが、その実態は「共和国連邦の構成国をひとつの公園にまとめた思想教育施設」だった。

大粒の雪がしんしんと降るなか、視察に訪れたゲルギエフとリュドミラは、楽園の象徴として作られた壮麗な宮殿に車で向かう。

施設の敷地は球場が五〇個も入るほど広いが、予算をかけて作られたのは宮殿のある中心部とその周辺のみだ。経済危機の煽あおりを受けて建設予算が減額されてしまい、力の弱い構成国の展示館は張りぼてと変わらない。

そんなみすぼらしい区域の映る車窓にはゲルギエフは目もくれず、隣に座るリュドミラに向かって『すばらしき計画』を延々と語る。

「宇宙服が膨張する欠陥は、搭乗者の意見を参考に、改良されたと聞いた。ならば問題はない」

　ところが、リュドミラには眉まゆ根ねを寄せられる。

「おもしろいけど、やはり危険じゃないかな。第一弾だけでも話題にはなるでしょうし」

　しかし、連合国に逆転されて気が気でないゲルギエフは、聞く耳持たず、早口でまくしたてる。

「冒険に危険はつきものだ。挑戦だよ。何事も挑戦だ。このすばらしき計画は、宇宙開発史上、もっとも華々しく、世界中の人から祝福される挑戦となる。第一弾、第二弾、そして第三弾！　万が一、失敗しても、失うものはないだろう？」

「失うもの……そうねぇ」

　リュドミラは不敵な笑みを浮かべる。

「あなたにはないかもね」

「よし、決定だ！」

　青と金色で装飾された宮殿の前でゲルギエフは車を降りると、傘もささずに両腕を大きく広げる。

「ここだ！　まずはここで、宇宙飛行士夫婦の結婚登録式を盛大に祝おう！」

　最高指導者のけたたましい雄叫びが、鈍にび色いろの空に轟とどろいた。

第三章　誰がために

藍の瞳　Очи　индиго

大地が純白の雪衣を脱いで、春の息吹が顔を出す四月。ミハイルとローザの結婚登録式が『すばらしき楽園』にて執り行われる日。

天気は快晴。絶好の結婚式日和だ。

「宇宙飛行士の結婚」はふたりの美麗な容姿も手伝って世界中の注目を集め、宣伝効果はロケットの打ち上げに引けを取らない。『すばらしき楽園』の完成披露式典も兼ねた宴には各国の報道陣も朝早くから多数訪れ、会場には政府高官を含む出席者が詰めかける。三〇〇人の出席者は、反ゲルギエフ派を徹底的に排除した、厳選された信者たちだ。

控え室として使われる展示館で、準礼装姿の飛行士たちは新郎新婦の着替えを待つ。各国のさまざまな式典に出席してきたレフだが、同期の親友の結婚式は初めてで、そわそわする。イリナも落ち着かない様子で、ずっと前髪をいじっていた。

午前一〇時過ぎ、着替えを終えた新郎新婦がレフたちのところへやってくる。

新郎のミハイルは最高級のダークスーツに身を包み、珍しく緊張した面持ちだ。

新婦のローザは純白のウェディングドレスとベールを纏まとっている。『サングラードの白しろ薔ば薇ら』と呼ばれた彼女に合わせ、裾すそには繊せん細さいな薔薇の刺し繍しゆうが施されている。ふだんは薄化粧の彼女も今日は見目麗しく彩られていて、お伽とぎ話ばなしの姫君のような美しさに飛行士たちは息を呑のむ。

「あの……あまり見ないでくれる？」

　うつむくローザの頬ほおは桜色に染まる。ある者は感嘆の溜ため息いきを吐つき、ある者は冷やかしの口笛をミハイルに浴びせる。

「綺き麗れいだ……」と見み惚とれるレフの顔に、いきなり後ろからたすきが絡みついてきた。

「うっ、な、なんだ!?」

　大蛇のようにしゅるしゅると巻きつくたすきを剥はがし、慌てて振り向くと、淡い水色のロングワンピースを着たイリナが唇を尖とがらせている。

「立会人用のたすきよ」

　自分のたすきを投げ縄のようにぐるぐる振り回すイリナ。

「ふつうに渡してくれ！　顔に巻くな！」

「花嫁をいやらしい目で見てたから塞ふさいだの」

「い、いやらしくない……というか、おとなしくしろ。ここには飛行士以外にも多くの人がいる。立会人らしく振る舞おう……」

　向こうでは結婚の裏事情を知らない新郎新婦の親族や友人たちが挨あい拶さつを交わしている。辺り一面が祝福の空気に包まれた会場で、レフの胸にはひとつだけ暗い染みが落ちている。

　持続的意識障害となったコローヴィンはいまだに意識が戻らない。「結婚登録式の職員役をやってもらう」という悪だくみは叶わなかった。その職員役は、最高指導者のゲルギエフが直じき々じきに務める。

　飛行士たちは皆コローヴィンを心配しているが、「馬鹿騒ぎしていると『うるさい！』と目が覚めるかもしれないぞ！」と話し、今日は楽しく過ごそうと決めていた。コローヴィン本人も、湿っぽい結婚式など望んでいないだろう、と。

　しかし、飛行士たちの長おさであるヴィクトール中将は口をへの字に曲げて、片隅からローザを見つめている。レフは気になって「どうしました？」と話しかけた。するとヴィクトール中将はヒソヒソと小声で答える。

「宇宙での飛行は……彼女の女性としての機能を破壊しなかっただろうか？」

「……どういう意味ですか？」

「彼女が母親になれるか心配なんだ。宇宙で体調を崩し、嘔おう吐とまでしてしまっただろう。それで、妊娠と出産はできるのだろうか」

　彼は未知なる空間を飛んだ女性に異常が出ないか懸念しているのだ。前例はないので、レフも判断に困る。しかし、空軍医学研究所に所属するアーニャが「大丈夫」と断言するのを聞いた記憶があるので、心配を解消しようと考えを述べる。

「嘔吐は一時的な宇宙酔いです。ローザも、それからイリナも帰還後は身体からだにまったく異常は出ていませんし、人間を犬と比べるのはよくないですが、サンダンシア女王に贈った、実験犬の子であるククーシュカは健康に育っています」

「そうか、そうだな……うむ……」

　自分を納得させるようにヴィクトール中将は二度、三度と頷うなずくと、アッと顔を上げる。

「すまない。花嫁姿を見たら……。よし、子だくさんを祈願して、オムツを山ほど贈ろう」

　ヴィクトール中将は額に傷のある強こわ面もてで、外見に違わず厳しく怖いが、飛行士に対する親心をレフはすごく感じている。

「──はい、お待たせしましたー！」

　披露宴のために用意された巨大な飾りパンカラヴアイが搬入される。腕利きのパン職人が一週間かけて作り上げた特別製で、愛の象徴である二羽の白鳥が美麗に装飾されている。

　パンの周りに皆が集まり、出来栄えに感嘆の溜ため息いきを漏らす。

「白鳥、可か愛わいい……」

　ジーッと見つめるイリナにローザが微ほほ笑えみかける。

「装飾の部分、あなたにあげるわ」

「いいの？」

　結婚式で出される飾りパンの装飾は、未婚の女性に幸せをもたらすと言われているが、今のイリナの反応はそれを知っているのかどうか。

　レフがイリナの顔色を窺うかがっていると、ミハイルにポンと背中を叩たたかれる。

「それで、君たちはいつ結婚するんだ？」

「急になんだよ!?」

「彼女は結婚したいようだが。なあ、イリナ？」

「んっ!?　な、なんで!?」

　目をまん丸くするイリナ。

「装飾を欲しがっただろ？」

「え？　え？」

　やはり慣習を知らなかったらしい。

「レフはどうなんだ？」

　ミハイルが矛先をレフに向けると、ローザが追い打ちをかけてくる。

「レフも歓迎でしょ？　たすきで仲良さそうに遊んでたし」

「あれはイリナの悪戯いたずらだ！」

　レフが突っ込むと、イリナも反対の声を上げる。

「そうよ！　レフがローザに夢中になってるからお仕置きしたの！」

「その感情を人間の言葉で『嫉しつ妬と』と呼ぶ」

「□□!?」

　ミハイルに指摘されたイリナは耳の先まで真っ赤になる。どやどやと横から入ってきたセミョーンたちが囃はやし立てる。

「『史上初の宇宙飛行士の結婚』に加えて、『人間と吸血鬼』だ。全世界どころか全宇宙が注目するぞ」

「蜜月旅行は月か火星かどっちだ？」

「ひょっとして婚約してる？」

　ぷるぷると震えていたイリナがカッと口を開けて牙きばを剥むく。

「うるさーい！　人間と結婚なんて絶対しない！　血が汚れる！　一族の恥！」

　祝宴に相応ふさわしくない怒声が響き渡った。

　そこまで必死に否定しなくても……とレフは苦笑いを浮かべ、周りの視線を「あはは……」と受け流す。

しかしイリナの反応はどこからどこまでが本音なのだろうか。気になって彼女を横目に見ると恨みがましい視線を向けられたので、「さあ、立会人の準備をしよう！」と誤ご魔ま化かす。頬ほおを膨らませていたイリナは「……ローザのためだからね」とたすきを掛けた。

もうすぐ午前一一時。開式が迫り、軍楽隊は演奏の準備をする。

しかし、このあとすぐに結婚登録式は始まらない。

共和国には式の前に行う独特の慣習『試練の儀式ヴイクプ』がある。

新郎がさまざまな試練を乗り越えて新婦を家から連れ出すのだが、ここで愛の深さを証明できなければ、戸籍の登録にたどり着けない。

今回は『すばらしき楽園』の敷地を使い、ローザの待つ展示館へミハイルが出向き、試練を受ける。そしてここで立会人が重要な役目を果たす。イリナはローザの味方として試練を取り仕切り、レフはミハイルの手助けをするのだ。

これまで儀式を見たことはあっても中心人物となって参加するのは初なので、さすがにレフも緊張する。なんせ世界中の人々が観衆なのだ。

同じく初めての相方はどうだろうと、レフは確認する。

日中の催しなのでイリナは日傘を差しているが、傘の下に見える顔がカチコチだ。相当緊張しているらしい。

一方で、ミハイルとローザは仲睦まじく段取りを確認しながら、時折笑顔を覗のぞかせる余裕がある。

これではどちらが主役だかわからない。とにかく、ふたりのためにも失敗しないようにがんばろう。

開式の時間となり、軍楽隊が高らかにファンファーレを鳴らす。

　演奏に合わせてゲルギエフが宮殿の前に現れ、開式の挨あい拶さつをする。

「親愛なる同志諸君！　親愛なる全世界の市民諸君！　本日はツィルニトラ共和国連邦の英雄、同志ミハイル・ヤシンと同志ローザ・プレヴィツカヤの結婚登録式を執り行います！　さあ、偉大なる宇宙飛行士ふたりに、この上ない祝福を！」

　ゲルギエフに促されて、ミハイルとローザが華やかに登場する。品位に満ちたふたりが一礼すると、出席者から盛大な拍手が巻き起こる。

「つづいて立会人を紹介しましょう！　皆さんもご存じの宇宙飛行士！　同志レフ・レプス、同志イリナ・ルミネスク！」

　レフとイリナは清すが々すがしい表情で歩き、それぞれミハイルとローザの横に立つ。割れんばかりの拍手と歓声が会場に轟とどろく。宇宙飛行士四名が並ぶ光景は滅多に見られるものではなく、報道陣は我先にと争いカメラで狙ねらう。

　この式典は政治宣伝として国家上層部にとっては成功だろうとレフは思うが、宇宙開発の本質と違うところで注目を集める姿勢にはやはり疑問を抱く。今置かれている自分たちの立場にやりきれない哀かなしみすら覚えてしまう。

　しかし、親友ふたりの晴れ舞台で沈んだ顔をしてはいけないので、立会人を爽さわやかな笑顔で務める。

　そんなレフの悩みなどゲルギエフにはまったく伝わらず、最高指導者が自ら、結婚登録式の概要を説明する。

「さて、世界市民の皆様ッ！　『試練の儀式ヴイクプ』をご存じでしょうか!?」

　開式では彼だけが話し、新郎新婦の挨拶は戸籍登録を終えたあとに予定されている。立会人の挨拶は披露宴で、新郎新婦の人柄などを紹介する。

　本来の式は宮殿内で執り行われるのだが、今日は『すばらしき楽園』の完成披露を兼ねていて人々が全員外にいるので、宮殿の前に特設舞台が設置されている。

　ゲルギエフの挨拶が終わると、いよいよ『試練の儀式』が始まる。

　ローザは五〇〇メートルほど離れたところにある展示館で待機し、そこへ至る試練の道に試験官のイリナが立ちはだかる。レフとミハイルは宮殿前から出発し、イリナの出題する試練を乗り越え、ローザを展示館から連れ出すという流れだ。

　軍楽隊が空軍行進曲を勇ましく演奏し、ミハイルの挑戦を後押しする。

「さあ、行こう！」

　レフの号令で、ミハイルと展示館へ向けて出発する。『すばらしき楽園』は敷地全体で共和国連邦を表現しているので、区画が州や国にわかれている。

　そして隣の州に入ると、待ち構えていたイリナとさっそく出会う。

　イリナは傘をくるりと回し、ビシッとした視線をミハイルに投げる。

「あら、まァ、ミハイル？　ローザと結婚したいってホントかしらァ？」

　童話に出てくる意地悪な精霊みたいだ。過剰な緊張と行進曲の高揚感がそうさせたのか、それとも演技なのかは不明だが、イリナは調子づいている。

「ふふん、この私が簡単に通過させるわけないでしょ？　三つの試練を乗り越えて、彼女への愛を証明してみせなさいなっ？」

　ミハイルは胸を張って宣言する。

「宇宙よりも深い愛で乗り越えてみせましょう」

「お熱いことっ。ハァイ、ひとつめの試練よ」

　イリナは白いレースのハンカチを取り出して広げる。真っ赤な口紅で接せつ吻ぷんをした唇マークが三つ付いている。

「ローザの唇はどーれだ？　外したら、おうちへお帰りっ！」

「ふむ……うーむ」

　ミハイルが悩んでいるのは演技で、じつは答えを知っている。通常の試練では間違えたら罰を受けたり金を払ったりして出題者に許してもらうのだが、今回は世界が注目しているので茶番となった。

　ハンカチに並ぶ唇マークのひとつは、立会人の役目としてイリナが付けた。「接吻なんてしたことない……」と戸と惑まどったイリナだったが、ローザに「ハンカチを唇に押し当てるだけだから」と口紅を塗られると、小鳥のように唇を尖とがらせて自分でマークを付けていた。「あぁ～歪ゆがんでぐちゃぐちゃ……」と嘆くイリナをレフは見ていたら「あっちいけ！」と口紅を投げつけられた。

「──これがローザの唇だ」

　ミハイルが指したマークは当然正解。イリナは悔しそうに地団駄を踏む。

「まだまだよ。つ・ぎ・は、もーっと難しいんだからね！」

　意地悪な精霊を演じなくてもいいのだが、ミハイルが「ははっ、森の妖婆バーバ・ヤガーか？」と楽しそうなのでそのまま放っておく。

　つぎの州へ向かう途中、ミハイルが感慨深げにレフに言う。

「ひとつ試練を乗り越えると、一歩結婚に近づく。不思議な気分だ」

「どんな感覚か全然わからないな……」

　レフは思う。自分は結婚するのだろうか。するとしたら相手は誰だろうか。

　ふっと、前を歩くイリナが目に入る。

　だが。

　──人間と結婚なんて絶対しない！　血が汚れる！　一族の恥！

即座に浮かんだ罵ば声せいに、思考はかき消された。

「ほらほら、つぎの試練よ？」

イリナは日傘をくるりと回し、台に並んだ二〇枚の輪切り檸檬れもんを指す。

「愛があれば、酸いも苦いも乗り越えられるわよね～ッ？」

輪切り檸檬れもんの下には二〇名分の名札が敷かれていて、そのなかに一枚だけローザの名札がある。

イリナは胸を張って命じる。

「さァ、ミハイル。愛する人を探してごらん」

側道で見守るセミョーンたちから「愛のために！」と野太い声援が飛ぶ。

大量の輪切り檸檬を前に悩むミハイル。

「レフ、どれがいいだろうか？」

「そうだな……」

このやり取りも茶番だ。一発で当ててはおもしろくないので、わざと何回か間違える。

「あれはどうだ？」

自信満々にレフが指した輪切り檸檬をミハイルは酸っぱそうに食べる。

下にあった名札をひっくり返すと、イリナの名前があった。

イリナはギロリとミハイルを睨にらむ。

「へぇ、あなた、この私と結婚したいの？　へぇ～……？」

ミハイルはイリナの名札をレフに突きつける。

「君が彼女と結婚しろ」

「す、すまない……」

　側道にいるセミョーンが「結婚しろ！」と何度も野次るので、出席者から笑いと拍手が起きる。イリナは傘で顔を隠して野次が聞こえないふりをしている。

　その後、ミハイルは数枚の輪切り檸檬を食べ、ローザの名札を見つけると天高く掲げる。

　出席者からワッと歓声が沸き、イリナは鼻をふんと鳴らす。

「むむー、かなり間違えてたけど、まァ、間違いのない人生などないからね。特別に通行を許可してあげるわ。さァ、つぎで最後よっ」

　頬ほおを少し紅潮させたイリナに連れられて、ローザの待つ展示館に向かう。

　少しずつ戸籍登録が近づいている。

　ローザは今、ひとりで何を考えているのだろうか。

　結婚をすると告白されたあの夜……声を震わせた彼女の姿が脳裏をよぎる。

　ジャズバーで孤独にグラスを傾け、哀かなしげに瞳ひとみを潤ませていた。そして、胸に秘めていた想いをレフに告げると、祖国のために生きると涙を浮かべた。

　あれから月日が経ち、ウェディングドレスを着た彼女からは幸せそうな笑みが溢あふれていた。

　人生を決められた彼女の未来が明るいものであってほしい。その伴はん侶りよがミハイルならば、きっと大丈夫だろう。

　ローザの控える展示館に着くと、イリナは玄関扉の前に立ち、挑戦的に胸を張る。

「最後の試練よ。心の準備はいいかしら？」

「もちろんだ。さあ、早く問題を出してくれ」

ミハイルが求めると、イリナは意味深な上目遣いでレフとミハイルを一いち瞥べつして、玄関扉をノックする。

「私の役目はここでおしまい。ミハイルはローザの質問に答えなさい。いいわね、ローザ？　大事なことを訊ききたいのよね？」

ん？

レフとミハイルは訝いぶかしげな視線を送り合う。

予行演習の流れと違う。

予定では、イリナがローザの生年月日や星座について出題をするはずだったのだが。

イリナが扉をゆっくり開けると、純白のベールで顔を覆ったローザが静かに立っている。その口元が「えっ……」とわずかに歪ゆがむのをレフは見逃さなかった。

ローザも動揺しているということは、イリナが仕組んだのか？

レフが横目にイリナを見ると、彼女はひょいと首をすくめる。茶番はおしまいと言わんばかりの悪戯いたずらな顔つきで──

やりやがった。

「どんな試練に変えたんだ……？」

レフがボソッとつぶやくと、ミハイルは微かに失笑を漏らす。「ようやく試練だな」と。

ローザは緊張した顔つきでミハイルを見つめる。

「……ひとつ訊かせて」

「何でも答えよう」

「私は空軍の軍人として生きてきた。鍋の代わりに操そう縦じゆう桿かんを握り、裁縫の代わりに銃を組み立てる毎日だった。まったく家庭的ではないし、もし宇宙飛行士を辞めたら、私は何者でもなくなる。昔は結婚なんて考えたこともなかったわ。ねえ、あなたはこの結婚をどう思う？」

　生年月日の確認などよりずっと大事なことを、公衆の面前で問うローザ。

　ミハイルは彼女の不安そうな視線を受け止め、優しい眼まな差ざしで見つめ返す。

「もしブリュシチに機械の部品が紛れ込んでいたら、雛豆に入れ替えよう。銃の扱いが上う手まいのなら強盗を追い返せるから安心だ。君が宇宙飛行士を辞めるならば、代わりに月の石を取ってこよう。俺も結婚など考えもしなかったが、宙そらを飛んだ同志として、すばらしい未来を作っていけると思っている」

　ローザの頬ほおがふわっと和らぎ、一歩玄関を出る。ミハイルは彼女の手を取り、引き寄せて抱きしめる。

　出席者から大きな拍手と歓声が起きる。

　儀式が無事に終わって安あん堵どしたレフは、満足げに頷うなずいているイリナの隣に行き、小声で問う。

「勝手に試練を変えただろ……？」

「茶番じゃない試練も必要でしょ？　それに、最後まで第三者の私が問題を出すのはおかしいもの」

　まったくドキドキさせてくれるが、ミハイルとローザが自然な笑顔をイリナに向ける姿を見ると、突発的な試練があって良かったと思える。

　宮殿前の特設舞台に立ったゲルギエフが声高に宣言する。

「試練のときは終わりを告げました！　若き宇宙飛行士よ、前へお進みなさい！　地球の英雄よ、前へお進みなさい！　強き勇気と純粋な愛で、幸せな夫婦となるのです！」

　歌劇の詩を言い換えた口上を合図に、軍楽隊が婚礼の合唱曲を厳かに奏でる。

　ミハイルとローザは軽く腕を組み、歩調を揃そろえて宮殿へ向かう。レフとイリナは彼らの少し後ろを歩いていく。

　宇宙を旅した新郎新婦を、宮殿の前に集まった出席者は温かい眼

まな差ざしで見つめ、報道陣はカメラのレンズで狙ねらい、ゲルギエフは到着をにこやかに待つ。

　特設舞台に着いたミハイルとローザはゲルギエフに正対して畏まり、結婚の宣誓を始める。

「私、ミハイル・ヤシンと──」「私、ローザ・プレヴィツカヤは──」

「本日ここに結婚の宣言をいたします」

　新しい生活で互いを尊敬して愛し合い、幸せで温かな家庭を築くことなどを、声を揃えて朗々と述べる。

　宣誓がよどみなく終わると、ゲルギエフが戸籍登録書への署名を促す。

　ミハイルとローザは見つめ合うと深く頷うなずき、名を書き入れる。つづいて、立会人のレフとイリナが署名をする番だ。

　ペンを握るレフ。人生を決める一筆だと思うと、手のひらに汗が滲にじみ、力が入る。

　ミハイル、ローザ。この広い地球上で、四六億年の歴史上で、自分を含めて数えるほどしかいない宇宙飛行士。苦楽をともにした同志。そのふたりがこれから人生をともに歩んでいく。国家の都合で決められた結婚とはいえ、今は胸いっぱいの祝福を送りたい。

　最後にイリナが署名をする。丁寧に名を記す彼女も、きっと同じ気持ちでいるだろう。

　署名を終えたレフとイリナは、新郎新婦の後ろに下がる。

　ゲルギエフは戸籍登録書を高く掲げる。

「これで晴れて、ふたりは夫婦となりました！　同志ミハイル・ヤシン、同志ローザ・ヤシナ！　新時代の到来を告げる『宇宙飛行士夫婦』に盛大な拍手を！」

　万雷の拍手に新郎新婦は満面の笑みで応える。幸福の香気に包まれ、レフはイリナと笑顔を見交わす。

　拍手が収まるのを待ち、ゲルギエフが司会を再開する。

「さて皆さん。ここで指輪交換の前に、祖国からの贈り物を紹介したい！」

　贈り物？

　式次第とは違う流れだ。レフの心にさざ波が立つ。

　ゲルギエフは出席者と報道陣をぐるりと見回すと、今日の挨あい拶さつでもっとも熱意のある声を張り上げる。

「今年の秋、我らが祖国の革新的宇宙船『ロージナI号』を打ち上げる予定ですが、搭乗者に、同志ミハイル・ヤシンを指名します！」

　予想外の発表にレフは口をあんぐり開ける。

　報道陣は激しくざわめき、出席者はやんやと喝かつ采さいを送る。

　イリナは首をかしげてレフに訊たずねる。

「何か聞いてた……？」

「全然知らない……」

　レフはミハイルとローザの背後にいるので彼らの表情はわからないが、ミハイルの太ふと腿ももに添えられている指にグッと力が入るのを見た。おそらく彼らも初耳なのだろうと推測する。

　宮殿の脇に控えるヴィクトール中将は狼ろう狽ばいを顔に浮かべて、周囲の職員と確認を取り合っている。

　指名は上層部の独断か？

　疑念をよそに、ゲルギエフは発表をつづける。

「そして、『ロージナI号』の打ち上げ翌日に、二名の飛行士が乗る『ロージナII号』を連続で打ち上げます！　二機の宇宙船が地球軌道上でランデヴーし、ドッキングをします！」

　レフはギョッとのけぞった。連合王国に対する遅れを一気に挽ばん回かいするつもりか。

　ゲルギエフは調子づいてまくしたてる。

「『ロージナII号』の搭乗者の一名に、同志ローザ・ヤシナを指名します！」

　ローザはビクッと肩を揺らしてミハイルと視線を交わす。ふたりの表情は硬く、瞳ひとみには動揺の色が浮かんでいる。驚きが先に来て理解が追いつかないレフだったが、徐々に怒りが込み上げてくる。イリナも「はっ？」と目つきが鋭くなる。

　何も知らない出席者たちは、ただゲルギエフの独演に聞き入っている。

「ドッキングしたあと──さぁ、ここからが式のつづきです！　II号から新婦が船外に出て、宇宙を泳ぎ、I号に移乗します。これは新婦側に課される試練と言えるでしょう！　そしてI号機内で指輪の交換！　誓いの口づけ！　地球を一周する蜜月旅行！　これが新時代の結婚式です！　さらに、ふたりのあいだに生まれる子、つまり宇宙飛行士二世は、来る二一世紀の宇宙開発を牽けん引いんするでしょう！」

　反へ吐どが出るほど醜悪だ。

　国家戦略ありきで宇宙飛行士が決定されるのは理解している。だが、人生の晴れ舞台を見世物に利用するなんて。しかも「船外活動で移乗する」と簡単に言ったが、宇宙遊泳中にセミョーンが死にかけたのを忘れたのか。

　レフはぎりぎりと奥歯を噛かみしめ、喉のどから飛び出そうになる文句を胃に押し込む。

「ひどすぎる……！」

　イリナのかすれた声がレフの耳に届く。唇をぶるぶると震わせ、必死に感情を抑えている。

　しかし飛行士の憤いきどおりなど、国家の頂点から民衆を見下ろす最高指導者には届かない。

「同志ヤシンの代替え要員バツクアツプは、同志レフ・レプス！　同志ヤシナの代替え要員は、同志イリナ・ルミネスク！」

「なっ……!?」

　怒りを通り越して呆あきれる。イリナは傘で顔を隠したが、傘の持ち手が折れそうなほど強く握りしめていて、憤りが伝わってくる。

　ミハイルとローザは身を寄せ合ったまま、呆ぼう然ぜんと立ち尽くす。

　祝福の場は完全に政治宣伝の劇場と化した。三〇〇名の信奉者は機械のように拍手喝かつ采さいを繰り返す。その声援をエネルギー源にして、ゲルギエフの禿頭は見事に紅潮する。

「同志の皆様！　大変恐縮でございますが、披露宴は延期とさせていただきたい！　新郎新婦が蜜月旅行から帰国したあと、盛大に祝ってもらえればと！　いかがでしょうか!?」

『すばらしき楽園』に賛成の大歓声が響く。

　結婚登録式がこれで終了となれば、披露宴のために作られた豪勢な飾りパンカラヴアイも廃棄される。

　春の穏やかな日差しの下で、レフは重い溜ため息いきを大地に落とす。

　なぜ、このような所業が許されるのか。

　飛行士だけが乗車する送迎バスに乗り込むや否いなや、ヴィクトール中将の怒りが爆発する。

「宇宙船での指輪交換だと？　何を考えている！　宇宙時代が何だと言うんだ！」

　だが、最高指導者による決定は覆らないと、誰もがわかっている。ヴィクトール中将は大きく深呼吸をすると、硬い表情をしたミハイルとローザに深く頭を下げる。

「かえすがえす、私の力が及ばず……申し訳ない」

「いいえ、同志中将」

ミハイルはしっかりとした声で返す。

「私は再び宙そらを飛ぶことを熱望していました。新型宇宙船の一番乗りになれて光栄です。それに、宇宙船二機のランデヴーとドッキングは、宣伝目的だけではなく、月着陸のための重要な試験も兼ねていると理解しています」

ローザもはっきりと頷うなずく。

「大役ですが、私もやるのみです。前回の宇宙飛行は散々でしたけど、訓練を重ねて、名誉挽ばん回かいを目指します」

宇宙飛行士を辞めると話していた彼女も強い意志を見せる。

宇宙遊泳の経験を買われてローザの同乗者に指名されたセミョーンは「自分にできる限りの指導をする」と協力を約束する。

宇宙での結婚を見世物にされるなど、一般人ならば到底受け入れられないだろう。しかし、飛行士は空軍の士官である。厳しい訓練を耐え抜き、数万の軍人から選び抜かれた精鋭は、自分の感情や意見を押し殺し、任務を果たす気概を持たなければならない。

無論、ミハイルとローザの本音や心情はレフにはわからないが、身体からだを震わすほどの衝撃と動揺は早々に『すばらしき楽園』に捨て去り、目標達成に向けて気持ちを切り替えたのではないか。

そう思いつつも、レフは複雑な気分だった。

ミハイルの代替え要員バツクアツプという位置づけは、ふたりで席を争った『ミェチタI号』と真逆で、上層部の意図を感じる。五年間も渇望していた宙そらへの道が開かれたというのに、努力ではない別の要因で指名されたことは、肺臓に氷片を投げ込まれたように息苦しい。

レフの隣席に座ったイリナはずっと目を閉じていて、時折物憂げに息を吐く。

しばらくしてバスが『ライカ44』に向けて出発すると、車内には荒涼とした沈黙が横たわった。

真夜中の幹線道路を北へひた走るバスの車内は、飛行士たちの寝息に満ちる。

レフはまったく寝つけず、もし自分がミハイルの立場だったらどうだろうと想像する。

政治宣伝のために女性宇宙飛行士との結婚を決められ、念願だった二度目の宇宙飛行を指輪交換の場にされる。

絶対的な命令で、断れば二度と宙を飛べない。それどころか、命の保証もない。軍人とは、雇い主である国家のために戦う者。激戦地だろうと、未知の世界だろうと、死を厭わずに行くべし。

しかし、今日与えられた使命は身を殉じるべき戦いなのだろうか。違和感が膨らむ。「宙を飛んだお前が、祖国の大地に縛られることはない」。父の言葉を胸に刻んだが、この大地で生きている以上は逃れるすべはないのか。

「……ねえ、レフ」

隣席でイリナが囁ささやいた。

「起きてたのか？」

イリナはこくりと頷うなずくと、レフの方へ身体を向け、周りを気にして小声で話す。

「ずっと考えてたの。私たちの武器は宇宙飛行士であることって……」

「チーフの言ってたことか」

「うん。でも、どうやってその武器を使えばいいのかな。今日、私たちは四人もいたのに、言われるがままだった……」

コローヴィンに「権力がなければ潰つぶされる」と忠告を受けた。今がその状態だ。

しかし、宇宙飛行士という勲章をどう利用して、何を解決すれば胸のもやもやが晴れるのか、見当もつかない。

悩んだ末に、まずは今日与えられた計画を遂行するべきだと考え

る。

「式で発表された宇宙結婚式は新聞に載るだろうし、今さらひっくり返せないだろう。俺たちは代替え要員バツクアツプとしての任務を果たすしかないんじゃないかな」

「そうね……立会人として、ふたりの未来がいいものになるようにしないとね」

「帰ったら、また訓練の日々が始まる。眠れないかもしれないが、身体からだを休めよう」

「ええ、おやすみなさい……」

イリナは瞳ひとみを閉じ、レフも目を瞑つむる。

がたがたとバスに揺られていると、微睡まどろみのなかで、別の不安が鎌首をもたげる。

果たして設計局はロージナを完成させられるのだろうか。

一九六六年四月。新型宇宙船『ロージナ』の開発は不眠不休でつづく。

しかし、コローヴィンが自ら「未来の乗り物」と語る宇宙船は、技術者たちがこれまで触れてきた宇宙船とは比較にならないほど構造が複雑で、機体も巨大だ。偉大なる指揮官の後任に指名された第一設計局次席は奮闘するも、開発現場は迷宮に入り込む。

それでも国家上層部は目標を無慈悲に設定する。

「一年半で三つのシステム──『新型宇宙船ロージナ』、『新型巨大ロケット』、『月着陸船』を完成させよ」

その完成を前提に、つぎの予定が現場に通達された。

・ロージナ（無人）＆月着陸船（無人）　──月周回飛行　一九六七年 一二月

・ロージナ（有人）＆月着陸船（無人）　──月周回飛行　一九六八年 四月

・ロージナ（有人）＆月着陸船（無人）　──無人月面着陸 一九六八年 八月

・ロージナ（有人）＆月着陸船（有人）　──有人月面着陸 一九六八年 九月

どう見ても机上の空論で、技術者は頭を抱える。仮にコローヴィンが健在だったとしても願望や希望レベルの計画で、今の現場には絶望を与えるだけだった。

しかし上の決定は絶対なので、机上の空論だろうが実現しなければならない。

そのような状況下、かろうじて組み上げられたロージナ試作機が「完成」となり、初の打ち上げ試験が行われる。

目標は『自動操縦でのドッキング』。宇宙服を着せたマネキンを載せ、二機を打ち上げる。

一機目は順調に進み、地球周回軌道に乗った。ところが不具合が発生して操作不能になり、他国に墜ちる前に自爆措置が取られた。

二機目は発射台でロケットエンジンの点火に失敗し、発射台を巻き込んで大爆発。修復をしなければ使えなくなり、早々に計画にズレが生じる事態となる。

試作機は散々な結果に終わり、現場は「再完成」を目指す。

そして、三か月後。

三回目のマネキン打ち上げ試験に挑戦。

打ち上げは成功し、地球周回軌道に乗る。ここで姿勢制御用スラスターが故障、さらに電力不足となるも「不具合は軽微。続行」との判断が下される。しかし「軽微」の判断は誤っており、大気圏再突入の角度が想定外になって、氷の海に沈没。引き揚げた機体には穴まで開いていた。これが有人飛行であれば搭乗員は確実に死んでいた。

完成には程遠い欠陥品だった。

悲惨な試験結果は、『ライカ44』で訓練に励むレフたちを怯おびえさせる。搭乗を想像するだけで足が震える「金属の棺ひつぎ」だ。

ただ、同時に朗報も入った。上層部が計画変更についての臨時委員会を開くという。

「延期になって、宇宙船内での結婚演出もなくなればいいのにな」

レフが期待すると、イリナが怪け訝げんな顔をする。

「でも、どうしてレフは委員会に呼ばれないの？　最高会議の委員なのに」

レフは肩をすぼめる。

「城塞区画ネグリンの偉い人は、現場からごちゃごちゃ言われたくないんだ。俺だけじゃなくて、ヴィクトール中将も除のけ者。とにかく、少しでも長い延期を願うよ」

上層部の良識に委ねるしかなかった。

だが。

委員会から届いた通知は『現状どおり続行』。

　訓練センターの会議室に集められた飛行士たちに、ヴィクトール中将が怒気を込めたしゃがれ声で、通知の要約を伝える。

「『機体の穴は塞ふさげば問題はない。打ち上げ時の爆発は、三回目は起きなかったので問題はない。飛行中の不具合は自動操縦だから防げなかっただけであり、飛行士ならば手動で回避できるので問題はない。結論、問題は解消可能』……というお上のご判断だ」

　飛行士たちはただただ不信感を募らせる。三回の試験飛行で把握できた点しか見ておらず、根拠のない「問題なし」だ。

　皆の注目が『ロージナI号』の搭乗者、ミハイルに集まる。

　ミハイルは冷静な口調で答える。

「大々的に発表してしまった以上、やるしかないんだろう」

「延期すればいいじゃない」とイリナが悲痛な声で言った。

　それに対してローザは首を横に振る。

「連合王国のハイペリオン宇宙船が完成して、打ち上げ目前まで来ている。後おくれを取るわけにはいかないんでしょう」

　イリナは天を仰ぐ。

「馬鹿馬鹿しい。偉い人が自分で乗ればいいのに」

　皆の気持ちを代弁した彼女の言葉で会議室は静まり返った。

　そこへ内線がけたたましく鳴る。近くにいた飛行士が受話器を取って応対すると、みるみるうちに表情が深刻になり、通話口を手で押さえて声を張り上げる。

「同志中将、事故です！」

　またか、という陰いん鬱うつな空気が会議室に流れる。ヴィクトール中将もうんざりした様子で問う。

「今度はどこで何が起きた？」

「違います！　事故を起こしたのはＡＮＳＡです！」

事故はすぐさま世界中でニュースになり、共和国でも大きく報じられた。

《ＡＮＳＡの新型宇宙船ハイペリオン、爆発炎上──》

連合王国の宇宙開発都市『ライカLike a□クレセントcrescent』にあるロケット発射センターにおいて、ハイペリオン宇宙船の地上試験が行われた。

開発を請け負った航空機メーカーから機体が搬送されてきたあと、技師の手により七〇〇箇所以上もの修正を施したが、それでもまだ電気回路や無線などに改善すべき点が多々見つかり、打ち上げ試験の段階には至っていなかった。

そこで、地上試験で、打ち上げ直前までのシミュレーションを実施することになった。宇宙船を発射台に置き、すべてのシステムを起動し、エンジン点火以外を本番同様にしてカウントダウンをする。

この試験は、まず無人で行い、後日に宇宙飛行士を座らせて再試験をする予定だったが、一部の政治家が「最初から座らせたらいい。点火しない地上試験なら安全だろう」とＡＮＳＡに要請した。その裏には「共和国に大きく先行して、間近に迫った選挙を有利に進めたい」という私欲があり、予算で揺さぶりをかけた。

しかし、ここでアーロン・ファイフィールド飛行士が機体の問題点を指摘する。

『三層あるハッチが緊急時の脱出を想定できていない。通常時でもハッチを開けるのに九〇秒もかかり、しかも内開きでは命に関わる』

開発請負企業は納期までに完成させるのに必死で、緊急時のことまで気が回っていなかった。ＡＮＳＡと政府はアーロンの意見を踏まえて協議し、安全面を優先して「無人試験」を選択した。

こうして無人の地上試験が実施された。

試験中には謎なぞの異臭や通信機器の不具合が発生し、船内を満たす高濃度酸素の異常値を知らせる警告が何度も鳴った。試験を一時停止して調べても原因がわからず、そのままつづけていたところ、前触れもなく船内で火災が発生し、宇宙船が爆発炎上した。

もし有人で試験を行っていれば、飛行士三名の命が失われていた。

死者が出なかったのは不幸中の幸いだが、事故の原因究明のためにＡＮＳＡは調査委員会を設置。ハイペリオン計画の遅延が決定的になった。

その騒動のなか、連合王国のタブロイド紙『アーナックニューズ』がスクープを報じる。

《連合王国は月への競争から撤退!?　開発請負会社の重大な欠陥隠し！》

だが、三流デマ新聞のスクープなど誰も信じない。仮に死者がひとりでも出ていれば撤退にも信しん憑ぴよう性せいはあるが、莫大な予算が投じられているハイペリオン計画が火災事故だけで中止になるはずがない。

この事故は共和国の技術者たちに波紋を広げる。予算と技術力で上回る連合王国が原因を見つけられないほど、月へ行くための宇宙船開発は困難なのか。ハイペリオンの上を行く、我々の新型宇宙船『ロージナ』は完成できるのか、と。

搭乗予定者のレフたちは、不安と疑念に包まれたまま、夏期休暇も取らずに訓練をつづける。いつどんな命令が下されても対応できるように、準備は万端にしておかねばならない。

計画どおりならば、秋には『ロージナI号＆II号』の有人飛行が実施される予定だった。

季節は瞬またたく間に移ろい、落葉樹が黄金色に染まり始めた頃。レフたち搭乗予定者は呼び出しを受け、訓練センターの所長室に入った。

「ロージナの打ち上げ日程が決まった」

肘ひじ掛かけ椅い子すに腰かけていたヴィクトール中将がゆっくりと立ち上がる。手には委員会からの通知用紙が握られている。

「I号が一一月三日、II号が翌四日だ」

二か月後。

秋だと予測し、覚悟もしていたが、具体的に決まると身体からだに震えが走る。

表情を引き締めたミハイルが問う。

「機体の問題は解消されたのでしょうか」

「現在も作業中のようだ」

ローザが低い声で追及する。

「修正は間に合うんですか？」

眉み間けんに深い皺しわを刻んだヴィクトール中将は首を横に振る。

「私にはわからん。だが、敵の不幸につけ込むならば、今しかないのだろう」

「ねえ、ちょっと」

　イリナが口を挟む。

「一一月三日って……もしかしてマールイに合わせたの？」

　その名を言われてレフはハッとなる。レフだけではない。ミハイルもローザも、その場にいる全員の表情が変わった。

　──一九五七年一一月三日、共和国の実験犬・マールイは史上初めて宇宙を飛んだ動物になった。そして、一九六六年のその日に、ロージナI号は打ち上げられる。宇宙を飛び、そのまま星になった、哀かなしき猟犬ライカの命日に。

　飛行士は犬と同じ。

　人命を無視する上層部の方針にレフは憤いきどおる。

「正気ですか！　連合王国でハイペリオンの事故が起きたばかりですよ！」

　ヴィクトール中将は腕組みをして二度三度と頷うなずく。

「ＡＮＳＡの調査結果をもとにロージナを改良したそうだ。あの火災は高濃度酸素と配線の火花が原因らしいので、絶縁性の高い配線に交換し、発熱するものも撤去。これで問題なし、ということらしい」

「火災だけの問題じゃないですよ！　それに、ハイペリオンの事故がなければ、火災の対策も不十分だったんじゃないですか！」

　ここで吠えても無意味だとわかっていながら、レフは上官に苛いら立だちをぶつけてしまった。

　アッとなったレフは慌てて頭を下げる。

「申し訳ありません！」

「構わん。お前も胃薬が必要だな」

　ヴィクトール中将はかすれた声で言って、どっかりと肘ひじ掛かけ椅い子すに腰かける。

暗あん鬱うつな沈黙が室内を満たすと、セミョーンが独り言を漏らす。

「チーフがいればな……」

誰もがそう思う。

昨年、コローヴィンは入院先で「今打ち上げれば一〇〇パーセント失敗するが、一年あれば完成する」と言っていた。皆は彼の復帰を切望するが、もう永遠に目を覚まさないのではないかという憂苦が現場には蔓まん延えんしている。

イリナは哀かなしげな目をしてうつむく。

「みんながチーフ、チーフって頼り切りだったから、おじさんはポンコツなのに無理しちゃったんじゃないの……」

本人の強い意志もあっただろうが、ひとりですべてを担当するのは肉体的にも精神的にもとてつもない重圧だったはず。

病室でコローヴィンと交わした最後の会話をレフは思い出す。宇宙船は完成させるから安心しろと断言し、若き日に抱いていた夢をレフたちに託して、飛びつづけろと背中を押してくれた。

もし彼が今の状況を知ったら、嘆くに違いない。

完成には程遠い欠陥品で──飛行士たちは見たことすらない新型宇宙船で宙そらに打ち上げられるのだ。

「……あれ？」

レフは、ふと気づいた。ロージナについての気が滅め入いる話はつぎつぎ入ってくるけれど、まだ実物を一度も見ていない。

「このなかで誰か、ロージナの機体を見た人はいる？」

誰も名乗り出ない。

もしコローヴィンが現場にいれば一度は見学に招待してくれたはずだが、今は不在だ。指揮系統が混乱し、秘密主義が極まるあまり、現場同士の連携がまったく取れていないのだろう。

　ならば自分で動くしかない。

「俺、設計局に行って、機体を確認しようと思う。連合王国のアーロンさんが設計の不備を見つけて飛行士の命を救ったみたいに、悪い点を見つけられれば延期もあるはずだ」

　ミハイルは頷うなずきながらも、表情は冴さえない。

「君の意見はもっともだが、極秘の開発現場に入れてもらえるのか？　飛行士とはいえ部外者扱い。立ち入り禁止だろう」

　サングラードの北東二三キロメートルにある第一設計局は、閉鎖都市の類いではないけれど、軍部の開発拠点なので入場が厳しく制限される。

　それを理解した上で動くつもりのレフは、あまり口にしたくはなかったが、苦笑いを浮かべながら親指で自分を指す。

「俺は国家英雄の勲章を持つ宇宙飛行士。訓練センターの副長官であり、国家最高会議の委員だ。国がくれた武器を、たまには使っても許されるんじゃないかな」

　アッとイリナが瞳ひとみを輝かせる。

「私も一緒に行く！」

　レフはヴィクトール中将に向き直る。

「同志中将、代替え要員バツクアツプの俺たちふたりで視察に行く許可をください」

「よし。私も『連邦英雄』という武器を使わせてもらおう」

　ヴィクトール中将はドンと胸を叩たたき、さっそく第一設計局に連絡を入れる。

　燦さん然ぜんたる武器は効果てきめんで、コローヴィンの留守を預かる次席はすんなりと入場を認めた。視察を告げたときは驚いていたが、理由を知ると平身低頭で、むしろ藁わらにもすがる思いなのかもしれない。

　篦ヘラ鹿ジカや針ハリ鼠ネズミの生息する深い森林に隣接して、第一設計局を擁する都市がある。戦前は兵器製造の中心地として栄えた工場群は、コローヴィンの手により宇宙開発用に再編成されている。

　第一設計局に入ったレフとイリナは作業着に着替え、現場監督を務める技師長に連れられて、厳重に管理された工房の鉄扉をとおる。

　そこに鎮座する未来の乗り物を見たふたりは目を丸くする。

「これが、ロージナ……」

　全長約七メートル。三区画からなる機体は『ミェチタ号』よりも遥かに巨大。

　この船が星の海を渡り、月へ向かう……。そう思うと、レフの全身を稲いな妻ずまが走り抜ける。

　ふたりが感銘を受ける一方で、白髪交じりの技師長は泣きを入れる。

「修正が全然追いつかず、すみません……」

　開発に従事する下級技師たちもレフとイリナの周りに集まり、深く頭を下げる。

　だが、現場の彼らを責める気などさらさらない。問題の原因は、指揮官の不在と予算不足、そして上から押しつけられる無理難題だ。だからレフは精一杯やっている彼らを鼓舞する。

「同志の皆さん、顔を上げてください。私たちも皆さんと同じ、月を目指す同志です。今日、私たちは皆さんの力になりたいと思い、ここに来ました！」

　イリナも優しく励ます。

「私も彼も、現場で働く皆さんのおかげで宇宙飛行士になれたんです。とても感謝しています。安全な宇宙飛行ができるようにがんばりましょう」

　うれしい言葉をかけられた技師たちの顔がパッと明るくなる。

さあ、悪い点を探し出そう。

意気込むレフとイリナだったが、検査を始めてすぐに雲行きが怪しくなる。修正が済んでいない欠陥が、技師長の口から怒ど涛とうのように明かされるのだ。

「そ、そんなにあるんですか……？」

「あちらを直せばこちらがおかしくなる……その繰り返しです……」

それから夜を徹して機器の検証をするも、新たな不具合がつぎつぎに発掘される。

「ああもう、何がどうなってるのよ……!?」

機械油で額や頬ほおを真っ黒にしたイリナが悲鳴を上げる。技師たちを責める気はないレフも、さすがにうんざりしてくる。

「無人機で試験をしたとき、完成していたはずではないんですか……？」

憔しよう悴すいした技師長はかすれた声を絞り出す。

「納期が来てしまい、その時点で組み立てたものを『完成』とするしかなく、次席も泣く泣く、『問題点がわかれば修正できる』と委員会に報告を……」

全身から力が抜ける。チーフひとりがいなくなっただけでここまで崩壊するのか。

「……検査をつづけましょう。対策を立てなければ大変なことになる」

長期戦になりそうなので、レフはヴィクトール中将に「終わり次第戻ります」と連絡を入れ、技師長に頼んで二名分の宿泊所を用意してもらう。そして、焦燥感に駆られながらも、ひとつひとつ丁寧に確認をする。

遮熱と気密性。帰還船の分離、各種センサー。光学照準器、宇宙飛行士の方向指示器、ジャイロスコープ、電子計算制御装置、ランデヴーとドッキング用の照準器と探針誘導装置。食事をゆっくり取

る余裕もなく、現場で固いパンをかじり、夜昼の区別なく検査をつづける。

　そして一週間かけて、すべて終えたが──

「まずいぞ……」

　リストアップした問題点を数えて、レフとイリナは頭を抱える。

　構造上の問題、二〇三点。

　些さ細さいなものも入っているが、あまりにもひどい。寝不足と空腹とが相まって倒れそうになる。

　顔面蒼そう白はくの技師長は「なんとしても修正します！」と意気込むが、二か月で何点を改善できるかなど皆目検討がつかない。

　これだけ欠陥のある新型宇宙船で有人宇宙飛行をするのは自殺行為だ。

「どうする、レフ」

「延期するように、上を説得しないと」

　上層部が第一設計局をどう見ているのか、技師長に話を聞く。すると、コローヴィンが倒れて以来、誰ひとり現場を視察に来ていないとわかった。つまり、城塞区画ネグリンの机の上だけで計画は進められている。

　そこに現場の惨状を突きつけられれば、さすがに考えも変わるのではないか。

「よし、イリナ。委員会で協議させるための報告書を作成しよう」

　二〇三点の欠陥をただ並べても、委員たちの大半は航空技術には疎いので伝わらない。初心者でも危険性が理解できるように噛かみ砕いて、事細かく丁寧に、それでいて誇張し、一点一点を強調する。

　書けば書くほど絶望がひしひしと迫ってくる。だが、それだけ無謀な計画だと上層部にも伝わるだろう。

ろくに休みも取らずに二日間徹夜して、目を覆いたくなるような報告書が完成した。

「さあ、みんなに確認してもらおう……！」

疲労困こん憊ぱいのレフとイリナは技師たちに問題改善の健闘を祈り、『ライカ44』へと舞い戻る。

訓練センターの会議室に集まった飛行士や技師たちは報告書を読み、絶句した。

「この報告書を委員会に提出する」というレフの案に皆は同意するも、ヴィクトール中将は懸念を示す。

「提出しても、協議されなければ無意味だ」

ここが連合王国ならば、上層部と現場の者が自由に話し合いをできる場が設けられているが、共和国にそのような機会はない。最終的にゲルギエフを説得せねばならないが、郵送では彼の手に渡る前に焼却される可能性が高い。城塞区画ネグリンに直接持って行っても、門前払いを食らうのが目に見えている。レフは国家の英雄としてゲルギエフに気に入られているが、彼が求める話題は『外国の土産みやげ話ばなし』と『偉業の評価』だけで、現場の不満や技術的な話などいっさい受け付けないのだ。

「報告書を上に突きつけ、宇宙船改良のための延期を直訴し、説得できる者……」

そんな大物はコローヴィン以外にいない。

ヴィクトール中将が渋々と言う。

「〔運送屋〕に頼むか」

この国で上に意見をする場合、第三者を使って横よこ槍やりを入れるのは常じよう套とう手段だ。

開発現場からの嘆願書ではなく、軍や政界を監視する〔運送屋〕──国家保安委員会からの『意見書』として党指導部へ突きつけ、計画の正当性を問う。また、〔運送屋〕の議長は、自身の権力の一端

を奪ったゲルギエフを嫌悪しているので、ゲルギエフが推し進める宇宙開発計画をくじく道具が手に入れば、嬉々として攻撃に使うだろう。

「同志中将。頼むとして、報告書を受け取ってくれる人はいるんでしょうか」

　ローザの疑問にヴィクトール中将は難しい顔をする。

「それが問題だ」

「いますよ」

　レフに皆が注目する。

「多くは語れませんが、俺に任せてください」

　共同宿舎の寮母に扮して訓練センターを監視し、素性を明かしたあとはレフとイリナの連合王国横断旅行にお目付役として同行した〔運送屋〕。そんな彼女は現在、サングラードの本部に詰めており、直接連絡を取るのは難しい。そこでレフは彼女の後任の〔運送屋〕に「緊急事態だ」と頭を下げて、半ば強引に電話を入れてもらう。

「──はぁ。君は本当に厄介事ばかり起こしてくれる」

　事情を話して助力を懇請すると、電話越しにでも困った顔が浮かぶような反応が返ってきた。

「国家運営を妨害する類いの書類は、受け渡しをするだけでも危ない。理解してる？」

「そこをどうか……！　こちらも同志の命がかかっているんです！」

　必死に頼み込むレフ。彼女ならば引き受けてくれる確信がある。

　かつてレフが、サガレヴィッチ副長官への暴行容疑で独房に留置されたとき、イリナの元へ向かう許可をくれた彼女。そして、寮母として毎日美お味いしい食事を候補生に振る舞っていた彼女が、ミハイルやローザを見捨てるわけがない。

　非情で冷酷とされる〔運送屋〕だが、彼女には人間の温かい血が流れているはずだ。

「お願いします！　ナタリアさん！」

「だから私はナタリアではない。潜伏のための偽名だと何回言ったらわかるんだ」

「いいえ。俺たちにとって、あなたはナタリアさんです。あなたが去ってからブリュシチの味が落ちたとみんな嘆いてます」

「まったく……」

　電話越しに彼女の溜め息いきが聞こえた。

　そして。

「……仕方ない。了解した。裏から議長に渡す」

「ありがとうございます！」

「ただし、私は渡すことしかできない。そこは理解しておきなさい」

　彼女の言うとおり、報告書を提出したところで、何も変わらない可能性も高い。しかし、今はこの方法に賭かけるしかない。

　ロージナの打ち上げまで残り一か月と迫った一〇月初旬。

　火災事故の調査を終えたＡＮＳＡが満を持して「ハイペリオン計

画の再開」を発表し、サングラードの共和国上層部が色めき立つなか、ロージナの搭乗予定者たちは『ライカ44』の訓練センターの会議室に招集された。

　中央委員会から『ロージナI号＆II号に関する飛行想定書』が届いたのだ。

　計画の変更は叶ったのか。レフは大きな不安を抱えたまま、飛行想定書に目をとおす。

・一一月三日、ミハイルが搭乗するI号の打ち上げ。

・一一月四日、I号が基地の上空を通過した直後、ローザとセミョーンの搭乗するII号を打ち上げる。

□II号は地球軌道を周回。そこへI号が軌道を変え、接近。

・ランデヴー後、ドッキング。ローザの船外活動へ。

□II号から出たローザがI号に移乗し、指輪の交換と口づけをする。

・帰還。

　日付は変更されず、手順が具体化している。

　通知には、『欠陥についての調査報告書』に関する協議の結果が付記されている。

　賛成多数。反対者はたった一名、第一設計局次席のみ。

「駄目か……」

　レフとイリナはガックリと肩を落とす。決定を覆すのはやはり無理だった。〔運送屋〕の横よこ槍やりで臨時委員会は開かれたが、苦心して作成した報告書は権力によって捻ひねり潰つぶされた。

　険しい顔つきのミハイルはヴィクトール中将に問う。

「無人機での打ち上げ試験をもう一度やれないのでしょうか」

「予算がないため、ぶっつけ本番となるそうだ。ＡＮＳＡが再始動した今、止まるわけにはいかんのだろうよ」

　ヴィクトール中将は青筋を立てて、通知用紙をぐしゃりと丸める。

「宇宙結婚式に延期があるとすれば、ロージナが地上で爆発するくらいの事故が必要だ」

　もしそうなれば飛行士は助かるが、技師たちの首が飛んでしまう。

　イリナが溜め息いき交じりに言う。

「もしかしたら私、大きな勘違いをしてたかも。人間は吸血鬼にだけじゃなくて、同族に対しても、ひどいことを平気でするのね」

　実験体だったイリナは夢を叶えるために、死を覚悟して宙そらを飛んだ。

　しかし今回は事情が違う。ミハイルとローザは月への競争と政治宣伝のために、人生と命を弄もてあそばれている。

　首謀者はゲルギエフ。

　かつて、実験犬のマールイが宇宙で死んだとき、彼は悲しんだとレフは伝え聞いていた。それが今やどうだ。年月や政争が人を変えたのか、それとも、人柄をよく見せるための嘘うそにずっと騙だまされていたのか？

　腹の虫が治まらず、レフは行き場のない怒りを吐き出す。

「俺たちは祖国に命を捧ささげた実験犬マールイと同じ、野原を彷徨さまよう猟犬ライカだというのか！」

　皆が口を閉ざす。

　重い空気が満ちるなか、ミハイルは落ち着いた声でレフに話しかける。

「ひとつ言わせてくれ。俺たちが生還できない前提で話をするな」

　レフはハッと息を呑のむ。

「すまない、そのとおりだ……」

「いや、いいんだ。危険な挑戦になるのは間違いない」

　そしてミハイルはイリナに歩み寄り、真剣な眼まな差ざしを向ける。

「イリナ。俺はようやく、未知の宇宙へ挑む者の気持ちがわかった気がする。死を覚悟して飛んだ君は、本当に偉大だ」

「なっ……」

　褒ほめられて照れくさいのか、イリナは鼻をすんと鳴らす。

「べつに……私はキャビンに座ってただけだから」

「しかし、世界は君を偉大な飛行士だと思っている。三〇億人に向けて『レフと月へ行く』と宣言もしただろう」

　慌てて視線を落とすイリナ。

「口が滑ったの！　そ、そんな昔のこと忘れたしっ！」

「そうか。でも――」

　ミハイルは微笑を浮かべ、イリナの耳元で何か囁ささやく。

　直後、イリナの恥じらいがボッと燃えた。

「――はぁ!?　今度それ言ったら噛かむわよ！」

「わかった。言わない」

　ミハイルは両手を上に向け、適当な感じで謝る。

　いったい何を言ったのだろうか。項うな垂だれて髪で顔を隠してしまったイリナに訊たずねても絶対に教えてくれないだろう。

　と、レフが気にしていると、ローザと目が合い、クスッと笑われた。

「なに……？」

「いいえ。イリナは可か愛わいいなって。それよりロージナよ」

　ローザは真顔になり、胸に手を当てると、自分に言い聞かせるように強く語る。

「成功を目指して訓練をつづける。自分に勝ち、恐れを振り払う。その先に死があるかもしれない。それは、空軍でテストパイロットをやっていた頃から変わらない。相手が未知の世界になっただけ。そうよね、みんな」

　飛行士たちは口々に「そうだ」と頷うなずく。後戻りができないならば、決死隊だろうが挑むしかない。たとえその道の先が途切れているとしても、覚悟を決めるしかないのだ。

　かつては神話だった月世界も、『ディアナVII号』の軟着陸から一年が経ち、荒涼たる風景は日常になった。

　ロージナも同じだ。生還できないと悲観するのではなく、同志の技術者を信じ、偉業の達成を信じ、何度でも奇跡は起きると信じる。

　レフは瞳ひとみを閉じて、切に願う。

　月の女神よ、我らを導いてくれ、と。

　秋は深まり、七竈リヤビーナの葉と実が真っ赤に色づく。そして冬が近づくにつれて、運命の日も迫ってくる。

一〇月も半ばに入り、打ち上げまで三週間。

搭乗者たちはロージナを乗りこなす仕上げに入った。基本的には自動操縦とはいえ、今回の飛行に関しては、現場の誰もがこう考えている。

──緊急事態は必ず起きて、手動操縦の出番が来るだろう。

ロージナの完成状況を確認すべく、レフは第一設計局の技師長に電話で訊たずねた。

「改善は進みましたが、課題はまだまだ残っています」と技師長は弱々しく答えた。全力を尽くしているようだが、具体的な数字はいっさい示されず、謝罪の気持ちだけが伝わってくる。

この苦しい現況を仲間に隠しても仕方ないので、レフは受け取ったままの印象をヴィクトール中将や搭乗者たちに報告する。

当然、場の空気はどんよりと沈む。

レフは自分が搭乗者なら「大丈夫！」と無理やりにでも明るく振る舞うのだが、今回は代替え要員バツクアツプだ。無責任な発言は控えたいので黙っていると、ミハイルが勢いよく手を鳴らす。

「さあ、訓練を始めよう。技術者が仕上げても、俺たちがヘマをすれば彼らの努力が無駄になる」

ミハイルの心から乱れはまったく感じられない。そして、それはローザも同じだ。

「私こそ任務重大よ。船外活動は自動操縦じゃなくて、自分の身体からだが頼りなんだから。今度こそ、宇宙酔いを克服しなきゃ」

ヴィクトール中将は感心したように何度も頷うなずく。「お前たちなら、大戦中でもすばらしい勲功を立てられただろう」と。

ミハイルとローザは見つめ合って「それはどうでしょうか」と苦笑を返した。

搭乗予定のある者たちは飛行手順書を熟読し、より高度な訓練に

挑む。

　遠心加速器から水平に伸びる鉄骨の先に宇宙船のシミュレーターを取りつけ、大気圏再突入時の宇宙船の向きを決める。失敗すれば、身体が悲鳴をあげるほどの強烈な荷重に襲われる。

　つぎはランデヴーやドッキングを想定した訓練。どちらも未達成なので連合王国の成功事例から技術を盗むしかない。

　ロージナI号に搭乗するミハイルは、シミュレーター上で完璧な操縦を披露する。これまで有人飛行をしていない新型宇宙船だろうと、彼の腕前なら大丈夫だと皆が賞賛していた。

　訓練を終えたミハイルは汗を拭ふきながら嘯うそぶく。

「問題ない。人間の指示どおりに動いてくれさえすればな」

　一方、代替え要員バツクアツプのレフは何度も挑戦してようやく成功する。レフよりもミハイルの方が訓練時間が多いのは確かだが、それでもミハイルの操縦技術は超絶技。

　失敗したレフが悔しがっていると、ミハイルは冷淡な口調で言う。

「安心しろ。代替え要員の出番はない」

「でも、準備は万端にしておくよ。怪け我がや流行はやり病やまいだってありえるし」

「いいや、君に譲ったら、君がローザと口づけをするわけだ。それは許せないな」

　真顔でミハイルが言うので、レフは焦る。

「そ、それはないよね？」

「浮気はイリナに怒られるぞ？」

「おい、だからっ……！」

　ミハイルはフフッと笑みをこぼすと、額に汗を浮かべるレフの頭をポンと叩たたく。

「冗談だ。本気にするな」

そのときレフは、ミハイルが新型宇宙船の最初の搭乗者に選ばれた理由がわかった気がした。彼とは飛行技術も精神力も歴然たる差がある。そしてその差は、ローザとイリナの方が顕著だろう。『サングラードの白しろ薔ば薇ら』の異名を持つローザに対して、イリナは空軍でのテストパイロットの経験がないのだ。訓練を重ねて単独飛行ができるレベルにまで成長したとはいえ、新型宇宙船に乗せられるほどの信頼感はない。

しかし、代替え要員ならば搭乗する可能性は低いので、ゲルギエフはレフとイリナを指名した。

今も訓練に励んでいるイリナが同様の推測をしているかはわからないが、言えばきっと傷つけてしまうので、レフは心に秘めておく。

ローザに課された試練は、船外活動で宇宙船を移乗するという大技だ。

本番と同条件で訓練をしたくても地球上で無重力状態は作れないため、巨大プールで浮力を利用した方法を取る。

セミョーンの指導の下、模擬宇宙服をローザは着用し、動きにくい水中で特訓をする。イリナは酸素ボンベを背負い、宇宙服の浮力を調節するためにローザに付き添う。また、イリナはローザの代替え要員なので、時間を決めて役割を逆転させる。

最初は四苦八苦していた彼女たちも、持ち前の運動能力ですぐに上達する。しかし、水中は水中だ。完全な無重力状態にはなり得ず、潜っても自身の重さや水の抵抗を感じる。すぐ近くには陸地があり、技術系の職員が見守っている。宇宙空間のように、命綱が切れたら星の海の彼方かなたへ飛ばされてしまう危険もない。

宇宙服は重くて暑く、潜水訓練を長時間するのはとても過酷だ。意識が朦もう朧ろうとすることもある。プールから上がって宇宙服を脱ぐと下着は汗が絞れるほどで、暑さの苦手なイリナは「ふぇ～……」とぐったり。

訓練グループは男社会で、女性はイリナとローザだけなので、更

衣室ではふたりきりになる。

「大丈夫？　はい、飲んで」

　氷たっぷりの炭酸檸檬水レモネードをローザにもらったイリナはゴクゴクと一気に飲み干し、氷をかじる。

「……はぁ、ありがと……生き返った……」

「いいえ。本当につらそうね」

「つらそうじゃなくて、つらい……暑いのは駄目……」

　イリナは氷の入ったコップを額や首筋に押し当て、身体からだを冷やす。

「人間と暮らしてると、正直、羨うらやましいと思う瞬間は結構ある……日傘は面倒だし、味覚ないのは寂しいし、いろいろ……」

「そうなのね」

「あ」

　イリナはコップを置くと、シャキッと背筋を伸ばす。

「そ、そんなに羨ましくないし……吸血鬼が優れてる点も多いけどねっ!?　夜目がきくから、月や星はローザの一〇倍ぐらい見えてるわ。あと、雪原でオーロラを見てても全然寒くないし、えーっと……あと、血の臭いでいろいろわかるのよ」

　種族の自尊心を取り繕うイリナにローザは吹き出しそうになりつつ、堪こらえてジッと見つめる。

「ねえ、イリナ。私、ずっと謝りたかったことがあるんだけど」

「え？　なに？」

「あなたが宇宙から帰ってきたあと、犬以下とか、『呪われし種』とか、ひどいこと言っちゃったよね」

　イリナはうんうんと頷うなずく。

「あの頃のあなたとミハイルは大っ嫌いだった」

「そうよね。ごめんなさい」

　ローザはペコッと頭を下げる。するとイリナは彼女の謝罪に驚いたように、手をパタパタと振る。

「でも、私の態度も悪かったと思うし。あなたに何て言ったっけ？　舞マイ舞マイ虫ムシ？　あっ、蛞ナメ蝓クジ？」

「どっちも違う。雪虫」

　首をひねるイリナ。

「雪虫……？　あっ！　思い出した。髪の色が白金だから、それで――」

　ローザは遮さえぎって言う。

「蛞蝓ナメクジってひどくない？」

「そのくらい嫌な思い出だったのよ」

「じゃあ舞マイ舞マイ虫ムシって何？　名前は可か愛わいいけど。蝶ちよう々ちよう？」

「ううん。水面をチョロチョロ泳ぐちっちゃい虫」

　ローザはムッと唇を歪ゆがめる。

「さっき謝ったの取り消す。なし」

「犬以下だって相当ひどいでしょ！」

「人間が羨うらやましいなら犬以下じゃない？」

　ぐぬぬと唸うなるイリナ。

「雪虫以下の人間はしゃべらないで」

「はぁ、生意気な吸血鬼にくっつかれてるレフが可か哀わい想そう」

「はぁ、ブリュシチに機械の部品を入れられちゃうミハイルが心配」

ムッと睨にらみ合ったふたりはプッと吹き出す。

ローザは面映ゆげな微ほほ笑えみを浮かべる。

「そろそろ戻らないと。私、シャワーを浴びてくる」

ローザが着替えを持って歩き出すと、イリナが「ねえ」と呼び止める。

「なに？」

「応援してるわ。船外活動がんばって」

「ええ、ありがと」

イリナは心配そうに瞳ひとみを揺らす。

「……死なないでね」

ローザはイリナに向ける。

「死は覚悟してる」

着替えをぎゅっと握り、きっぱりと断言する。

「でも私は死なない。絶対に」

重戦車が鉄てつ柵さくを強引に押し潰つぶしていくように、『すばらしき計画』は障害を物ともせずに進行する。

一〇月、最終週。ロージナI号＆II号に搭乗予定のある飛行士たち

はアルビナール宇宙基地に移動し、基地職員や技師団、第一設計局次席らと最終準備に入る。

　I号の打ち上げ予定日時は一一月三日、午前〇時三五分。それまでの一週間は待機期間となり、医療検査や報道機関への対応をする。

　人里離れた岩石砂漠にひっそりと存在する閉鎖都市・アルビナールは、宇宙開発の恩恵を受け、施設や市街地が大きく発展した。

　かつてレフとミハイルが寝食をともにした小屋はもう使われず、宇宙飛行士が滞在するための真新しいホテルに宿泊する。

　そのホテルの一角にある遊技場で、搭乗予定者たちは報道陣向けに余暇を楽しむ様子を見せる。

　今回はビリヤードだ。かっこよく決める姿をカメラマンから要求されるが、レフもイリナも、そしてローザもミスを連発。作り笑いで誤ご魔ま化かすしかない。

　一方、ミハイルはミスもなくつぎつぎと球を落とし、カメラマンから文句のひとつも出ない。

　レフとイリナはヒソヒソと、「ミハイルは化け物か」「精神力強すぎ……」と囁ささやき合う。じつは撮影を始める直前まで『ロージナに関する緊急会議』が開かれていたのだが、技師長から「いまだに修正をつづけている」と恐ろしい報告を受けたため、ビリヤードどころではなかったのだ。

　最初に技師長は「無人探査機の試験で開いてしまった穴の対策は万全です。機体を断熱材で覆い、厳しい耐熱試験もクリアしました」と自信満々で言い切った。

　つぎに、悪い報告が待っていた。

「太陽電池を保護するパネルがほかのシステムと干渉して、ときどき、正常に作動しません。打ち上げまでには直します」と技師長は深々と頭を下げた。

　ヴィクトール中将は眉まゆ根ねを寄せたが、ミハイルは「不安点が事前にわかっていれば手動操縦で対応もしやすい。現時点での欠陥をすべて教えてほしい」と頼んでいた。真剣な口調は技師長を責めたり庇かばったりするものではなく、宇宙飛行士としての職務を

遂行しようという純粋な意思だとレフは感じた。

　ミハイルを化け物だと思うのはローザも同じらしく、カメラを向けられている彼を見て「何を考えてるんだろうって不思議に思うこともよくある」とコソッとつぶやく。

「一緒に住んでるのにわからないの？」

　イリナがぽかんとすると、ローザは自じ嘲ちようするように肩をすくめる。

「でも頼りがいがあるし、今では彼が結婚相手で良かったと思える」

　その言葉を聞けて、レフはなんだかホッとして、肩の荷が下りた気持ちになる。ただ、数日先に待ち受ける試練の儀式を想像すると気分は複雑だ。

　ミハイルの独壇場だったビリヤードが終わると、今度は新郎新婦への取材が行われる。記者は宇宙船が未完成だとは知らないので、ごく一般的な質問をする。

「史上初の宇宙結婚式ですが、現在の心境はどうですか？」

　まずミハイルが落ち着いた口調で丁寧に答える。

「私たち宇宙飛行士は厳しい訓練を重ねてきました。誰もが成功するという自信に満ちています。新型宇宙船『ロージナ』は、祖国の科学力と優秀な技術者の実践の成果であり、同志の皆様にすばらしい宇宙の旅をお見せできると確信しています」

　模範的な回答をしたミハイルはひとつ息を吐き、眉まゆをハの字に下げる。

「不安な点は、指輪の交換と誓いの口づけです。無重力での練習はできませんから」

　ローザも困った顔で言う。

「私もそこが唯一心配です。間違って指輪を別の指にはめたり、誓いの口づけで鼻をぶつけたりしないように注意します」

　記者はくすくすと笑うと、「指輪を見せてもらえませんか？」と要求する。

　ふたりはお揃そろいの結婚指輪を見せる。美しく輝く金の指輪だ。

　つづいて「ローザさんの手料理でとくに好きなものは？」と下世話な質問も始まる。

　ミハイルは幸せそうに声を弾ませる。

「雛豆のブリュシチです。彼女の作る料理はおいしくて、太ってしまいそうです」

　記者が少し意地悪な顔でローザに訊たずねる。

「料理にまつわる失敗談はありますか？　たとえば、ブリュシチに機械の部品が混ざってしまったとか？」

「今のところ、混ぜているのは愛情だけですね」

　ふたりはどんな質問でも丁寧に受け答えをする。

　見ているだけで胃がチクチク痛む取材をレフは隅で眺め、隣で同じくげんなりしているイリナと小声で会話を交わす。

「俺たちも立会人として訊きかれるぞ……」

「模範解答すればいいんでしょ……」

　新郎新婦への質問が終わると、予想どおりふたりは取材陣に囲まれ、言葉を求められる。

「晴れの舞台を宇宙で行う。人類の勝利。宇宙時代の到来でしょう」

　レフが真ま面じ目めに答えると、イリナも祝福の笑顔を作る。

「世界中の同志の皆さんが憧あこがれる結婚式になると思います」

　胸と腹に鈍痛を感じながらも乗り切る。帰還後の記者会見は心からの笑顔を見せられるといいのだけれど。

夜になるとレフたちはホテル内の小部屋に集められ、ヴィクトール中将に「心苦しいが、また書いてくれ……」と遺書をしたためるように命じられる。

一生涯で二度も書く羽目になるとは。

「待って!?　遺書なんて書いてたの!?」

びっくりした声をあげたのはイリナだ。

そういえば、彼女は実験体だった。打ち上げ前に遺書など準備させてもらえるわけがない。彼女が一緒にいて当たり前になっていたので、ヴィクトール中将も忘れていたようだ。

なぜ書くのかという理由を、ヴィクトール中将がイリナに説明する。

レフの打ち上げのとき以来、宇宙飛行士に選ばれたということは家族にも秘密だったので、遺書で伝えるしかなかった。そしてレフの宇宙飛行が見事に成功したので、そのまま縁起の良い慣習になった。

事情を知ったイリナは呆あきれた口調でレフに言う。

「この国の上層部はやっぱり頭がおかしい。どうせ『宇宙船が危険』とか書いたら駄目なんでしょ」

「勝手に修正されるだけだ」

「修正されるなら好き放題に書く」

本当に書きそうな気配を察したレフは真顔で咎とがめる。

「やめろって。『国家体制を毀き損そんする虚偽捏ねつ造ぞう』の罪で拘置所にぶち込まれるかもしれないぞ」

「わかったわよ。じゃあ模範的な遺書を教えなさい」

「はいはい」

レフはイリナに指示しつつ、実際に搭乗する者たちを横目に見

る。彼らは代替え要員バツクアツプとは心境が違うはずだ。

　ミハイルは黙々と書き、ローザは頬ほお杖づえをついて小さな吐息を漏らす。いつもは陽気なセミョーンも目を閉じて固まっている。

　ヴィクトール中将は厳粛な顔をして、ひとりひとり、ゆっくりと目線を送る。

「今回も、すべての遺書を不要品として焼却できるように願う」

　飛行士たちは皆、無言で強く頷うなずいた。

　打ち上げ予定日の三日前になると、宇宙船とロケットの最終確認のために、中央委員会の委員たちが現れる。軍事産業評議会の委員長、『ミェチタ』の開発に関わった技術者、計画を支持した者など幹部ばかり。彼らを案内する役は第一設計局の次席、技師長、ロケットを開発した第五二局長、そしてヴィクトール中将などの現場の者たちだ。

　委員たちに笑顔はない。「宇宙船は欠陥多数」と事前に伝わっている上に、今朝方、ＡＮＳＡが彼らを刺激する発表をしたのだ。

「――二月一日、ハイペリオン宇宙船での有人軌道飛行を行う。打ち上げには新大型ロケット『クロノスV』を使う」

　連合王国政府は火災事故を反省して、来年度から予算をさらに増額する。片や、貧困に喘あえぐ共和国はひとつの失敗も許されない。

委員たちの確認が完全非公開である一方、公式行事として、搭乗者たちはホテルの裏庭で記念植樹をする。

植樹には「祖国の母なる大地に根差して生きる」という共和国民の在り方を示す意味があり、一九六一年にレフが宇宙飛行士に指名されたあと、楡にれの苗木を植えて以来の慣例となった。

ここに今回、ロージナI号とII号の苗木が加わる。ミハイルとローザ、セミョーンは二本目の植樹だ。代替え要員バツクアツプであるレフやイリナは植樹はしない。

アルビナールの気候は寒暖差が激しく乾燥して厳しいが、これまでに植えられた九本の苗木はすくすくと元気に育っている。

レフはその光景を感慨深く眺める。

「宇宙開発がつづけば、いつかは宇宙飛行士の並木道になるだろうね」

「私、植えてない……」

しょんぼりと肩を落とすイリナ。遺書と同様、実験体だった彼女には無縁の儀式だと気づき、レフはアッとなる。

「ごめん！　今から植える？」

「結構よ。水だけあげるわ」

ツンとするイリナに如雨露じようろを渡すと、にこにこと「みんな大きくなってね」と水をやって回るが、レフの木だけ避ける。

「俺のは……？」

「蒸留酒でもあげたら？」

「枯れるだろ！」

ところが、ほかの飛行士にも口々に「酒にしろ」と言われて、「俺そんな飲んでるかな……」と頭を掻かくレフ。ともあれ、昔は疎外されていたイリナが今や皆に宇宙飛行士の同志として接せられているのを見ると、胸が温かくなった。

植樹の記念撮影を終えて解散となり、ホテルへ戻ろうとすると、毛皮の外がい套とうを着た女性がやってくる。

「ご無ぶ沙さ汰たね。同志宇宙飛行士の諸君」

口元に冷たい笑みを浮かべたリュドミラが紙袋を提げている。

レフは反射的に警戒する。ほかの飛行士たちも頬ほおを引き締める。

ピリッとした空気をリュドミラは気にする素振りもなく、紙袋をミハイルに差し出す。

「お祝い。甘くておいしい蜂蜜焼き菓子チヤクチヤク。みんなで食べてね」

「ありがとうございます」

頭を下げて受け取るミハイルにリュドミラが軽い調子で告げる。

「委員たちが宇宙船の確認を終えたよ。打ち上げは予定どおり行う」

いきなり通告されて、レフの肌が粟あわ立つ。

だが、そうなるだろうと予想していた。報告書の提出時よりも改善され、ＡＮＳＡの打ち上げ予定が出た今、中止になるわけがない。ミハイルたちも心構えはできており、反論もなく受け入れる。

「ところで今回、委員たちは帰らずに、君たちの帰還までここに残るんだって」

意外なことをリュドミラが言った。いつもならば委員たちは打ち上げを見届けると基地を出て、サングラードで報告を待っていた。

「不安なのかな」と呆あきれるリュドミラ。

レフは委員たちの醜怪な容よう貌ぼうを思い浮かべて、心からがっかりする。

「だったら打ち上げを中止すればいいのに……」

リュドミラは楡にれの木の葉を撫なでながら「無理よ」と返し

た。

「委員会全体の方針が賛成なら、反対はできない。君の作った報告書は物議を醸かもしたけど、結局、反対一名だからね。反対したチーフの後任、勇気あるよね。お掃除されないといいけど。あはは っ」

「あなたが結婚とか決めたの？」

　イリナが非難含みに睨にらむと、リュドミラは失笑を漏らす。

「それは誤解。今回の打ち上げや宇宙結婚式についてはむしろ反対」

「反対？」

「ええ。同志ゲルギエフがどうしてもって熱望するから、私は手伝ってるだけ。……もし、『宇宙でレフとイリナの結婚式をやる！』なんて言ってたら、絶対に止めたけど」

「なぜ、俺たちなら止めるんですか」

　レフが問うと、リュドミラは小首をかしげる。

「君たちの場合は、片方にでも死なれたら、大きな損失だから」

　裏を読めば、ミハイルとローザなら止めるほどでもないということか。

「人の命を値踏みするのはやめてくれ」

　率直に気持ちをぶつけると、リュドミラはふふっと笑みをこぼす。

「でも、君たちなら止めたいと考えるのは私だけじゃないよ？　利用したい人はたくさんいるもの。それこそ世界中にね。だって、『人類史上初の宇宙飛行士と吸血鬼』なんて替えは利かないんだから」

　ずけずけと言いたい放題で腹が立つが、反論してもどうせ受け流されるのでレフは黙る。

「それじゃ、披露宴で会いましょう」

　リュドミラが立ち去ろうとすると、ミハイルが蜂蜜焼き菓子チヤクチヤクの入った紙袋をずいと突き出す。

「お返しします。甘いもの好きではないので」

「残念。でも、甘い蜜月旅行は楽しんでね」

　リュドミラは紙袋を取ると、片手をひらりと挙げて立ち去る。その後ろ姿を、ローザは無言で睨にらみつける。

　ミハイルがなだめるようにローザの肩を叩たたく。

「言わせておけばいい。少し散歩をしよう」

「そうね……」

　ミハイルとローザは苗木のあいだを抜けて、小川の流れる野原へ歩いていく。

　レフやイリナたちは途方に暮れる。現場と上層部の意識が乖かい離りしているのは前々からだが、上層部の内側も意思の統一を欠いており、組織のまとまりが皆無だ。

　委員の査察を受けた技師たちは、どうなっているのだろうか。

　レフは率先して仲間を誘う。

「俺はロージナやロケットを確認してくる。みんなも行く？」

　イリナたちは頷うなずき、格納庫へ向かった。

一一月二日、打ち上げ予定日の前日。共和国の新聞紙『真実イースチナ』の一面に「宇宙結婚式」が大々的に掲載され、特集記事が組まれた。

ミハイルとローザの生い立ちや人物紹介、取材記事、レフたち同志とビリヤードに興じる姿や談話など事実をもとに書かれた記事のなかに、唐突に嘘うそが紛れ込む。非公開にしているロージナのデータだ。

《未来の乗り物・ロージナは重さ三〇トン。マイクロバスと同じサイズ。最大八名を宇宙旅行へ連れて行く》

実際は重さ六トンで三人乗りなので全然違う。

なぜこんな嘘を掲載したかと言えば、連合王国側がロージナを「ハイペリオンを遥かに凌りよう駕がした超大型船」と誤解しているという情報が手に入ったので、政府が新聞編集局に「ＡＮＳＡに精神的苦痛を与えろ」と指示を出したためだ。

真実のロージナは未完成──どころか、最終確認で新たな故障が発見され、突貫工事で装置を交換するという、異例の事態となった。

それでも打ち上げの準備は遅延なく進行し、ロケットは発射台に運ばれ、最終段階に突入する。

午後八時半、『ロージナI号』の打ち上げまで残り四時間。アルビナールの上空は黒雲に覆われ、基地の灯りが霧雨に滲にじむ。

身体検査を無事に通過したミハイルが搭乗者として確定。レフは発射場に向かうバスに彼と同乗して、ロケットの麓ふもとでII号グループと合流し、打ち上げを管制室で見る。

更衣室で宇宙服に着替えながら、ミハイルはレフに淡々とした口調で話しかける。

「君が宇宙飛行士になった日と、すべてが逆だな。あのときは穏やかな春の朝で、青空が広がっていた。そして俺は君を見送る側だった」

「あはは、そうだね」

レフは笑って返すが、胸には不吉な焦燥が渦巻いている。

ロージナはまともに宇宙を飛べるのだろうか。応急処置を施されたばかりの機体には、まだ見つかっていない欠陥がいくつも潜み、爪つめを研いでいる気がしてならない。

今からでも打ち上げ中止にする方法はないのか。

レフは考えるが、宇宙船はすでに発射台に設置されている。天変地異でも起きなければ、打ち上げは実行されるだろう。

運命の瞬間は刻一刻と近づき、バスの出発時刻となる。

「行こうか」

ミハイルに促され、レフは更衣室を出る。

階段を下りるミハイルの背中を見て、ふと、策が浮かんだ。

突き飛ばして、怪け我がをさせる。

だが、すぐに考え直す。そんな馬鹿げたやり方はない。

そもそも、ミハイルが搭乗不可能になれば、代替え要員バツクアツプの自分が搭乗者になる。訓練シミュレーターで完璧な操縦をしていた彼と違い、何度も失敗した。ビリヤードの結果を見ても精神力の違いは明らかだ。飛行中に緊急事態に陥り、手動操縦となったとき、危機を回避できる自信はない。誤操作で事故を引き起こし、命を落とす──

そのとき、レフの脳裏にひらめきが走る。

いやしかし、根拠が薄い危うい賭かけだ。

「レフ、どうした？」

階段を先に下りたミハイルが怪け訝げんな視線を送ってくる。

「更衣室にいるときから顔が怖いぞ」

「あ、ああ、緊張してるのかな……」

レフは言葉を濁すと、急いで階段を下りる。

まだ時間はある。もう少し考えてみよう。

──ミハイルに辞退してもらい、自分が搭乗者になるという案を。

もしそうなれば、今回の宇宙飛行は結婚式ではなくなる。『人間史上初の宇宙飛行士』の損失を恐れた委員会が打ち上げを延期にするかもしれない。

しかし、目もく論ろみが外れたらどうなる。

大々的に発表してしまった以上、結婚式以外は行われる。

あるいは、最悪の展開はこうだ。ローザの代わりにイリナが搭乗するように命令が下されて、『宇宙でレフとイリナの結婚式。そして帰還後に二組での合同披露宴』に計画そのものが変更される。

ふつうに考えればありえないが、ありえないことが起きるのがこの国だ。追い詰められたゲルギエフが何を考えているのか、レフには想像がつかない。本当にリュドミラは打ち上げに反対しているのか？　真の首謀者は彼女ではないのか？

思考回路がぐちゃぐちゃのままレフはバスに乗り込み、ロージナの待つ発射場へ向かう。

バスの席順は、前列にミハイル、その後ろにレフ。後方には公式カメラマンや医師たちが詰め込まれている。今回の飛行の危険性を知らない彼らは興奮しているのか、ざわざわと騒がしい。

硬い顔つきのヴィクトール中将はミハイルに指輪の小箱を渡す。

「大事なものだ。落とすなよ」

ミハイルは指輪を取り出して、皆が見えるように掲げる。

「もし地上に忘れていったら、一生尻に敷かれるでしょうね。彼女はああ見えて……おっと、ここまでにしましょう。誰かに盗聴されていたら大変だ」

くだらない冗談にヴィクトール中将の表情は少し和らぎ、車内は笑いに包まれるなか、レフだけが頬ほおを強こわ張ばらせている。

バスが発車すると、徐々に車内は緊張感に満ちていく。

手のひらに置いた指輪を静かに見つめていたミハイルは、拳こぶしを握りしめ、胸に強く押し当てる。その姿は戦場に向かう決死隊のような悲壮感に溢あふれていて、レフは焦燥に陥る。

発射場との中間あたりまで進んだところでバスは速度を落とし、停車する。トラブルが起きたわけではない。これもレフが作った慣例のひとつだ。

ミハイルは指輪をしまうと席を立つ。

「すみません、小便に行ってきます」

乗客から温かい笑いが起きる。動きにくい宇宙服で降車口を降りるミハイルを皆が拍手で送る。

冷たく湿った夜気が車内に侵食し、ミハイルは外の暗くら闇やみに飲み込まれていく。

刹せつ那な、レフは得体の知れない恐怖に襲われた。

いてもたってもいられず、席を立つ。

「俺も行く！」

車内は爆笑の渦となる。しかし今のレフは笑顔で対応している余裕はない。急ぎ足で降車してミハイルを追う。

霧雨が煙る闇やみ夜よを、車窓の明かりを頼りにバスの後部へ向かう。後部車輪の近くまで進んでいたミハイルに「待って」と声をかける。

ミハイルは振り返ると、不思議そうにレフを見つめる。

「君も小便か？」

「違う……その……」

飛び出してきただけで、考えがまとまっていない。

ミハイルは後部車輪の方へ歩き出す。

「儀式を早く済ませよう」

「―辞退してくれ」

　思いがレフの口をついて出た。

　ミハイルはとくに表情も変えず、レフに言う。

「俺は君よりも操縦の腕は上だ」

「頼む。辞退してくれ」

「俺が退しりぞけば君が飛ぶんだぞ」

「いや、俺なら今日は中止になるかもしれない。史上初の宇宙飛行士を失うのは大きな損失だとかいう、馬鹿げた話を君も聞いて―」

「中止にならない場合は？」

　レフの説得にミハイルが言葉を被かぶせる。

「中止というのは君の想像でしかない」

「そうかな。たぶん、中止になるんじゃないか……？　宇宙での結婚式もなくなるし……」

　弱々しく食い下がると、ミハイルは厳しい視線でレフを見据える。

「上からの命令で『レフとイリナの婚約発表』にされたらどうする？」

「っ!?　それは……なぜ……」

　さっき思ったことをなぜ知っているのか？

　レフが困惑していると、ミハイルはふっと表情を和らげる。

「じつはローザと散歩をしながら、君が乗ると言い出した場合について話し合った。案の定だ」

「そんな……」

「心配はいらない。俺は君の何倍も操縦は上う手まく、飛行経験も豊富だ。君なら墜落してしまう事態でも、俺なら回避できる」

すべて見透かされていて、何も返せない。

纏まとわりつく霧雨が頬ほおを濡ぬらし、冷たい雫しずくとなって滴る。

微笑を浮かべるミハイルはレフの両肩をがっしりと掴つかむ。

「リュドミラさんが言ったことを俺は否定しない。君の方が価値がある。それは事実だ。君は祖国の英雄ではなく、この惑星ほしが誇る英雄。だから、この国のために命を落としてはいけない」

熱を持った双そう眸ぼうがレフに生きろと訴えかける。

「そして、君はイリナの傍そばにいるべきだ。彼女は孤独だ。ひとりでは生きていけない。俺もローザも、そう思っている」

あの頃、まだ一七歳だったイリナの哀かなしげな姿が、レフの脳裏に蘇よみがえる。

──私と一緒にいるの、見られたくないでしょ。

──ごめんなさい、吸血鬼で……

高貴に振る舞っていた彼女は、レフとの離別を前に苦悩を吐露した。もし、また彼女が異種族の悲哀に打たれたとき、誰が手を差し伸べるのか。彼女を抱きしめたときの切ない感情がレフの胸を打つ。

「レフ。今回は立会人として、俺たちを見守ってくれ」

「……わかった。旅の無事を祈る。でも、ローザだって、ひとりでは不安だ。君は必ず、還ってこなきゃいけない。彼女とふたりで、必ず」

「わかった。約束しよう」

ミハイルはグッとレフを引き寄せ、ヘルメットをコツンとぶつける。

「それでは、君たちの結婚登録式は月面でやるか？」

「ははっ、叶うといいな」

　照れくさくて苦笑含みに答えると、ミハイルは強い眼まな差ざしをレフに向ける。

「違う。叶えるんだ。月へ行くと約束してくれるな？」

　レフは頬ほおを引き締め、真剣に返す。

「約束する。月へ行こう。俺も、君も、みんなで行くんだ」

「よし、それでこそレフ・レプスだ」

　わずかに瞳ひとみを潤ませたミハイルはくるりと背を向け、「叶えるための儀式をしよう」と後部車輪の奥へ回った。

　雨に濡ぬれた真夜中の発射場に着いたレフとミハイルは、待機していたイリナやローザたちと合流する。

　真っ先に目に飛び込んでくるのは、整備塔のライトに照らされて幻想的に輝く、全高四五メートルの三段式大型ロケット。第五二局長が開発したこのロケットは、『ミェチタ号』を打ち上げたものよりもひと回り大きく、近くで見る者を圧倒する。しかし、これで怯ひるんでいてはいけない。月面着陸用のロケット『C-I』は、全高一〇五メートルの五段式だ。そんな巨大な金属の塊が宙そらを飛ぶ姿をレフは想像できない。

　視線を地上に向けると、ひとかたまりになった中央委員会の者たちが傘の下に厳いかめしい顔を覗のぞかせている。作業着を着た技師や基地職員のなかにコローヴィンの姿はなく、やるせなさで心臓を締めつけられる。

　ミハイルが委員たちとの形式張った挨あい拶さつを終えると、ヴィクトール中将は大声で告げる。

「同志ミハイル・ヤシン少佐！　今回の宇宙飛行の目標は帰還とする！　万が一の場合は、自己判断で計画を変更しても良い！」

　ミハイルは胸を張って敬礼する。

「私は祖国の技術力を信じています！」

　帰還を推奨する指示は委員たちにも聞こえているはずだが、誰も非難しない。しかし、同意する者もいない。不気味なほど冷厳に、彼らは観察している。

　レフの隣にイリナがそっと寄ってきて、ぽつりとつぶやく。

「チーフって、ああいう人間たちを説き伏せていたのね」

「俺たちが何を言っても聞かなそうだろ……」

　ヒソヒソと話す姿が気に障さわったのか、厳めしい髭ひげを生やした委員代表に睨にらまれ、レフとイリナは口を閉じた。

　異様な雰囲気のなか、出発のときとなる。

　ここでも慣例に従った見送りが行われる。「さあ、座ろう！」というヴィクトール中将の号令で皆はしゃがみ、一秒後に立ち上がる。ただのゲン担ぎだが、不思議と心が落ち着く。

　決死の覚悟を身体からだから放ち、ロケットに向かうミハイルにローザは付き添う。ふたりは一緒に昇降機に乗り、最上段に着く。鉄製の足場に降りると、固く抱き合い、短い口づけをして、わずかな時間、情愛に溢あふれた眼まな差ざしで見つめ合う。

　そして、ミハイルは宇宙船に乗り込んだ。

　ロケットの打ち上げ後は、アルビナール宇宙基地から彼と直接通信を交わすことは不可能になる。今回からこの基地は打ち上げのみの担当になり、管制部は西に三〇〇〇キロメートルも離れた深しん宇う宙ちゆう通信施設『クレミヤ制御試験場』に配置された。レフたちは報告を受け取る形になるため、ただ宙そらを見上げ、帰還を祈るのみだ。

　ロケットの打ち上げから五四〇秒後──

『ロージナI号』は無事に地球周回軌道に入った。発射管制棟ブロツクハウスで見守っていたレフたちはひとまず胸を撫なで下ろす。このあとは明日にII号が打ち上げられるまで、単機で地球周回をつづける予定だ。

　しかし──

　それほど時間が経たないうちに、クレミヤ制御試験場から緊急報告が入った。

《──異常発生。二枚ある太陽電池パネルのうち、左が開かない》

問題点は改善されていなかった。一周目で早くも故障だ。

各種数値は今のところ正常だが、太陽電池が一枚しか機能しないということは、供給される電力も半分になり、姿勢制御や軌道変更ができなくなる。つまりランデヴーもドッキングも不可能。けれど、これで終わらせるわけにはいかない。管制部はミハイルに「太陽光が最大に当たるよう、手動で機体制御を試みよ」と指示を出した。

「彼ならきっと大丈夫」と気丈に振る舞うローザ。レフもイリナも、ミハイルを信じる。

その頃、国営通信ＴＡЦＣは「打ち上げ成功、飛行は正常」という虚偽の第一報を国内外に向けて発信した。

そして、三時間が経過する。

クレミヤ制御試験場から届いた声は、ひどく重苦しい。

《―故障が併発。機体は異常な回転……制御不能に陥っている》

不具合は太陽電池以外にも拡大。高周波通信にエラーが発生し、予備のアンテナも故障。ミハイルとの交信可能範囲が共和国領の上空のみに狭まった。

よろよろと座り込むローザにイリナが寄り添う。

レフはたまらずヴィクトール中将に申し出る。

「同志中将、計画の変更を相談しましょう！」

「ああ、これ以上の無理はさせられん！」

ふたりは管制部と話し合い、最初に、打ち上げの準備が進んでいるII号について、打ち上げ中止を求めようと決める。そして別室で待機する委員たちにその旨を伝えるも、委員代表は首を横に振る。

「II号は準備を継続。早くI号を立て直せ」

「I号に回復の兆きざしはありません。深刻な状態で、計画の続行は不可能です」

「計画は続行せよ」

　委員代表は「指導部の方針」と機械のように繰り返すだけで、頑として頷うなずかず、レフたちは部屋を追い出された。

「どうして上の連中はわからないんだ！」

　レフは苛いら立だちを隠さず吠える。委員代表は「II号の搭乗者は睡眠を確保せよ」と命じたが、ローザもセミョーンも「眠れるわけない！」と従う気はない。現場で働く職員たちも上に対する愚ぐ痴ちをこぼし、不愉快そうに珈コー琲ヒーをがぶがぶと飲んで夜間の任務を遂行する。

　霧雨は大粒の雨になり、夜明けには嵐となった。

　国営通信ＴＡЦＣは第二報として「ロージナI号は順調に航行中。II号は打ち上げ準備中」と再び世界を騙だます放送を流す。

　飛行を中止にしたいレフとヴィクトール中将は技師長を加え、委員たちと夜通しで侃かん侃かん諤がく諤がくの議論を交わす。それでも委員代表は折れず、計画の完遂にこだわる。

「II号の飛行目的を救助活動に変更して、I号の太陽電池パネルを船外活動で直せないのか？」

　それはあまりにも現場を無視した考えで、ヴィクトール中将は声を荒らげる。

「技術的に困難だ。天候も嵐では打ち上げの危険性が高すぎる。ロージナI号は予定の軌道をすでに外れている。回復は見込めん！　死亡事故を回避したければミハイルを帰還させるべきである！　II号の打ち上げ中止およびI号の帰還を求める！」

　しぶとくごねた委員代表もさすがに諦あきらめ、サングラードの官邸に電話をする。ゲルギエフの意向を伺うかがうのだ。

　しばらくして委員代表は答えを持ち帰った。

「II号の救助活動は中止。I号は飛行を完了し、帰還せよ」

　レフは食ってかかる。

「だから中止にしろと言っただろう！」

「レフ！」

　咄とつ嗟さにヴィクトール中将がレフの腕を掴つかんで止める。

「お前はクレミアの管制部に飛べ。お前が管制官を務めろ」

「俺がですか!?」

「代替え要員バツクアツプとして訓練を重ねたお前なら、ほかの誰よりも的確な判断を下せるはずだ！　私が話をつける！」

　鬼気迫る眼まな差ざしのヴィクトール中将は、レフの返事を待たずにクレミヤ制御試験場に連絡をして、迅速に許可を取った。

「いいか、レフ。このあと、ロージナI号は軌道周回の七周目から一三周目まで、九時間ものあいだ交信範囲外に出る。今すぐクレミヤに飛べば交信回復までにじゅうぶんに間に合う。交信の回復次第、即座に帰還作戦を開始する！」

「承知しました！」

　ローザが勢いよく立ち上がる。

「私も行きます！　II号が中止なら、ここにいなくてもいいですよね！」

　すると委員代表が強い語調で遮さえぎる。

「待て！　救助活動は中止となっただけで、今夜の打ち上げは中止になっていない」

「まだそんなことを言うんですか!?」

「中止だ！」

　ヴィクトール中将がテーブルに拳こぶしを叩たたきつける。

「中止に決まってるだろ！」

　しかし委員代表は鼻をしかめて吐き捨てる。

「私の一存では決められん。指導部の承諾が必要だ」

　レフが語気に怒りを込める。

「じゃあ今すぐ連絡してください！　早く！」

「検討する」

「本当に馬鹿ね！」

　イリナがいきなりローザの手を取った。そして大きく口を開くと、ローザの前腕に噛かみつき、牙きばを突き立てる。

「痛っ！」

　柔らかな肌が破れて血が噴き出す。

　室内が凍りつく。レフも動けず立ち尽くす。唖あ然ぜんとするローザの前腕からは血が滴り落ちる。

　イリナは血で汚れた口を拭ぬぐいもせず、紅玉ルビーのように赤く染まった瞳ひとみで委員代表を射抜く。

「ローザは血を流す怪け我がをした。これでは宇宙船に乗れないわ。だから、もしII号の打ち上げがある場合は、代替え要員バツクアツプの私が乗る。いいわね」

　ハッと目を見開くローザ。

　狼狽うろたえる委員代表に、イリナは切りつけるように鋭く言い放つ。

「いいかって訊きいてんのよ!?」

　詰め寄られた委員代表はたじろぎ、一歩下がる。

　ふんと鼻を鳴らしたイリナはくるりとローザに向き直る。

「早く行って！　それで、ミハイルと話してあげて。ローザの声は恐怖に打ち勝つ勇気を与えられる！」

そう言いながら、イリナはレフに視線を送る。

「だって、私がそうだったから」

──あなたの声が聞こえたの……

レフの脳裏を、雪原で凍えていた彼女の顔がよぎる。

──あなたの、イリナって呼ぶ声が……聞こえて……！

──パラシュート、ひとりで……ちゃんと降りれたから……！

「イリナ……！」

レフが名を呼ぶと、イリナは手の甲で血を拭ぬぐい、目を細める。

ヴィクトール中将があらためて命じる。

「レフ、ローザ、飛行場へ走れ！」

「はい！　行くぞローザ！」

風雨が吹き荒すさぶなか、同行する基地職員たちと中型軍用機に飛び乗り、三〇〇〇キロメートル西にあるクレミヤ制御試験場へ急ぐ。

ローザの前腕の傷は浅く、機内でレフが応急処置を施すとすぐに血は止まった。

「イリナ……あんな無茶しなくても……。委員の人に嫌われたでしょ」

「あいつは誰かに好かれる気なんてさらさらないよ」

常にヒヤヒヤさせてくれるが、誰にも媚こびない彼女の姿勢は見ていて気持ちがいい。その反面、ミハイルが「彼女は孤独だ」と指摘したように、少数の身近な人間にしか心を開いていない。

夕暮れ前、共和国連邦内の内海沿岸都市・クレミヤに飛行機は着陸する。太陽は燦さん々さんと照り、海はきらきらと輝く。アルビ

ナールとは時差が二時間あるので、今ごろあちらは夜が近づいているだろう。

　宇宙船の追跡や通信を担う巨大アンテナ群が立ち並ぶ区画を軍用車輌で走り抜け、レフとローザは制御試験場の管制室に駆け込む。一睡もしていない職員たちと簡単な挨あい拶さつを交わすと、さっそくミハイルとの交信準備をする。嵐の影響で飛行機がやや遅れたため、一三周目ではなく一五周目からの交信開始となる。

　ふたりが待機している裏では、各地で極秘裏に緊急時の体制が取られていた。

　各設計局や科学院の専門家が帰還案を急ピッチで練り上げる。それと同時に大きな問題も発覚した。太陽電池のトラブルのせいで、周回は一九周が限界。それ以上は電力が枯渇し、帰還不能となる。

　ヴィクトール中将と委員数名は着陸想定区域──アルビナールの北北西約八〇〇キロメートル地点に向かっている。

　皆が全力でミハイルを救おうとしている。

　そして──

「一五周目、交信回復します！」

　管制部員がレフにミハイルとの交信を促す。

　レフはできるだけ焦らず、落ち着いた声で呼びかける。

「こちら『夜明けザリヤー』。『牡羊座アヴエーン』聞こえるか？　管制官を交代した」

《──こちら『牡羊座』。聞こえている。『十五夜草アスタル』だな》

　ミハイルは平時と同じくらい冷静な声で、レフが昔使ったコールサインを言った。

「そうだ。『乙女座ヂエーヴア』も隣にいるぞ」

　レフはローザに交信を譲る。

「こちら『乙女座』。『十五夜草』の指示に従って」

《──了解》

　ミハイルの声は少し明るくなった気がした。

　さて、ここからが本番だ。

　地球へ正しい軌道で降下するには、正確な姿勢とタイミングで逆噴射を行い、減速しなければならない。

　専門家からは二種類の飛行計画が届いている。

　第一案は、粒子の検知器『イオンセンサー』を用いる穏当な方法。

　第二案は、シミュレーターで未経験の、高難易度の方法。

　当然、第一案を選ぶ。

　イオンセンサーが正常に動くかミハイルに確認すると、「問題ない」と返答がある。

「では、手動で姿勢制御を行い、一七周目で帰還する」

　そして一七周目、ミハイルは期待に応え、見事に手動で姿勢制御する。

「さすが……！」

　と安心したレフだが、なぜか逆噴射ができない。

「エンジンの故障か!?」

　原因を調査すると、イオンセンサーと逆噴射のシステムが干渉していることが発覚。これでは第一案は使えない。

《──『十五夜草』、別の方法はないのか》

「ある。ただ、これはかなり難しい……」

　説明をしようと書類を出したところで、管制部員が声を上げる。

「駄目です！　交信範囲を出ます！」

「っ！」

　第一案の検証に時間を使いすぎた。ロージナI号は一八周目に突入してしまう。

　全身の血が凍りつく。

　周回は一九周が限界。

　つまり、つぎの周回が最後だ。

　もし、それで失敗したら……。

「くそっ！」

　項うな垂だれたレフが拳こぶしでテーブルを叩たたくと、ローザがその拳に手を重ねる。

「悔やんでも時間は戻らない。だから、前を向いて」

　レフは顔を上げる。ローザの潤んだ瞳ひとみに胸を貫かれる。

「あなたは正確に指示を出せばいい。そうすれば、どんなに難しい方法でも、彼は絶対に成功させる」

「ああ、そうだよな。ミハイルならできる！」

　レフは気合いを入れ直し、管制部の面々に声をかける。

「俺たちで帰還させるんだ！」

「おう！」

　交信が回復するまで、レフは第二案の飛行指示書を読み込む。

　手動操縦があまりにも複雑で、自分ならばまず失敗する。

　だが、彼ならやり遂げる。

　彼は世界最高の宇宙飛行士なのだから。

「交信回復します！」

　管制部員の指示で管制室は息の詰まる緊張に包まれる。

　レフはミハイルに冷静に呼びかける。

「こちら『十五夜草アスタル』。一九周目が帰還する最後の機会だ。バッテリーが持たない」

　ミハイルは少しの乱れもない声で返す。

《──こちら『牡羊座アヴエーン』。了解している》

　指示書を握る手に汗が滲にじむ。

「この案は訓練でやっていない。きわめて複雑な方法だ。さらに、途中で交信可能範囲を出る。君の操縦技術にかかっている」

《──了解》

「最初に全体の流れを伝える」

　言い間違いのないように、レフはゆっくり、そしてはっきりと伝える。

「まず、宇宙船を手動で制御し、逆噴射の姿勢を取る。つぎは夜の範囲に入る前に、ＫＩ-三八ジャイロの安定化を有効にする。正常なジャイロにデータを転送。機体の姿勢を維持。……ここまではどうだ、『牡羊座』？　オーバー」

《──問題ない、オーバー》

「つづける。夜を出たら、手動で姿勢を逆噴射の位置へ修正。姿勢制御サブシステムを有効にする──そして逆噴射。メインエンジンの推定稼働時間は一五〇秒。一五〇秒後、インテグレーターが自動停止しない場合は、手動で停止。減速後、再突入の準備を」

《──了解。問題ない》

　自信に溢あふれた返事は、微み塵じんの不安も感じさせない。

「君を信じている」

帰還作戦が開始される。

レフが手順を伝えれば、ミハイルは難なく応える。

《──すべて順調。数値に異常なし》

やがて交信可能範囲を出て、連絡が取れなくなる。

宙そらを飛ぶミハイルを皆で祈る。

ローザは目を閉じて、胸の前で両手を組み合わせる。

油断してはいけないが、このままなら行ける。そんな思いが芽生える。

ただ待つことしかできない時間は、永遠にも一瞬にも感じた。

「交信回復します！」

交信可能範囲に入ったミハイルから通信が入る。

《──こちら『牡羊座アヴエーン』。すべて順調。逆噴射の準備に入る》

ミハイルの声はいっさい乱れていない。

欠陥だらけの新型宇宙船を見事に操り、作戦は継続される。

まったく、君は化け物だ。

レフは心のなかで賞賛する。

そして。

《──逆噴射成功。インテグレーター、アクティブ》

「よしっ！　停止を待ち、再突入の準備を！」

やり遂げた。

身体からだの奥からよろこびが込み上げる。満身創痍の新型宇宙船は、今、人間ミハイルの手で命を救われようとしている。

「ミハイル、降下だ！　深呼吸をしよう！」

　ローザに「名前」と脇腹を小突かれた。

「……あっ！　コールサイン……」

《──ふっ、こちら『牡羊座』。君が深呼吸しろ、オーバー》

　失笑まじりに返された。

「すまない。見事な操縦だった」

《──君のおかげだ。ありがとう》

　しばらくすると、ミハイルが乗っている帰還船が切り離され、降下が始まった。大気圏へ再突入するため、もうすぐ交信はブラックアウトする。

《──ひとつ『乙女座ヂエーヴア』に伝えたい。忙しくて食事をしていないんだ》

　ローザは目尻に涙を浮かべてミハイルに話しかける。

「こちら『乙女座ヂエーヴア』。何が食べたい？」

《──雛豆のブリュシチを頼む。帰ったら乾杯しよう》

「ええ、用意しておくわ……！」

　そして、ブラックアウトした。

　ここまで来れば、あとは着陸だけだ。無人機の試験では機体に穴が開いたが、対策が施され、耐熱試験もクリアしたと言っていた。もう大丈夫だろう。

　管制室の皆も安心したようで、ミハイルをたたえる拍手を送り、ローザに代わる代わる握手を求める。

　ローザは握手を返しながら唇をぎゅっと結び、涙が零こぼれるのを堪こらえている。

　奇跡が起きたことを実感し、レフは大きな安あん堵どの溜ため息いきを吐つく。

　このあとに向かう場所は、ヴィクトール中将から伝えられている。

　再突入が成功した場合は、着陸想定区域に行って先発隊と合流する。

　途中で失敗した場合は、サングラードに向かう。

　行く先は、着陸想定地点だ。

「ローザ、ミハイルを迎えに行こう！」

「ええ……！」

　微ほほ笑えんだローザの頬ほおをほろりと大粒の涙が伝った。

　レフとローザは管制部の皆に礼を言い、出発の準備をする。

　いつの間にか日付は変わり、一一月四日になっている。

　と、そこへ宙そらから交信音声が入る。

《―こちら『牡羊座アヴエーン』》

　ブラックアウトを脱したミハイルだ。

《―パラシュートがおかしい》

「何!?」

　管制部のよろこびは消し飛び、職員は慌てて席に駆け戻る。息を呑のむローザ。レフが交信に入る。

「こちら『十五夜草アスタル』！　どうした！」

《―パラシュートが……おい、これはどうなってるんだ!?》

　今までにない緊張を帯びた声。

　ガチャガチャと激しい操縦音が耳を刺す。

「落ち着け。慌てるな。状況を教えてくれ」

《──メインパラシュートが開かないぞ！》

「無人機試験では機能していたはずだ！」

《──開かないんだ！》

「予備のパラシュートは!?　予備を使え！」

《──使ったが駄目だ！　なぜだ!?》

「おい、ミハイル！」

《──開かない！　駄目だ！　機体の熱が上昇している！》

「どうなった！」

《──ローザに代わってくれ！》

　顔面蒼そう白はくのローザがレフから交信を奪う。

「ミハイル！　どうしたの！」

《──ローザ、もう//////////////》

　ブツリと途絶えた。

「ミハイル!?　応答して！」

　交信は回復せず、ローザの呼びかける声だけが響く。

「ねえミハイル！」

　ローザの悲痛な叫びがレフの胸を突く。

「返事をしてよ！」

　いくら待っても、ミハイルの応答はなかった。

『真実』紙　一九六六年二月五日　発行

二月三日の深夜。共和国連邦の英雄、同志ミハイル・ヤシンによって操縦される新型宇宙船『ロージナI号』が打ち上げられました。

一日以上つづいた宇宙飛行のあいだに科学の実験が行われただけでなく、革新的な技術を評価する試験を完了しました。

二月四日、天候の急変により、II号の打ち上げ中止が決定されました。それにより、I号は帰還を指示されました。

大気圏の再突入後、高度七〇〇〇メートルでパラシュートを開きましたが、網が絡まるという不運な事故により、宇宙船は墜落しました。

優秀な宇宙飛行士の早すぎる死は、私たちにとって大きな損失です。

偉大な宇宙飛行士を失い、私たちはとても悲しんでいます。彼の仲間から、日々のたゆまぬ努力、宇宙にかける情熱を聞いていました。彼は永遠に私たちの同志です。私たちは、彼の仲間に、そしてヤシナ夫人に、謹んで哀悼の意を表します。

アーナック連合王国　宇宙飛行士　四七名

ミハイル・ヤシン氏の死は、世界中すべての国にとっての悲劇です。傑出した開拓者は、科学の発展のために、そして人類の悲願のために、尊い命を落としました。アーナックの国民を代表し、彼の家族と、共和国連邦の国民の皆様に祈りを捧げます。

アーナック連合王国女王　サンダンシア・ソフィ・アリシア

第四章　史上初の悲劇

藍の瞳　Очи　индиго

「有人宇宙飛行で死亡事故が起きた」

この一報は世界を震しん撼かんさせ、各地からミハイルの死を悼むメッセージが寄せられた。

共和国民は目め眩まいを覚える衝撃を受けた。飛行の最中、国営通信ＴＡＵＣは「順調」と嘘うそを報じつづけていたが、事故発生の五時間後、唐突に死亡の速報が流された。「共和国の技術はすばらしく、事故など起き得ない」と半ば洗脳されていた国民は、脳天に鉄てつ槌ついを落とされ、長い夢からようやく醒さめた。

これまで共和国政府はありとあらゆる失敗を隠いん蔽ぺいしてきたが、大々的に宣伝をしていた今回ばかりは、死亡を隠しとおすのは不可能だった。

そこで政府の取った方策は、太陽電池の不具合や飛行中の格闘はすべて隠蔽し、死亡に直接つながった墜落の原因だけを公式発表とすることだった。

『―パラシュートがなぜ開かなかったのか調査した結果、システムの不具合ではなく、人為的ミスだったと判明した。無人機試験で熱により機体に穴が開いたことを反省し、耐熱コーティングを入念にしたところ、メインパラシュートの格納容器内で重合が起きて、射出を妨げた。予備のパラシュートは減速用のドラッグシュートと不運にも絡まり、機体から外れた。結果、帰還船は減速できず、時速一五〇キロメートルで地面に衝突。着地の衝撃を和らげるはずの逆噴射ロケットは爆発。過酸化水素容器が損傷し、火災が発生した』

しかし、重大事故に対する世間の目は厳しい。

秘密主義の隠蔽体質はもともと国内外で怪しまれており、よからぬ憶測や噂うわさが飛び交う。疑念は過去の実績にも波及し、レフたちの偉業を疑う者まで現れる。

中央委員会は騒動収束のため、レフに指示を出す。「今回の事故に関する記者会見を開く。そこで君が話し、疑惑を払拭せよ」と。

親友の死に心を痛めているレフだが上からの要請は断れず、事故から二日後、表に担ぎ出された。

城塞区画ネグリンの会見場で、各国の報道陣を相手に事情を説明する。

もちろん、嘘の説明だ。

「──今回の飛行はすべて予定どおり成功しました。再突入後にパラシュートの網が絡まり、宇宙船は地球に激突してしまった……本当に不幸な事故です」

曖あい昧まいな嘘の説明では、疑り深い者たちに「じつはパラシュート操作をミスしたのはミハイルだが、英雄を庇かばっているのでは？」と誤解されるかもしれない。

それは絶対に避けたいので、ミハイルの操縦技術を強調する。

「同志ミハイル・ヤシンは、ひとつもミスをせず、新型宇宙船を完璧に乗りこなしました。彼は優秀な宇宙飛行士で、すべての分野において、私たちのなかで一番でした」

披露宴で話す予定だった、彼を紹介する挨あい拶さつ文。こんな哀かなしい場で発表するために考えたのではない。

「パラシュートの事故は、誰にも防げない、不運と不幸が重なったものです」

言葉を慎重に選び、設計局の技術者を責めないように気をつける。人為的ミスだったのは確かだが、彼らに無理なスケジュールを押しつけ、宇宙基地での最終確認で打ち上げ許可を出したのは委員会だ。

そして、入院をつづけているコローヴィンの名誉も守らなければならない。もし彼が現場で指揮していれば、こんな事態にはならなかった。

「設計主任の開発する新型宇宙船『ロージナ』は間違いなく『未来の乗り物』です」

話せば話すほど、憤ふん懣まんやる方ない思いが込み上げる。

現場の者は誰も悪くない。祖国のために、必死でがんばったのだ。

事故の原因は競争による焦り、上層部が起こした人災だ。

じつは、パラシュートの不具合があったのはI号だけではない。事故後の検査で、II号にも同様の欠陥があったと発覚した。つまり、もしII号が打ち上げられていれば、無事に結婚式を終えたとしても、最後には両機とも墜落していた。

不幸中の幸いという言葉が、これほど似合わない例があるだろうか。

すべての元凶は最高指導者ゲルギエフ。彼の無謀な計画の被害者となったミハイルは、死後にふたつの最高勲章を与えられ、二階級特進で少将となった。故郷には大きな銅像が設置される。

そんなこと、ミハイルは望んでいない。

記者会見でぶちまけられたら、どれだけすっきりすることか！

しかし――

「……以上で、報告は終了します」

レフは事態を収拾するための模範解答だけを述べた。

つづいて記者の質問が始まる。ローザとの結婚や、宇宙での指輪交換については「新婦の精神状態を考慮して質問不可」とされている。質問を制限するのは政府のいつもの対応だが、実際にレフはローザが心配でならなかった。

事故直後から、彼女はサングラードに用意されたホテルの一室に閉じこもってしまった。イリナがつきっきりで様子を見ているが、「ご飯をまったく食べない」と嘆いている。

あの日、クレミヤ制御試験場でミハイルの交信が途絶えたあと、レフとローザはサングラードに飛び、墜落現場から搬送されてきたミハイルの遺体と対面した。

骨まで炭化し、頭や四肢がどこにあるかもわからない、黒い塊。ローザは声にならない悲鳴を上げ、卒倒した。

気持ちが落ち着くまでは彼女をそっとしておいてあげたいのだが、明日執り行われるミハイルの葬儀に、彼女は参列を要請されている。

気丈にも、彼女は「出席する」とイリナに伝えていた。

宙そらから零こぼれ落ちる涙が大地を濡ぬらし、道々には黒色の傘が咲く。

くすんだ灰色の雨雲に覆われたサングラードの城塞区画ネグリンでは、ミハイルの国葬が執り行われている。

供えられた花輪は二〇団体を超える。中央委員会、閣僚会議、空軍や宇宙飛行士一同、それぞれの立場は違えど、彼の死を悼んでいた。

大講堂の天井から垂れ下がる喪章の下、舞台に置かれた棺ひつぎは真紅の麝香撫子カーネーシヨンで美しく飾り付けられている。悲劇の国家英雄に別れを告げようとたくさんの人が詰めかけ、悲嘆に暮れるその様子を世界各国の報道陣がカメラに収める。

軍楽隊が葬送曲を奏でると、ミハイルの埋葬が始まる。

共和国連邦でもっとも格式の高い墓所──『大広場の城壁ネクロポリ』まで、棺を運ぶ長い行進がつづく。

礼装に身を包んだ軍人たちは花輪を担ぎ、レフとイリナは大きな

遺影を掲げ、ゆっくりと歩を進める。遺影のミハイルは静かな微ほほ笑えみを浮かべている。

ふたりの後方には、砲塔に棺を乗せた戦車がつづく。戦車を導くのはローザ。少し頬ほおがこけているが、瞳ひとみの輝きは失われず、きびきびと行進をする。その姿を見て、レフは安あん堵どした。

葬列はやがて、大勢の人々が待つ大広場に到着する。

花輪と遺影は城壁に立てかけて置き、棺は霊れい廟びようの前に降ろされる。

大広場に立つと、レフは複雑な郷愁に駆られる。

ミハイルと宇宙飛行士の座を争っていたとき、銅貨を空に投げ、宇宙への乗車賃を払い、リュドミラに宇宙飛行士の資質を測られた場所。

あれから五年半。

ふたりは宇宙へ行き、そして、ひとりは星になった。

レフは霊廟上部の演壇に目を移す。

かつて、レフが二〇万人を相手に演説したその場所には、国家上層部の者たちが並ぶ。中央に立つゲルギエフの表情に生気はない。蝋ろう人形のように硬直して、ただ棺を見下ろす。レフがいくら見据えても、彼の視界には入らない。

大臣たちの形式張った哀悼の言葉が終わった。

レフたちは棺ひつぎを担ぎ、花輪の並んだ城壁の墓所を進む。歴史に名を刻んだ偉人や英雄たちが眠る先、壁に打ちつけられた真新しい鉄板が見えてくる。

それは、ミハイルの名と生年月日が刻まれた鉄板。

別れのときだ。

棺を開けて、遺灰の入った壺を出す。

ひどく軽い。

レフとイリナは壺を大切に持ち、壁の内側に納める。ローザは寂しげな瞳ひとみで遺影を見つめていた。

大広場に集まった人々から葬送の喝かつ采さいが鳴り響く。

納骨は終わり、レフとイリナはローザの横に立つ。

ローザは微かに唇を震わせると、懐から結婚指輪を取り出す。そして、しっかりとした足取りでミハイルの遺影に歩み寄る。

周囲の者たちは最敬礼をする。

ローザはミハイルの遺影の前に指輪を置くと、遺影に優しく口づけをした。

宙そらから降り注ぐ冷たい雨が彼女を濡ぬらす。

後ろ髪の先から雫しずくが二滴、三滴と落ち、長い口づけが終わると、身体からだを離し、しばらく見つめ合う。やがて、彼女の瞳から涙がとめどなく溢あふれ出し、膝ひざから崩れ落ちた。濁った水たまりに手のひらと膝を突き、身体を震わせる。食いしばった歯のあいだから嗚お咽えつが漏れる。涙がぼたぼたと手の甲に落ちる。

イリナが駆け寄り、立ち上がれない彼女の背中をさする。イリナの目は真っ赤に充血している。

レフは重い罪の意識に苛さいなまれる。強引にでもミハイルを辞退させるべきだった。彼は死なずにすんだ。自分が犠牲になっただろうか。ならなかったかもしれない。

ただ、ひとつ確実なことは。

ミハイルを宇宙船に乗せた時点で、死ぬと決まっていた。

なぜだ。

完璧な操縦をしたミハイルが、なぜ死ななければならないんだ。

俺たちの奮闘は何だったんだ……！

なぜ乗せてしまった！

悲しみとも怒りともつかぬ激情を噛かみ殺すと、レフは自分でもわからないうちに、大粒の涙をこぼしていた。

濡れそぼったローザはイリナにしがみつき、とぎれとぎれに慟どう哭こくする。

彼女にひどい仕打ちをした奴らはどこにいる。レフは拳こぶしを強く握りしめ、憎むべき連中を探す。

霊れい廟びようの上で傘を差して見下ろすゲルギエフと取り巻きの幹部、リュドミラ。冷血機械の如ごとき〔運送屋〕の顔。誰もが涙ひとつ見せない。

すぐそこに見えているのに、銃と権力で支配する者たちとのあいだには、絶望的な距離がある。レフは足が動かず、声も出ず、血が出るほどに唇を噛かみしめる。

宙そらから落ちてくる深く激しい悼みが、宇宙飛行士たちを冷たく包んだ。

国葬を終えたレフたちは『ライカ44』に戻ると、共和国の伝統に従って追善供養を開く。この儀式は故人を偲しのぶ会の役割を果たすのだが、閉鎖都市の『ライカ44』には部外者を入れられないため、ミハイルの故郷とは別々に、二箇所で供養することになった。

宇宙市民住宅の交流ホールを会場にして、宇宙開発の関係者を招待する。ローザは精神面の疲ひ弊へいが著しくて出席できる状態ではなく、イリナに付き添われて自宅で休んでいる。

レフとセミョーンが入り口に立ち、訓練センターの女性職員が弔問客に飾りパンカラヴアイを配る。ナタリアの後輩の〔運送屋〕もやって来た。ロージナの報告書の一件で「ミハイルさんを見殺しにしてしまった」とひどく後悔しているようだ。彼女はいっさい悪くないのだが、尊敬していた宇宙飛行士の事故に心を痛めている。人間ひとりの死で動揺していては〔運送屋〕は務まらないが、レフとしては、血と涙のある彼女を同志だと思った。

追善にはミハイルの席も用意される。

蒸留酒をグラスいっぱいに注ぎ、蓋ふたの代わりにひと切れの黒麦パンを置いて、その上にひとつまみの塩を盛る。これを遺影の隣に置き、死から四〇日目までそのままにしておく。四〇日目は故人が死者の世界へ旅立つ日で、その日には再び皆で集まり、最後のお別れをする。

弔問客が集まると、目の落ち窪んだヴィクトール中将が短い乾杯の音頭をとる。

「魂の安息のために」

ミハイルの席に向けてグラスを掲げ、蒸留酒を飲み干す。そのあと、干し葡萄入りの粥クチヤー、薄いパン生地、澱粉入りの果実飲料を口にして、思い出話に花を咲かせる。

飛行士たちは一期生も二期生も派手に飲む。皆が悲しみと恐怖を追い出そうとしているようだ。レフも彼らと一緒にひたすら飲む。

ミハイルの席には、本人の代わりに遺書がある。公にされるものではない遺書を、ローザは追善供養の場に置いてほしいと願った。

遺書には力強く丁寧な文字で、ローザへの愛、仲間への感謝、そして死への覚悟が記されている。

『遅かれ早かれ、死は万人平等にいつかは訪れるもの。私は死を恐れてはいません。母なる大地に生まれ、大地の恵みで育った私の死は、祖国の宇宙征服に役立つでしょう』

検閲を意識したであろう文章は、どこまで本音かはわからない。

しかし。

『宇宙飛行士の自分にしかできないことを、最期まで完遂できたならば本望です』

　最後の一行を読んだとき、ミハイルにかけられた言葉が脳裏に蘇よみがえった。

　──君は祖国の英雄ではなく、この惑星ほしが誇る英雄。だから、この国のために命を落としてはいけない。

　コローヴィンにも同じようなことを言われた。宇宙飛行士は武器だ、戦え、飛びつづけろと檄げきを飛ばされた。

　しかし、レフは自分を優れた人間に思えなかった。最高の宇宙飛行士と天才科学者の期待に応えられるほどの人間ではない。

　親友の死とコローヴィンの不在が大きな哀かなしみとなり、レフの心にぽっかりと穴を開けた。

　追善供養の夜、レフは寝つけず、蒸留酒の入ったグラスを持って宇宙市民住宅の屋上に出た。

　冷たい風が首筋をとおり抜ける。もうすぐ霜の精マロースが北から訪れ、息も凍りつく季節になる。

　レフは鉄てつ柵さくに肘ひじを置き、グラスを傾ける。

　灯りの消えた街には静けさが広がり、木々の葉音だけがさわさわと聞こえる。

　ミハイルの事故以来、宇宙開発は停止している。新型宇宙船は多くの問題を抱え、検証にも膨大な時間がかかるため、計画再開の目め処どは立っていない。

　宙そらを見ると、暗あん碧ぺきの果てに、孤月が白い光を放っている。

　月は遥か彼方かなた。

　今はただ、見上げることしかできない。

「──あっ、いた！」

　後ろから声をかけられて振り向くと、軍服の上着を羽織ったイリナがやってくる。

「ここにいると思った。部屋にいなかったから」

「何か用だったか？」

「報告。ローザは寝たよ。お粥も食べてくれたし、追善が済んで、ちょっと落ち着いたのかも」

「それは良かった……。彼女と一緒にいてくれてありがとう。つきっきりは大変だろ」

「大丈夫。私にはそれぐらいしかできないし」

　イリナはレフの隣に来て、柵にもたれかかる。

「お月様、綺き麗れいだね」

「ああ……でもそのぶん、地上が汚れて見える」

　蒸留酒に月が映り込み、ゆらゆらと揺れる。

「いったい何のために月を目指すのか、わからなくなる。競い合って傷つく人が出るくらいなら、くだらない競争からは降りた方がいいのかもしれない。嘘うそばかりで勝ち目のない、祖国のための戦いなんて……」

　つい、苦しさを吐露してしまった。イリナは心配そうに目を瞬かせる。

「レフ……」

「きっと、俺たちの……いや、人類の夢は、連合王国の同志が、成し遂げてくれるから」

　夜空の向こうにいるバートやカイエ、そしてアーロン飛行士を思い出す。

　共和国に悲劇が起きても、連合王国の有人宇宙飛行計画が延期したり変更されたりする気配はない。

　このまま連合王国は潤沢な予算を使って順調に計画を進め、近い将来、月面に国旗を突き立てるだろう。

　そう思っているのはレフだけではない。開発現場の誰もが感じていた。共和国政府はあれこれ理由をつけて宇宙開発を遅延させ、なし崩し的に宇宙政策を終了させるのではないかと。

間奏　интерлюдия

一九六六年一二月一日。開発停止中の共和国を横目に、連合王国でハイペリオン計画における最初の有人軌道飛行が実施される。

開発中の月着陸船こそ搭載されていないが、司令・機械船ＣＳＭで構成された新型宇宙船『ハイペリオンII号』と、新型宇宙船と新大型ロケット『クロノスV』の初公開、そしてミハイルの事故からわずか一か月後と、打ち上げの中継はいつも以上に注目を集める。

果たして、全高一一〇メートルという恐ろしく巨大なクロノスVは轟ごう音おんを響かせて宙そらへと飛翔し、三名の宇宙飛行士を乗せたハイペリオンII号は地球軌道を順調に航行する。

このまま帰還すれば、宇宙開発競争の勝者は決定づけられたも同然。

ところが──

軌道上でトラブルが発生していた。

機体に揺れが生じた当初、飛行士たちは微少天体が衝突したものと思い、まったく気にしていなかった。しかし、衝突などではなく、機械船内部で小爆発が起きており、壁や機器が損傷していた。

管制室が気づいたときには緊急事態となっていた。

酸素は減少し、修理不能に陥る致命的な状況。虚空を飛ぶ宇宙飛行士三名は避難する場所がない。強引に帰還を試みるも失敗し、軌道から外れ、新型宇宙船は金属の棺ひつぎとなり、銀河の果てへ飛ばされた。

宇宙空間で三名が死亡し、遺体すら回収できないという『史上初の悲劇』は、凄すさまじい衝撃を世界中に与えた。

ＡＮＳＡの幹部たちは会見で陳謝し、サンダンシア女王は涙をこぼしながら弔意を表した。この事故に対し、共和国の政府は遺族に

あてて弔電を送り、レフが宇宙飛行士を代表して手紙を送った。

大々的な葬儀が終わると、総括と責任追及が始まる。

新型ロケットのクロノスVは打ち上げ成功という成果を残したが、二回連続で重大事故を起こしたハイペリオン宇宙船は非難の的となる。

前回の火災事故はＡＮＳＡ主導の内部調査だったが、今回は政府主導になり、各界の権威を集めた外部委員会が設置され、調査結果が出るまでＡＮＳＡは活動停止という厳しい処分を下された。

調査は長期化が予想される。銀河の彼方かなたへ消えた宇宙船は回収できないので、実機の検証が不可能なのだ。機械設計やシステムを洗い直し、開発を請け負う航空機メーカーの下請け企業にも調査の範囲を広げ、部品保守記録を追い、コンピューターでシミュレーションを行う。

共和国に追いついたはずが、一転、窮地に陥るＡＮＳＡ。

宇宙開発に反対する国民は厳しく糾弾する。

巨額の予算は前々から非難対象だったが、調査にも莫大な費用が必要だとわかると、ハイペリオン計画の中止を訴える大規模なデモが行われる。

『予算を増やすなんてとんでもない！』『政府は金の使い方を考えた方がいい』『人間を宇宙に飛ばして何の意味がある？』

国家批判をすると逮捕される共和国民と違い、連合王国民は日頃の鬱うつ憤ぷんを晴らすかの如ごとく、遠慮なく政府を攻撃する。ニュース番組が「ハイペリオン計画をやらなければできた一〇〇のこと」という特集をして批判を煽あおる。

三流紙『アーナックニューズ』は稼ぎ時だと判断し、ここぞとばかりに真偽不明のスクープを連発する。《共和国の諜ちよう報ほう員が爆薬を仕掛けた!?》《クラウス博士は戦犯である！》《事故と同時刻にＵＦＯが飛んでいた！》。

さらに、こんな意見が世間に受け入れられ始めた。

「共和国の宇宙開発も止まっている。月への競争はここで手打ちにして、両国あわせて有人宇宙飛行計画を終了すればいい」

第五章　遺された想い

藍の瞳　Очи　индиго

霜の精マロースが降りてきて、大地に真っ白な絨じゆう毯たんを敷く。『ライカ44』も雪と氷に閉ざされ、長く厳しい冬が始まる。

一面の雪景色が夕暮れの茜色に染まっていく姿を、レフは自宅の窓から眺めている。ぬるくなった檸檬レモン珈コー琲ヒーをひとくち啜すすり、ベッドに身体からだを投げ出す。

連合王国の死亡事故から一〇日が経過した。原因の調査は継続中で、連合王国の各地でデモ隊が騒いでいる。今回の事故にコンピューターが関わっているのか、レフにはわからないが、バートとカイエが落ち込んでいないか心配だった。しかし、連絡も取れないし、激励の言葉も見つからない。

この先、どうなるのだろうか。

今までの共和国政府ならば「逆転の好機」だと仕掛けるところだが、上からの指示はない。指示を出したくても、敵国を攻撃する弾がないのだろう。

ミハイルの死から一か月。共和国の宇宙開発計画も停止したままだ。

両国間の競争が休戦状態になったことは、レフの日常にも影響を及ぼしている。

訓練センターは事実上の閉鎖中で、親善大使の予定もない。もうひとつの役職である最高会議の委員だが、サングラードで会議はしているのに、レフは相変わらず蚊か帳やの外だ。噂うわさで、各宇宙開発都市の今後について話し合われていると聞いた。

宇宙開発とともに発展してきた『ライカ44』は、すっかり活気がなくなってしまった。住人のあいだで、「〔閉鎖行政領域体〕のこの街は、閉鎖されて雪に埋もれ、最初からなかったことになる」と

いう、笑えない自虐が流は行やる始末だ。

　時間があるので、一度くらいはコローヴィンの見舞いに行きたいところだけれども、宇宙飛行士が何度も無名のスミノフ教授を伺うかがっては疑われてしまうので控えている。同じ市内に住んでいる妻と娘が看病しているようなので身の回りの世話については問題はないだろうし、もし体調に変化があれば、いくら彼自身が国家機密とはいえ、訓練センターに連絡は来るだろう。

　しかし、なぜ政府は共同開発を受け入れなかったのか？

　競争で焦らなければ、コローヴィンは無理をせずにじっくり開発できて、両国の悲惨な事故も起きなかったのではないか？

「もう遅いけど……」

　不幸つづきで気持ちが沈み、たらればばかり考えてしまう。寂しい冬の訪れも相まって、レフ自身が雪と氷に埋もれている。今日も航空力学の専門書を開いたはいいが、内容が頭に全然入ってこなくて、珈コー琲ヒーを啜すすっているだけだ。

　また、明日ひとつ大事な予定があり、それをどうするかも悩みのタネになっていた。

　明日は一二月一二日──イリナが宇宙を飛んだ日。

　記念すべき日なのだが、共和国的には非公式の宇宙飛行なので、祝賀会も何もない。その一方で、四月一二日──レフが宇宙を飛んだ日は『宇宙飛行士の日』として国家の祝日になっており、毎年たくさんの贈り物が世界中から届く。イリナ自身は「共和国に祝われたくないし、どうでもいい」と冷めていたが、レフは自分だけが祝福されるのは気持ち悪いので、毎年個人的に彼女を祝っていた。

　大それたことをするわけではない。

　イリナは良い香りが好きなので、花や香水などを贈り、それに加えて、ひとつだけ願いを叶えていた。

　彼女の願いは些さ細さいなものばかりで、たとえば去年は映画代金をおごり、一緒に観た。『機知に富んだ男』が主役のドタバタコメディで、共和国民七〇〇〇万人が笑ったヒット作だ。

映画を観終わったあとイリナは「人間って愚かね」と呆あきれてあくびをした。そう言いつつ、じつは鑑賞中はずっとケラケラ笑っていて、バナナの皮で滑るシーンで涙を流すほど大笑いしたことにレフは気づいていたが、彼女の名誉を傷つけないために、言わないでおいてやった。

しかし、今年は記念日を祝っていいのかわからない。

ミハイルの死亡から区切りの四〇日間を経過しておらず、ずっとローザの世話をしていたイリナにとって、宇宙飛行のことを祝われるのはうれしくないのではないか。とはいえ、ローザは笑顔こそ少ないが食料品を買いに出かける程度には回復したし、あまりに気を使うのも逆によくないとも思うが。

ぐだぐだしているうちに宵よい闇やみが訪れる。夕飯を食べながら考えようと身体からだを起こしたとき、部屋のチャイムが鳴った。

ドアを開けると、イリナがいる。買い物帰りなのか、髪や服に細かい雪を付けて、紙袋を持っている。

「どうした……？」

首をかしげるレフに、イリナは紙袋を突き出す。

「人間は寒いのが苦手だろうと思って、買ってきてあげたの」

紙袋には魚の缶詰がいくつか入っている。

「あ、ありがとう……」

感謝よりも戸と惑まどいが先にくる。こんなふうに食べ物を持ってきてくれたのは、半月ぶりだ。

ミハイルの葬儀のあと、レフは凄すさまじい喪失感と自責の念に囚とらわれ、家に閉じこもってしまった。そのとき、イリナが食料品や酒類をたまに差し入れてくれた。「ローザの買い物をしたついで」と言っていたが、レフはとてもうれしくて、ありがたくて、彼女のおかげで心が癒いえた気がしている。

しかし、どうしてまた買ってきてくれたのだろう。そんなに具合が悪そうに見えたのか。

　イリナは何か言いたげな目をして、服に付着した雪を払っている。

　なんだろうと考えたレフは、ハッと気づく。

「お金！　待ってて」

　取りに行こうと玄関を離れると──

「違う」

　冷たく寂しげにイリナは口を開き、レフを追って一歩部屋に入ってきた。後ろでドアが音を立てて閉まると、彼女は言葉をつづける。

「忘れてないわよね？　毎年、あなたから訊きいてくれるのに」

　記念日のことだ。

「もちろん、覚えてるよ。ただ、今年はどうしようか迷ってたところでさ……」

「そうだろうと思った……」

　イリナは少し目を伏せ、はにかみとためらいが入り交じったような声で言う。

「今年のお願い。訓練機で一緒に夜空を飛んで。操縦士はあなた」

「えっと……急だな。でも、どうして」

「飛びたいから連れてって」

「答えになってないし……」

　するとイリナは顔を上げ、レフをキッと見つめる。

「チーフも『飛びつづけろ』って言ってたでしょ」

「それは意味が違うんじゃないかな」

　ずいっとイリナはレフに一歩近づく。

「ごちゃごちゃうるさい。夜の景色を眺めたいの。ねえ、私の願いは叶うの叶わないの？　どっち？」

「叶えてあげたいけど、訓練は停止中だし……」

「訓練センターの副長官で最高会議の委員のあなたなら、訓練機一機くらい、権限でどうとでもできるでしょ」

「……そこまでして、飛びたいのか……？」

　イリナは深く頷うなずく。真紅の瞳ひとみから、絶対に乗りたいという強い意志を感じる。

　ここまで執しつ拗ように願う彼女は初めてだ。言いたくない理由があるのかもしれない。

　レフは一年以上も訓練機には乗っておらず、雪の降る夜間ともなると操縦にやや不安があったが、遊覧飛行程度なら問題はないだろう。

「わかった。整備員に頼んでみる」

「うん。それじゃ今から行きましょう。準備してくる。ちょっと待っててね！」

　表情をゆるめたイリナは声を弾ませて、足取りも軽くレフの部屋を出て行った。

　粉雪がちらちらと舞う平原を四輪駆動の軍用車で走り、レフとイリナは『ライカ44』から一〇キロ離れた軍用飛行場に午後九時に到着した。

　飛行場の整備員にレフが「夜間臨時訓練をする」と言って一機出すように頼むと、当然訝いぶかしがられた。申し訳ないと思いつつ、上級職の肩書きと軍服にずらりと並ぶ勲章を突きつけて「極秘だ」と交渉すると、整備員は許可を出さざるを得ない。

　強引に獲得した複座式の訓練機に向かいながら、レフはイリナに小声で告げる。

「今日は特別だからな……」

「わかってるわよ」

　最初はあまり乗り気ではなかったレフだが、あたりに漂っているジェット燃料の匂においを嗅かいだ途端、沈んでいた気持ちが不思議と高揚してくる。

　操縦席にレフが、後部座席にイリナが乗る。滑走路にゆっくりと向かうなか、エンジン音と振動を全身で受けていると、凝り固まっていた胸中のもやもやが、徐々にほぐされていく。

「イリナ、準備はいいか？」

　酸素マスクを装着し、通信機越しに確認すると、「どうぞ」とあっさりした声を返された。彼女と出会って二週間くらいのときだったか、初めて訓練機に乗せたときは目も開けられないほど怯おびえていたのに、ずいぶん成長したものだ。

「さあ、行くぞ！」

　エンジンを噴射、車輪と地面がこすれる摩擦、振動を浴びて、スロットルを全開──操そう縦じゆう桿かんを手前に引く。

　ふわっと機体が浮き上がる。重力に抗あらがい、粉雪が舞う夜空へと飛び立つ。

「どこを飛べばいいんだ？」

「あなたに任せるわ」

　とりあえず夜空が飛べたらいいという感じなので、レフはあまり遠くへ行かず、飛行場の上空を周遊する。

　すると座席の背面をイリナにコツンと蹴けられた。

「もっと高く」

「どのくらい？」

「高く！　雲の上まで！」

「了解！」

操縦桿を引いて機首を上向かせ、推力増強装置オーグメンターを使う。排気口から炎が噴き、強烈な加速とともに天へ上昇する。地球が引き止めんとする力を強引に振り切り、大地を覆う黒雲を貫く。

そこは月と星が煌きらめく別世界だ。

速度を落として水平飛行に戻すと、身体からだがふわりと軽くなる。

「ついたぞ」

「好きに飛んで」

言われるがまま、目的地は決めずに遊覧飛行をする。

地上に粉雪を降らせていた雲は眼下を流れ、視界を邪魔するものは何もない。

どこまでも自由に飛べる大空が広がっている。

見上げれば無窮の宙そら。風を切って飛ぶのは爽そう快かいで、身も心も解き放たれる。

──この感覚は久しぶりだった。

身や心に絡みついていた鎖は外れ、しがらみは中空に溶け落ちる。

銀色の大きな月に呼ばれるように引き寄せられる。

冷たく凍りついていた魂がびりびりと震える。

「──レフ、どう？」

夢中になって飛んでいると、通信機からイリナの声が聞こえた。

「どうって」

「空を飛んで、どうかしら」

「君が飛びたいって言ったんだろ」

「そうよ──あなたのためにね」

「俺のため……？」

　レフがバックミラーに映るイリナに目を向けると、深こき緋ひを帯びた瞳ひとみに見つめ返される。

「思い出してほしかったの。空を飛ぶのが大好きで、宇宙を目指していたあなたを」

　ようやく彼女の想いがわかって、胸がギュッと締まる。

　通信機からは彼女の淡々としゃべる声が聞こえてくる。

「出会った頃のこと、覚えてるかしら。高所恐怖症で腰を抜かしてた私を、あなたは強引に空に連れてきた。そしたら私はすぐに平気になった。まるで月に魔法をかけられたみたいに……」

　イリナは首飾りを取り出して、月の石を天にかざす。清らかな月光を浴びた結晶に穢けがれなき青い光が宿る。

「『月へ持っていくのは君だから』。あなたの言葉で、私は今も生きてる」

　イリナの瞳に星々が映り込み、潤んでいるように瞬く。

「私は死んでもいいと思って宇宙を目指した。でも、あなたと出会って生きようと思った。大嫌いだった人間のなかにも好きな人たちができた。この国にも、それから連合王国にも。それで、私の夢は少しだけ変わった。私はレフと月へ行きたい。そこに、みんなもいてほしいの。チーフも。それにミハイルも……いてほしかった」

「俺も、もちろんそう思ってる……」

　ミハイルが最後に通信を送ってきたときは、おそらく今飛行している高さくらいだ。あまり想像したくはないが、つい帰還船内の状況を思い浮かべてしまう。

　どれだけ悔しかっただろうか。

　しばらくふたりとも沈黙し、飛行機の飛行音だけが響いていた。

「……ねえ、レフ」

　囁ささやくように呼びかけられた。

「どうした？」

「……ミハイルが、私を『偉大な飛行士』って言ったとき、冗談っぽく耳打ちしてきたの……」

　イリナは恥ずかしげに目を伏せる。

「……私とレフが結婚するなら、そのときはローザと立会人をやってやる……って」

「そんなこと、言ってたのか……？」

　彼と過ごした日々を思い出し、苦しくなる。

　絶対、もう叶わない。

　バックミラーに映るイリナは、今にも泣きそうに眉まゆを下げる。

「倒れなくていい人が倒れて、死ななくていい人が死ぬ。その結果、宇宙開発は終わって、月には行けないかもしれない。そんなの、私は認めない」

　もちろんレフも認めたくないが、個人で解決できるものではない。

「もしチーフが倒れてなければ、状況は違っただろうな……。もし、なんて言っては駄目だとわかってるけど……」

　レフがコローヴィンと最後に話したのは、無人月探査機『ディアナVII号』の月面軟着陸が成功した直後だ。あのときはまさか、闘病の末に手術が失敗して眠ったままになってしまうとは夢にも思わなかった。

　もし彼がこの危機的状況に目覚めたら、誰も思いつかないような案で宇宙開発を救ってくれるだろうか。

　そんなことは妄想にすぎないとわかっているが。

「ん……？」

　妄想？

　引っかかりを覚えて、記憶の糸を手繰り寄せる。

　あのとき、何か──

「ああっ！」

　レフは大声で叫んだ。

「いっ！」マイク越しにイリナの短い悲鳴が聞こえた。

「叫ばないでよっ！　鼓膜が破れるわ！」

「ごめん！　なあ、チーフが病室で俺たちに見せた雑記帳を覚えてるか？　『月へ行くための斬新な案』」

　すぐにイリナは気づいたようでアッと口を開く。

「闘病記!?」

「そう。敵に見つかるとよくないと言って、枕の下に隠していたあれ……どうなったか知ってる？」

「副長官のあなたが知らないのに、私が知ってるわけないでしょ」

　もっともだ。もし内容が公開されていれば──または敵に極秘裏に焼却されていなければ──誰かが、何らかの反応を示しているはず。

　しかし、誰からも話は出ていない。政府の意向に流されるまま、ロージナの事故に至ってしまった。

　あの雑記帳は、今、どこにある？

　コローヴィンに見せてもらってから一年以上経っているし、意識を失って以降、病室には清掃員も入っているはずだ。

　レフが悩んでいると、コツンと椅い子すの背面をイリナが小突いた。

「あれこれ考えていてもしょうがないわ。直接確認しない？」

「そうだな。……ただ、チーフが偽名を使ってる点が厄介だ」

　病院に電話で尋ねても、電話口ではレフ本人だと確認できないため、スミノフ教授についての嘘うそを返されるのが容易に予想できる。

　正式な手続きを踏むしかないだろう。

「イリナ、サングラードまで行こう」

　もし病院に雑記帳がなかったとしても、コローヴィンの自宅が同市内にある。彼の妻と娘が持ち帰って保管しているかもしれない。レフとイリナは何度かコローヴィン本人に連れられて自宅に招かれ、皆で一緒に食事や歓談もしたので、家族から信用されているだろう。

　幸いにして、宇宙開発が停止しているおかげで自由時間はある。明後日開かれるミハイルの四〇日忌に間に合うように戻れば大丈夫だ。

　早朝に『ライカ44』を発つと、昼過ぎにはサングラードの病院に着く。ヴィクトール中将に事情を話して、面会の手続きを取ってもらった。

　レフとイリナは見舞いの花を手に、急ぎ足でスミノフ教授ことコローヴィンの病室へ向かう。

　病室の前には体格の良い若い男が立っている。警護役の〔運送屋〕だ。これではスミノフ教授が要人だと明かしているようなものだが、危険を冒してまで教授を詮せん索さくする一般市民もいない

だろう。

〔運送屋〕にはレフたちが見舞いに来ると伝わっており、鋭い視線で見送られながら病室へ入る。

寝台に横たわって目を閉じているコローヴィンはかなり痩やせて、老けている。年初に手術が失敗して一二か月が経つ。意識障害が一年以上つづいた場合、回復の見込みは薄いとされている。穏やかな寝顔は今にも起きて話し出しそうにも見えるが、ずっとこのまま眠っているようにも見え、胸がチクチク痛む。

悲しんでいてはいけない。目的を果たさねばと、レフは病室を見回す。

しかし、本や書類は一冊もない。目当ての雑記帳は、以前は枕の下に隠していたが、シーツを交換するときに見つかっているだろう。片付けられたか、あるいは捨てられてしまったか。別の場所をあたるしかないようだ。

見舞いの花を窓際に置くと、レフとイリナはコローヴィンの傍そばに跪ひざまずく。枕元に、お守りとして渡した革袋がぶら下げてある。

イリナがぽつりとこぼす。

「効果がなかったかな……」

寂しげに丸まった彼女の背に、レフは軽く手を置く。

「お守りがあったから、今も生きていられるんだよ」

「うん、そうよね……」

イリナはコローヴィンの額に優しく手を置いて、「早く起きなさいよ」と慈愛に満ちた声をかける。

厚みがなくなり衰えてしまった技術者の手を、レフは両手でそっと包むように握る。

「ミハイルの事故……申し訳ありません」

本当は雑記帳を探しに来た旨を伝えたいのだが、〔運送屋〕が盗

聴器を仕掛けている可能性もあるため、口には出さずに手を強く握る。

　勝手な行為だとわかっていますが、探す許可をください。

　まだ、諦あきらめたくはないんです。

　レフが想いを込めても、コローヴィンはただ、静かに眠っている。

　募る寂しさを心に封じ、レフは立ち上がる。

「さて……とりあえず、警護の彼に訊きいてみようか」

「そうね……」

　ふたりはコローヴィンに「また来ます」と別れを告げ、病室を出る。

　警護の男はスミノフ教授の正体を知らないかもしれないので、レフは大雑把に訊たずねる。

「この病室にあった本はどこに片付けたんですか？　私が貸していた本も混ざっていたかもしれないのですが」

　すると男は「わからない」と冷然と答えた。おそらく知っていても同じ答えだろう。必要以上に口にしないのが、この国で長生きするコツだ。

　レフとイリナは足早に病院の出口へ歩きながら、これからどうするか相談する。

　答えはすぐに出た。

「チーフの家に行こう」

　電話番号がわからないので直接訪ねるしかないが、車で三〇分ほどの距離だ。

　病院からタクシーに飛び乗ると、北へ延びる大通りを走る。

サングラード市・宇宙地区の中心に聳そびえ立つのは、大空に飛び立つロケットを表した高さ一〇七メートルという巨大な記念碑。史上初の人工衛星『パールスヌイI号』の成功による宇宙征服の象徴だ。

記念碑の正面に立つ彫像は「今日の不可能は、明日は可能になる」という言葉を遺した宇宙科学の父、K□E□トゥハコフスキー。台座の浮き彫り細工には、科学者、技術者、宇宙飛行士たちと一緒に実験犬マールイも勇ましい顔つきで描かれている。

記念碑の前でタクシーを降りたレフとイリナは、耳当て帽とコートの襟を立てるなどして顔を隠し、すぐ近くにあるコローヴィンの家に向かう。

集合住宅が一般的な都市部では珍しい、庭付きの二階建て家屋。宇宙開発への功績をたたえて政府が与えたものだ。多くの科学者は別荘ダーチヤを望んだが、コローヴィンはサングラードの住居を選んだ。

チャイムを鳴らして名乗ると、少しの間があり、木製の大きな扉がゆっくりと開く。

コローヴィンの娘、クセニアは扉の隙間から顔を覗のぞかせて、レフとイリナの姿を確認すると、パッと表情を明るくした。

「どうも、ご無ぶ沙さ汰たね！」

茶ちゃ褐かつ色しよくの髪を後ろで結んだ彼女は都会的で洗練された格好をしている。背はイリナよりも低く、そばかすのある顔は一九歳にしては幼いが、設計主任の娘だけあって強気な性格だ。

とはいえ、連絡もなしにいきなり宇宙飛行士のふたりが現れたら何事かと混乱するのがふつうだろう。クセニアは「寒いし入って！」と玄関ホールに招き入れると、「どうしたの!?　お父さんのこと!?」と丸い目をぱちくりさせる。

レフは突然の来訪を詫びて、見舞いをしてきたと端的に伝えると、「探しているものがあるんですが……」と目的を告げる。

「闘病記を知りませんか？」

「えっ！」

　クセニアは面食らった様子で息を呑のむ。

「ここにあるの!?」

　間髪を容れずにイリナが問うと、クセニアは神妙な面持ちで頷うなずく。

「お父さんに言われて保管してたの。手術が終わるまでって約束で」

　良かった、捨てられていなかった。

　はやる気持ちを抑えて、レフは丁寧にお願いする。

「もしよければ、見せていただけませんか」

　クセニアは科学者が対象を観察するような瞳ひとみで「んー……」とレフとイリナを見て、しっかりと頷く。

「いいよ。あなたたちなら、お母さんもいいって言いそうだし」

　レフとイリナはペコリと頭を下げ、クセニアについていく。

　玄関ホールのすぐ隣には、最新型のラジオやテレビ、ピアノなどが置かれた立派な居間があり、飾り棚には陶器製の犬の置物が飾ってある。「宇宙へ送った実験犬を想って買った」と以前コローヴィンは言っており、イリナが「吸血鬼の胸像も置いてね」ときつい冗談を浴びせて彼を困らせていた。

　クセニアは居間には向かわず、木製の階段を上がり、二階へ行く。

　大きな窓のある開放的な空間は共和国風ではなく、内装を含めて西側諸国の雰囲気が感じられる。温かみのある色調の廊下を歩いて行くと、奥に書斎がある。

　書斎の扉を開けると、独特の黴かび臭くささが鼻をつく。

　クセニアは黒い革張りのソファにレフとイリナを促すと、「隠してあるの。待ってて」と書斎の奥へ向かった。

　レフはソファに腰かけて、書斎をぐるりと眺める。

天井まで届く重厚な本棚には、約三〇〇〇冊の書物が整然と収められている。

古今東西の宇宙科学や天文学、航空関連の技術書が中心だが、科学とはまったく関係ない連合王国の文化雑誌や、画集や文学作品もたくさん並んでいる。文学作品のなかには、国内では検閲で発禁になったものが多数。本来は所持禁止なのだが、コローヴィンの場合は「すべての創造物は科学的発想の助けになる」という言い訳で、特別に見逃されていた。ロックバンドの『ザ・ビーズ』が表紙の雑誌も同じ理由だろう。彼らの正規のレコード盤も持っていたはずだ。

傍かたわらには映画のフィルム缶も置いてある。多忙なコローヴィンは映画館で観る時間がないため、映写機を買って自宅で楽しんでいた。

広い家のなかで、ここだけが宇宙科学者の世界になっている。

「お待たせ！」

雑記帳『我が闘病記』を持って戻ってきたクセニアは眉まゆ尻を下げる。

「これ、あたしとお母さんじゃどうしていいのかわかんなくて、困ってたんだ。誰かに渡したかったんだけど、お父さんいつも『周りは敵だらけ、不安ばかりだ』って愚ぐ痴ちってたし……。とりあえず読んでみて！」

「わかりました。ありがとうございます」

「ううん。それじゃ、あたしは下に行くね。そのへんの本も適当に読んでいいよ。写真集とかお宝の山でしょ？　書斎の奥から入れる天井裏には、外国のタイプライターとか危ないものもざくざくあるんだよ。宇宙船の部品に紛れ込ませてこっそり持ってきたらしいんだけど、飾ってるだけで未使用なの。権力者ってすごいね。あ、何か飲みたくなったら降りてきてね。湿気って不ま味ずいお菓子ならあるよー」

クセニアは一方的に機銃掃射の如ごとくしゃべると、とたとたと小走りで書斎を出て行った。

年下の彼女になぜか丁寧語で接してしまうレフが苦笑する。

「相変わらずの調子だな。変わらなくて安心したけど」

　イリナはうんうんと頷うなずく。

「私は話しやすくて好き」

　クセニアは初対面のイリナをまったく怖がらなかった数少ないひとりで、『ザ・ビーズ』を愛好する同志として感性も合うようだ。

　さて、妄想録だと自じ嘲ちようしていた内容はどんなものだったのか。

　表紙をめくったレフの目に、衝撃的な序文が飛び込んできた。

【ツィルニトラ共和国連邦の宇宙開発は重病に冒されている。抜本的な治療をしなければ、いずれ死に至るであろう】

『我が闘病記』とは、この国の闘病という意味なのか？

　筆圧の強い角張った字体で、丁寧に綴つづられているのは、他者に見せることを前提として書かれているようだ。

　目を丸くしているイリナに、「つづきを読もう」と言って、頁をめくる。

【まず、現在開発している超大型ロケット『Ｃ-Ⅰ』だが、私利私欲という毒に汚染された結果、月へ行くことはおろか、地球を飛び出すことすら無理となった。一段目に三〇もあるエンジンの制御は不可能だとここに断言する。必ずや爆発するであろう。間違っても生物を載せてはいけない】

　レフとイリナは同時に溜ため息いきを吐ついた。自分が携わる計画のロケット開発を、自ら不可能と指摘するとは。クセニアが扱いに困るのにも納得できる。とんでもない爆弾を家族に預けたものだ。

　無論、コローヴィンは手術後に、家族から回収するつもりだったのだろうが。

　どうしたものかと考えていると、階下からポロン、ポロンとピアノを弾く音が聞こえてくる。「『ザ・ビーズ』の曲だ」とイリナが反応した。クセニアが弾いているのだろう。彼女のしゃべりの勢い

に比べて弾き方がおとなしいのは、反国家的音楽が外に漏れないように音量を加減しているからかもしれない。

　恋愛を歌う軽い旋律を聴きながら、深刻な雑記帳に目を落とす。

【私の手に入れた設計書や資料を見る限りでは、ハイペリオン宇宙船には死亡事故につながる致命的な欠陥が多数ある。ＡＮＳＡの技術者が気づくことを願うが、すべてを改善するのは難しいかもしれない。なぜなら、かの国にも競争に便乗する欲深い連中がおり、不具合がぞくぞくと供給されるからだ】

　地上での火災か、軌道飛行中に起きた事故か、それとも別の不具合かは判断できないが、とにかく事故が予期されている。そして、コローヴィンが眠っているあいだに、悲惨な事故は起きてしまった。

　ここまで重病の内容しかない。

「これって、『有人月面着陸はできない』って言ってるようなものよね？」

　イリナの指摘にレフは頷うなずく。

「斬新な案って、何なんだ……？」

　期待と不安が半々で、つぎの頁へ進む。

【ところで、私の目標は月を足がかりにして火星へ、そして惑星間飛行をすることである。そこでここに、第一歩となる、『人類が月へ行くための新計画』を記す】

「レフ！　新計画だって！」

　イリナは急せかすようにレフの腕を叩たたく。

　鼓動が高鳴る。試験の当落を見るような心持ちで、恐る恐る頁をめくる。

【〈サユース計画〉　共和国の宇宙船『ロージナ』を、連合王国のロケット『クロノスV』で打ち上げる。両国の技術者と飛行士の団結サユースにより、月への橋は架けられるであろう】

手が震える。

「本気か……？」

連合王国と団結する？

天を仰いで大きく息を吐く。

コローヴィンは極秘で共同開発を計画していた。

思い出してみれば、レフがバートと交わした共同開発の約束を彼に明かしたとき、「それは不可能」と笑っていた。

確かに笑いたくもなるだろう。

ロケットと宇宙船の提供国が真逆だったのだから。

「でも、これ……」

呆ぼう然ぜんと文章を目で追っていたイリナが、ふと怪け訝げんな顔になった。

「ただの『妄想録』ってこと、ないわよね……？」

言われてみれば、本当にそうだ。実現する可能性のない計画ならば、笑い話にもならない。

「先を読んでみよう」

驚きのあまり気持ちが飽和しかけていたが、頭を切り替えて、じっくりと読み進める。

『サユース計画』の項目は、理路整然とした筋立てで記された、設計に関する理論書になっている。しかし、用いられている技術は難解で、妄想録なのか、成立しているのか、レフとイリナには判断できない。それなりに航空力学を勉強しているが、一流の技術者ではないからだ。

もしかしたら『我が闘病記』は手の込んだ悪戯いたずらかもしれない。

と、一瞬疑ったが、すぐに「それはない」と思い直す。

この闘病記は、コローヴィンが魂を削って書いた、遺書同然の著作なのだ。丁寧に綴つづられた文字が、時折異様に歪ゆがんでいるのは、痛みや苦しさに耐えたからではないか。

それに、内容が難しくても、計画が成立していると推測できる証拠はある。

『連合王国の宇宙開発に関する資料』だ。

コローヴィンは資料を組み合わせてＡＮＳＡの計画を想像し、設計書を自作した。つまり、手元に連合王国の『クロノス・ロケット』の設計図があるも同然なのだから、共同開発を見据えて、新型宇宙船『ロージナ』を設計できる。

こんな大それた計画をなぜ企てたか？

理由を想像すれば、共和国内の宇宙開発における確執に行き着く。

実現不可能となった哀かなしきロケット『Ｃ-Ｉ』は密ひそかに切り捨て、未来の乗り物『ロージナ』に注力し、虎視眈々と機会を窺うかがう。そして、ハイペリオン宇宙船の重大な欠陥が露呈するなり、共和国の上層部が『Ｃ-Ｉ』に見切りを付けるなりした瞬間、こともなげに提案するのだ。こんな新計画がある、と。

「……妄想録なんて、大おお嘘うそだ」

己の野望を実現するために、両国の弱点を突き、同盟を組ませる『サユース計画』。科学者の空想と言ってしまえばそれまでだが、ハイペリオン宇宙船の事故は当たっている。想定外は、自分自身が意識を失ったことだろう。

「ねえレフ、この計画って、退院したら実行するつもりだったのかしら」

イリナに問われてレフは考える。

まず、計画の要かなめとなるロージナ。

今回の打ち上げは散々な結果に終わったが、原因ははっきりしている。天才科学者の設計思想を技術者が理解できないまま製作に入り、指揮官不在の状況で納期に追われ、打ち上げてしまったこと

だ。コローヴィンが「一〇〇パーセント完成できる」と断言していたのだから、時間をかけて修正すれば、不具合はいつかなくなるはずだ。

　難しいのは、共和国と連合王国の団結だろう。

　こちらは個々人の力で解決できる問題ではない。

　コローヴィンは「時期が来たら君たちに明かす」と言っていたが、明かしてどうするつもりだったのか。

「時期というのは、連合王国の事故を予期していたのかもしれないけど……こんな反政府的な計画を委員会に出そうものなら、設計局長の職は解任されて懲罰処分だろう」

　イリナが人差し指をピンと立てる。

「もしかして、ゲルギエフが敗北を認めるのを待っていたとか？　切り札として出せば、効果はあるんじゃない？」

「うん、そうかもしれない。ロケットが完成しない状態が延々とつづけば、どこかで見切りを付けるだろうし……」

　いずれにせよ、計画を作った本人が目を覚まして自分の口で語らなければ、すべては第三者の想像にすぎない。

　だからと言って、見なかったことにして、書斎の奥に戻すのが正しい選択なのか？

　どうすべきか、レフはイリナと話し合う。

「両国の有人宇宙飛行計画は停止していて、下へ手たしたら中止になるかもしれない。いや、連合王国は再開の可能性はあると思うけど……」

「この国は死に至る……そうよね」

「死ぬのは宇宙開発計画だけじゃない。俺たちもだよ」

　上層部から異常な命令が降り注ぎ、第二、第三の殉職者が出てしまう恐れがある。

使い捨ての駒にされることは阻止しなければ。

イリナが『我が闘病記』を胸に抱き、強い視線をレフに向ける。

「私は『サユース計画』を実現したい。だってこれなら、カイエやバートと一緒に月を目指せるのよ。サンダンシア女王の願った共同開発も叶うわ」

「もちろん、俺も実現したい。チーフのためにも」

今思えば、別れ際に引き止められたときの話はまるで遺言だった。ひょっとして、彼は自分の身体からだの限界をわかっていて、無人月探査機の開発を後進に託したように、共同開発と有人飛行計画を自分たちに託したのではないか。

都合の良い解釈かもしれないが、もしそうならば―『サユース計画』を次代に伝えるつもりで書いたならば、自分たちの手で実現しなければならない。「勝手に読んだ上に、勝手に実行するな」と目覚めたときに怒られるかもしれないが、きっと許してくれるはずだ。「翼竜ジラントよ！　私が夢を見ているあいだによくやった！」と顔を紅潮させて、両肩を叩たたいてくれる。

心は決まった。

科学者の空想を現実にする。

しかし、それを叶えるには何をすればいい？

「イリナ。仮に、この雑記帳のまま委員会に提出したとする。どうなると思う？」

迷わずにイリナは答える。

「燃やされておしまい」

「正解。そして同志ゲルギエフを筆頭とする上層部に嫌われ、委員会にも二度と呼ばれなくなるオマケ付きだ」

「じゃあ、ＡＮＳＡに連絡をして、計画を伝えてみる……って、無意味かな」

イリナは自分の発言を自ら否定する。

「今までもあっちから共同開発を持ちかけてくれてたのに、最高指導者様がいつまでも『検討中』だものね」

「うーん……」

　考えが行き詰まり、レフは両手で髪の毛をぐしゃぐしゃと掻かき乱す。

「現場の同志たちは、チーフの計画に賛同してくれるに違いないんだけどな……」

　立ちはだかるは、国家の勝利という亡霊に憑つかれている権力者層。個々人の考えなどそこにはない。主義にそぐわないものを排除する。

　そして、この計画は共和国の権力者層を説き伏せるだけでは成立しない。団結相手である連合王国の協力も同時に必要になる。「あなたたちのハイペリオン宇宙船を放棄し、ロケットを使わせてくれ」という無茶な要請だ。

　考えれば考えるほど難しい。相手が巨大すぎる。

　イリナは瞳ひとみを閉じて腕組みし、無言で考えている。

　深い沈黙が室内に満ちる。

　開放的な窓からは柔らかな冬の日差しが差し込み、宙を舞う微少な塵ちりはちらちらと煌きらめく。偉大な主が不在となった書斎には、娘の奏でる『ザ・ビーズ』の軽やかな旋律だけが静かに響いていた。

「……彼らの音楽と同じだよね」

　イリナはつぶやくと立ち上がり、書棚へ向かう。そして『ザ・ビーズ』が表紙の雑誌を手に取る。

「この国にも、彼らの音楽に触れたい人はたくさんいるのに、意味不明な規制をされてる。それと同じ。宇宙開発の真実やチーフの計画を知りたい人たちは、いっぱいいると思う。でも、明かしたら駄目だし、書いたら検閲で削除される」

「そうだ。それがこの国だから。『我が闘病記』は『我が健康日

記』に書き換えられるだろう。祖国の宇宙開発は健全ですくすくと成長している……ってね」

　レフの言葉に、最悪という顔をするイリナ。

「私たちでマイクを手に各地を回れないの？　『ミハイルは上の人たちに殺された。月へ行くためには共同開発をするしかない』って訴えるの」

　レフは首を横に振る。

「扇動罪で、最初の街で捕まるだろうな」

「扇動も何も、真実なのにっ……！」

　助けを求めてコローヴィンの姿を探しても、彼はここにはいない。代わりに、知識の源が棚にぎっしり詰まっている。

　あてどなく棚を眺め、参考になる本はないかと探す。探すと言っても、探すべき本がわからない。わからないなりに考えて、突破のきっかけになるような、手がかりになる知識が落ちていないか探しつづけて、出口の見えない迷宮に入りかけたレフの目に、一冊の本が留まった。

　一六世紀、科学革命が起きた頃に、ひとりの学者が書いた宇宙観の本。その学者は真理を主張しつづけた結果、処刑された。天動説に反する地動説を支持し、無限に広がる宇宙を唱え、支配者である教会を批判して怒りを買ったため、火あぶりにされ、遺灰は川に捨てられた。

　今、レフとイリナが実現しようとしている計画は、それと同じ。

　支配者に対する反逆行為だ。

　しかし、力なき者の反逆など、愚直に訴えるだけでは権力に潰つぶされて終わる。件くだんの学者の著作は処刑後に禁書となり、正当に評価されるまで三世紀もかかった。

　それでは駄目だ。

　誤った考えを持つ支配者に処刑されてはいけない。正しい考えで支配者を説き伏せねば、月への道は閉ざされる。

いや、説き伏せるだけでは不十分だ。

かつて、レフは大広場の演説でイリナの真実を全世界に向けて訴えたが、ゲルギエフによって都合良く上書きされてしまった。

同じことをしても無駄。個人では絶対に勝てない。権力者の横暴を防ぎ、説き伏せ、連合王国に伝え、真実を求める同志に訴え、団結を勝ち取る手段。そんな方法があるのかと延々と考えるレフの頭を、下の階から聞こえる『ザ・ビーズ』の楽曲がちくちくと刺激する。彼らの曲が共和国民に広まったように、『サユース計画』も広まり、皆から支持されないものか。けれども、この極秘計画を表に出さねば広まることはない。イリナの意見のように、扇動罪を覚悟で訴えるしかないのか。

だが、捕まって燃やされたら、そこで終わる──

そのとき、自由に飛び跳ねるピアノの音が、蜂の如ごとくレフの胸を刺した。

「──あっ！」

ひとつ方法がある。

しかし危険すぎる賭かけだ。

自分だけの責任では済まないし、すべてが崩壊するかもしれない。

「どうしたの、レフ」

「ああ……」

少し迷ったが、イリナになら相談してもいいだろう。

「この案について、君の意見を聞きたい」

訝いぶかしげに見つめる彼女に、レフは慎重に告げる。声を潜める必要はないのに、つい、小声になってしまう。彼女は「えっ？」と何度も声を上げ、目を瞬き、不安そうに瞳ひとみを揺らす。書棚に囲まれた小さな空間で、国家を動かす策謀を伝える。

「──以上だ」

長く話したわけではないのに、喉のどがからからになっている。

イリナは呑のみ込むのに時間がかかっているようで、両手で顔を押さえて大きく息を吐き、ところ狭しと置かれた本のあいだをうろうろ歩き、五分ほどして「そうよね……」とつぶやくと、レフにまっすぐな視線を向けた。

「無理でしょ。私たちだけでは。いかに同志を団結させるかね」

「……それは、つまり賛成ってこと……？」

レフが確認を取ると、イリナは挑戦的な目つきになる。

「乗るに決まってるでしょ？　おもしろいじゃない。はた迷惑なポンコツおじさんの妄想を、宇宙飛行士という武器を使って叶えてあげましょう」

「ああ、やってやろう！」

彼女に言われると、なぜか不安が自信に代わり、成功した景色が目の前に浮かぶ。

「でも、クセニアちゃんの許可をもらわないと始まらないわね」

レフとイリナは一階へ降り、居間でピアノを弾いているクセニアに話しかける。

「すいません、お願いがあります」

「あ、ごめん、ピアノがうるさかった？」

「いえ、『我が闘病記』について、ちょっと相談が―」

レフは思いついた案を丁寧に彼女に伝え、足りない箇所はイリナが補足し、説得を試みる。

すると。

「わかった。目が覚めなきゃ燃やすつもりだったし、いいよ。お母さんは説得しておく。たぶん大丈夫」

拍ひよう子し抜けするほどあっさり許可を得られた。イリナも驚いたようで「いいの？」と訊たずねる。

　するとクセニアは深く頷うなずく。

「いいってば。お父さん、あなたたちを自分の子どもみたいに愛してたし。もし失敗したって、子どもの失敗なら許してくれるでしょ。起きるの待ってたら二一世紀になっちゃうかもしれないし」

　肩をすくめるクセニアは「あっ」と小言を漏らすと、首を横にぶんぶんと振る。

「今言ったのナシ。失敗は駄目。成功させて、絶対に！」

「もちろんです！」「任せて！」

　レフとイリナは力強く言い切った。

ふたりは望外の成果を手に『ライカ44』へ戻る。

帰途、訓練センターの仲間にこの計画をいつ明かすべきか話し合い、ミハイルの四〇日目の追善が終わったあとに決める。

彼の魂の旅路を邪魔しないように。

宇宙市民住宅の交流ホールで、ミハイルの四〇日目の追善が執り行われる。

出席者はレフとイリナらの飛行士たち、ヴィクトール中将、訓練センターの職員、技術者ら四〇名。政府の上層部からは誰も来ていない。

葬儀後の追善と同じく食事は質素だが、今日はローザが雛豆のブリュシチを用意した。ロージナでの交信でミハイルが求めた好物だ。

前回は憔しよう悴すいして自宅から出られなかったローザも、区切りとなる忌日の到来で、心なしか表情はすっきりしている。

ミハイルの遺影の傍かたわらに、黒麦パンで蓋ふたをされた蒸留酒がある。そして今、その蓋は外される。大きく開け放たれた窓から魂は旅立つ。薄紫色の宵空には、銀色の満月が低く浮かんでいる。ミハイルの魂が、彼の目指した月へたどり着けるように、皆は祈りを捧ささげる。

儀式が終わると、交流ホールは寂せき寥りょう感かんに包まれる。

　この場にいる者の多くは、ミハイルの魂とともに、宇宙開発も弔った。人生を捧げてきた夢と目標を見失い、抜け殻になってしまった。

　そんな彼らに今一度、情熱を取り戻してほしい。

　ここでレフとイリナは皆に声をかける。

「今後の宇宙開発について、大事な話があるんだ」

　衆目を集めるなか、ふたりは話が外へ漏れないように窓を閉めて、ミハイルの遺影の隣に立つ。そして、傍らにいるローザにレフは確認を取る。

「少し時間をもらってもいい？」

　彼女には話の内容は伝えていないが、レフとイリナの真剣な表情から重要な発表だと感じ取ったようで、強く頷うなずいた。

　果たして、皆に受け入れられるのか。やや緊張しながら、レフはミハイルにも見えるように、彼の遺影の前に『我が闘病記』を置く。

「これは、チーフが入院中に密ひそかに書き上げた、新しい月面着陸計画だ」

　低いざわめきが起き、雑記帳の周囲に人がぞくぞく集まり、人垣ができる。

「……闘病記？」

　訝いぶかしむ皆に、レフがかいつまんで計画の内容を教える。

　と、皆の表情が一変し、慌てて雑記帳の中身を確認する。

「実現したらすごいぞ！」

　セミョーンが興奮して叫び、仲間たちの顔に光が差す。

　しかし、一方で冷静な意見も出る。

「上に提案しても相手にされないんじゃないか？　これまで、連合王国が差し伸べてきた手を無下に拒んでいたんだ」

ヴィクトール中将も顔を険しくする。

「彼の言うとおり。委員会が認めるとは思えん。『検討に値せず』と破り捨てられ、チーフも、提案した者も降格処分だ。軍部も猛烈に反対するだろう」

上官の重い言葉によって失意が充満するが、イリナは意味ありげに微ほほ笑えむ。

「そのあたりは想定済みよ。ねえ、レフ」

「ああ。上には直接提出しない」

ひと呼吸置いて、レフは切り出す。

「東の妖術師を著者として、『我が闘病記』を本にする。非合法の地下出版だ」

不意打ちに遭ったように皆はギョッとして、異様な沈黙が室内を支配する。その静寂は一瞬で、すぐに戸と惑まどいのどよめきが生じ、驚きよう愕がくを顔に貼り付けたセミョーンがレフに詰める。

「本気で言ってるのか!?」

「本気だ。チーフの家族の了承も得た」

「けど、地下出版サミズダートは……どうなんだ」

「この街は世間から隔離された閉鎖都市だ。そこに宇宙開発の停止という事情が加われば、ますます誰も来ない。地下出版物の制作にうってつけの秘密印刷所になる」

「そういう意味じゃなくて……」

交流ホールに集まった者たちは怪け訝げんな顔で、口々に意見を交わす。ローザも不安そうにレフを見つめる。懐疑的な空気が立ち込めるが、レフは動じずに訴える。

「上にいくら訴えても無駄だと、ロージナの事故報告書で痛感した。だから今回は別の角度から攻める。俺たち個人の考えではなく、現場の総意にするんだ」

「具体的な作戦はあるの？」

　ローザの問いに、レフはしっかりとした口調で説明をする。

「最初に本を配る相手は、現場で働く技師や科学者。『サユース計画』が月に至る唯一の方法だと周知させ、同志を増やす。そのあとで街の有志の手に渡り、連合王国の諜ちよう報ほう員が入手すれば、ＡＮＳＡや向こうの政府にも情報が流れる。話題になれば新聞に載り、ラジオで朗読され、世界に拡散される。この国の上層部に潰つぶされる前に、多くの人々から支持されてしまえば、委員会も軍部も前向きに検討するしかない」

　説明を聞いた皆は一様に不安を顔に浮かべ、セミョーンは「できるのか……」とつぶやく。

「できるわ」

　皆の困惑をイリナが一いつ閃せんする。

「文学や音楽が実際にそうでしょ。政府は躍起になって検閲で排除してるけど、根絶やしにできてない。『ザ・ビーズ』のおかげで、この国には自由を求める気風が広がっているわ。国家体制に違和感を抱く若者も多い。外から新しい波が押し寄せてきてる。その波に乗るの。もし政府が『我が闘病記』を発禁にしたり、国営通信ＴＡЦＣを使って非難したりすれば、逆に真実味が増すと思うわ」

　もはや共和国の市民は、国内のテレビや新聞を信頼していなかった。ラジオの周波数を外国の放送局に合わせれば、毒されていない正しい情報をいくらでも得られるのだ。

　レフとイリナの熱心な説明により、懐疑的な視線はやや薄れたが、全員が納得するまでには至らず、飛行士のひとりが疑問を投げかける。

「チーフの計画はぜひ実現したいと思う。しかし『ザ・ビーズ』の歌や文学作品とは違い、チーフの設計書は専門的で複雑だ。一般市民は理解できないだろう。上層部が科学者の名を騙かたって『連合王国の陰謀』『実現不可能な嘘うそ』と批判すればそちらを信じてしまい、街の有志も複製などしてくれないのではないか？」

　レフは二度、三度頷うなずく。

「確かにそのとおりだ。日常に寄り添う音楽や文学と、宇宙科学の専門書はまったく違う。真偽不明の計画が市民のあいだで拡散され、話題になるのか？　そう問われると、返答に困る」

　がっかりした溜め息いきがあちこちで聞こえると、レフは表情を明るくする。

「でも、心配無用。対策を練ってある。専門知識のない市民にも興味を持ってもらえるように、『宇宙飛行士の真相告白』も付けた二冊の合本として配布する」

「合本……？」と首をかしげるセミョーンにレフは言う。

「そうだ。共同開発の計画と一緒に、国家が隠いん蔽ぺいしてきた真実も暴露する」

　イリナが得意げに眉まゆを上げる。

「私が実験体だったことや、レフがじつはパラシュートで帰還したこと。嘘のランデヴーも、それから、セミョーンが宇宙遊泳で死にかけてた状況も、すべて晒さらしてやるの」

　セミョーンはウッと惣菜麦餅ピロシキが喉のどに詰まったような顔をして、視線を泳がせる。最高潮に達するざわめきをレフは手で制して、やや声を低くする。

「ただ、ひとつだけ、俺たちも嘘を吐つかなきゃいけない。それは、ロージナの事故だ。政府の発表どおり、『パラシュート以外に問題はなかった』としなければならない」

　レフはミハイルの遺影を一目見て、申し訳ない気持ちに囚とらわれながらも、皆に理由を告げる。

「ロージナが不具合だらけだったと明かしたら、計画の信頼性を損なう。俺だって、本当はミハイルの名誉のためにも、飛行中に彼が死闘を繰り広げて、大気圏再突入を勝ち取った事実は伝えたい。しかし、ここは彼個人ではなく、宇宙開発全体を取りたい」

　理解してほしいという想いを、レフはローザに視線で伝える。

　すると、ローザは硬い表情を崩さずに言う。

「パラシュートの墜落は、どう説明するの」

「東の妖術師チーフデザイナーが体調を崩して入院しているあいだに、宇宙開発を利用したい政治家が勝手に進めてしまった。また、東の妖術師は意識障害中ではなく、手術が成功して退院したとする。匿名の存在だからバレやしないさ。開発者のメッセージも本に載せよう。『革新的な未来の乗り物は一〇〇パーセント完成する。私にはこの船が宇宙ステーションへ人を運ぶことに利用される未来が見える』と。ローザ、どうだろうか」

「わかったわ。ありがとう」

　ローザは否定も肯定もしない、色のない声で答えた。すると話が終わるのを待っていたかのように、額に汗を浮かべたセミョーンがレフとイリナに訊たずねる。

「君たちの狙ねらいはわかる。俺だって宇宙遊泳の真実は明かしてほしい。ただ……『サユース計画』の著者を東の妖術師チーフデザイナーにするのはいいが、『宇宙飛行士の真相告白』の著者は誰にするんだ？　俺たち飛行士から誰か選ぶのか？」

　レフは人差し指を立ててニヤリとする。

「うってつけの奴がいる。心配無用だ」

　セミョーンは首をひねりながらも、「そうなのか」と頷うなずいた。

　すると今度は、これまで黙って様子を窺うかがっていた訓練技師のひとりが、否定的な声を上げる。

「政府の批判や扇動につながる危険な計画だ。どうなるか、わかってるんだろうな？」

「わかってる。でも誤解しないでほしい。俺とイリナが提案していることは、あくまでも宇宙開発の方針についての批判であり、国家批判ではない。連合王国のサンダンシア女王が『宇宙開発は政治ではない』と仰っていたようにね」

「詭き弁べんだ。言い訳にすぎない。罪に問われる危険性は高いだろう」

　覚悟を決めた顔つきのイリナは一歩前に出る。

「そうよ。この国では罪。地下出版サミズダートに手を貸した者は当局に捕らえられるかもしれない。私とレフは、最悪の場合、不慮の事故で死ぬでしょうね」

　動揺を露あらわにする者たちに、レフは強く訴える。

「俺たち飛行士は死を覚悟して宙そらを飛ぶ。その気持ちは皆同じだろう。でも勘違いするな。死の宣告をしてくる相手は宙にはいない。地上にいる」

　部屋の隅で腕組みをしているヴィクトール中将の鋭い視線を感じながら、レフは仲間に訴えつづける。

「もしこのまま上の指示に従っていたら、無謀な計画が再開されて、また犠牲者が出るかもしれない。もしくは、宇宙開発計画そのものが頓とん挫ざして、この街は雪に埋もれてなくなる。ミハイルの死がまったくの無駄になる。それでいいのか？」

　イリナが『我が闘病記』を掲げる。

「共同開発は、声に出さなければ絶対に実現しないわ。チーフが魂を削って記したこれこそ、今、私たちが命を懸けるものじゃないの？」

　レフはこの場にいる皆に想いを伝える。

「俺たちは音楽家じゃないから、歌で人の心は動かせない。でも、宇宙開発に携わる者には、ほかの誰も持たない武器がある。宇宙飛行士は歴史上わずかしかいない。宇宙船やロケットは新時代の技術だ。だから、俺たちは連合王国と手を取り、人類共通の目標を叶えられる。くだらない競争を終わらせて、ふたつの国を団結させられる」

　思いの丈をぶつけたレフは、ミハイルの遺影に目を向ける。

「約束したんだ。みんなで月へ行くって」

　皆は唇を結び、額縁のなかで微ほほ笑えむミハイルを見て、それぞれの想いを胸に巡らせている。

静まり返った部屋をレフは横切り、渋面をしたヴィクトール中将に歩み寄ると、姿勢を正す。

「同志中将。この計画を実行すれば、監督責任者のあなたには迷惑がかかるでしょう。黙って実行することもできましたが、それはできません。ずっと面倒を見てくれているあなたを、裏切れません」

レフは深く頭を下げる。

「出版を認めてください。責任は俺が取ります」

殴られるか、あるいは縛られて当局に突き出されるか、そのどちらかだろう。

険しい顔つきのヴィクトール中将はレフに問う。

「ここで話した計画は、誰にも言ってないか？」

「ほかに知っているのは、チーフの家族だけです」

「そうか……」

少しの間を置いて、ヴィクトール中将は腕組みを解き、両腰に手を当てると、皆に厳しい口調で告げる。

「この場でレフが言った内容はすべて忘れろ。レフは何も言っていない。いいな？」

──やはり認めてもらえないか。ならば、ほかの方法を考えるしかない。

「おい、レフ」

ヴィクトール中将はレフの頭髪を掴つかむと、グッと引っ張り上げる。彼の充血した瞳ひとみがギラリと光る。

「地下出版サミズダートの案は私が考え、この場で皆に告げた。わかったか」

「……それは、どういう意味ですか」

レフは混乱したが、つぎの言葉ですべて悟った。

「死ぬのは私でいい」

「同志中将!?」

「監督官である私の職務は、お前らを一人前の宇宙飛行士に育てることだ。だが、ミハイルを守れなかった。ローザの人生も壊してしまった。その責任を取る義務がある」

「しかし――」

「命令に従え」

　レフの言葉を遮さえぎって、ヴィクトール中将は皆に向けて声を張る。

「同志諸君！　地下出版サミズダートの計画は今言ったとおりだ。妻子のある者は気持ちだけでいい。複製や拡散に手を出さなければ、当局も罪には問えないだろう。また、反対が多ければ、闘病記はチーフの家族に返し、全部なかったことにする。我々と宇宙開発の今後については、成り行きを見守り、上の指示に従う」

　そしてヴィクトール中将は蒸留酒の瓶びんを取ると、自分のグラスに注ぐ。

「人生をともにする者は階段を上がって屋上へ来い。エレベーターは使うな。日が変わるまで待っている」

　ヴィクトール中将はグラスを手に部屋を出て行く。

　レフとイリナが動く前に、すぐさまローザが蒸留酒を注ぐ。

「ミハイルも賛成すると思うわ」

　決意を秘めた表情のローザは、ミハイルの遺影を小脇に抱え、グラスを手に歩き出す。

　つづいてセミョーンも、一期生たちも、つぎつぎに蒸留酒に群がる。飛行士だけではなく技師も職員も蒸留酒を求める。皆、レフとイリナをチラリと見るが、とくに何も言ってこない。しかし、誰もが感謝するような表情をしている。

「イリナ、俺たちも行こうか」

「今日ぐらいは私も蒸留酒にしていいでしょ」

「泥酔するなよ」

　レフは交流ホールを出る前に、迷っている様子の者たちに声をかける。

「誰も無理強いはしないし、参加しなくても責めない。選ぶのは自由さ。俺はただ、何もしないで終わりたくない、それだけだよ」

　そう言ってイリナと交流ホールを出ると、階段へ向かう。一二階まで自分の足で上がるのは軽い訓練のようだ。

　しかしなるほど、ヴィクトール中将が「階段で上がって来い」と命じた理由がわかった。一段一段踏みしめて上がるのは時間もかかり、自分の選択をじっくりと考えられる。複数人が乗ってすぐに到着するエレベーターでは、覚悟が固まらないまま参加することになりかねない。

　これは、命を懸ける重要な選択。

　長い階段が、ロケット発射台の宇宙船につながっているのか、それとも処刑の場につながっているのか。運命は、誰にもわからない。

　屋上へ出ると、先に着いた皆は思い思いの場所に腰かけていた。電灯はなくても、冴さえ冴えと輝く満月の光でじゅうぶんに明るい。

　レフとイリナは鉄てつ柵さくを背もたれにして、並んで座る。剥むき出しのコンクリートは氷のように冷たい。凍てついた空気を胸いっぱいに吸い込むと、より一層、気持ちが引き締まる。

　皆、口数は少ない。白い吐息があちこちで夜風に舞い、白しら樺かばの林へ消える。

　寒月は天へゆっくりと上がり、宙そらの色彩は群青へ深まっていく。

　交流ホールにいた者たちはぞくぞくと屋上にやってくる。一期生

に二期生、技師や職員たち、それぞれ覚悟を決めた顔でグラスを持っている。

　──君も来たのか。──ああ、迷ったけどな。

　言葉はなく、視線だけで会話が交わされる。同志に名乗りを上げる者を、レフはひとりひとり目で追い、深く感謝する。そして同時に、大きな責任も感じる。

　隣に座っているイリナと、時折肩や腕が触れる。彼女は月の石の首飾りを握り、目を瞑つむっている。『ノスフェラトゥ計画』で出会ったときは二か月の監視役だったはずが、いつの間にか人生をともにしている。この先、どこまで、そしていつまで、道をともに歩けるだろうか。

　やがて、月が頭上に昇ったときには、交流ホールにいた全員が屋上に揃そろっていた。最後のひとりから「下にはもう誰もいない」と報告を受けたヴィクトール中将は「早いな」と苦笑する。

「寒いし腹も減った。早く帰れるのはありがたい。さて、訓練センター副長官レフ・レプス同志。決起の乾杯をしてくれ」

「はっ！」

　レフがグラスを持ち、すっくと立ち上がると、皆も連れて腰を上げる。ローザが胸に抱えた遺影が月光を反射する。

　ミハイル、見ててくれ。

　レフは心のなかで、彼の魂へ想いを告げる。

　初めて宙そらを飛んだあの日、君がくれた言葉で、俺は今日まで生きてきた。

　──君は君でいいんだよ。宇宙飛行士のあるべき姿なんて、誰も知らないんだ。

　宙で散った君は、勇敢な宇宙飛行士として永遠に人の心に生きつづける。

　俺は、この選択が正解かわからない。

　けれど、留まって雪に埋もれるくらいならば、自分の信じる道を前に進む。

　この道が、月へつづいていると信じて。

「すべての同志のために」

　この人生を、月に捧ささぐ。

　月光を浴びて煌きらめく蒸留酒を、天高く掲げる。

「乾杯」

　グラスを煽あおり、魂の水を流し込む。冷え切っていた身体からだの芯が熱くなった。

「乾杯！」

　同志たちもいっせいにグラスを傾け、宙を見上げる。

　たったひとくちで耳の先まで真っ赤になったイリナは大きく息を吐き、地べたにごろんと寝転がる。

　酔うのが早いなと、レフが後頭部を掻かいたとき。

「虹の入り江……」

　瞳ひとみを閉じた彼女の口から、懐かしい詩が聞こえてきた。

　凍てつく夜、氷輪の下。宇宙市民住宅の屋上で、アニヴァル村の吸血姫が月を詠うたう。

「眠りの沼……」

　まだ月が神話の世界だった頃に作られた、その玲れい瓏ろうたる調べに、同志たちは陶然と酔いしれる。

「静かの海……」

　ひとつひとつ紡がれる古いにしえの詩は、同志たちの身体からだに染み入り、血のなかに溶けてゆく。

「嵐の大洋……」

　追善の夜は静かに更けていく。

「夢の湖……」

　ただ静かに。

さっそく翌日から作業が始まった。

自主出版の経験がある同志はいないが、訓練センターの職員は資料や頒布物をずっと作ってきたので、制作方法を応用すればとくに支障はない。

作業場は、宇宙市民住宅の空き部屋と使用停止中の訓練センターを使う。ヴィクトール中将の協力あってのことなので、レフは彼に感謝したいのだが、あくまでも彼が主導しているという体裁を保つため、その気持ちは表に出さず、指示に従って行動する。

家族がいる者は書籍の制作には直接関わらず、周辺で補助をする。

また、ナタリアの後任の〔運送屋〕は見て見ぬ振りをしている。「手伝えないけど、応援する」と彼女はレフにこっそり言った。

環境の準備は整い、原稿の作成に入る。コローヴィンの『我が闘病記』に、宣伝効果のある暴露本を加えた二冊の合本形式で製本するので、原稿は二種類が必要だ。

一冊目の暴露本──まず、『宇宙飛行士の真相告白』は、ヴィクトール中将の監督日記をもとに、レフとイリナ、ローザらの宇宙飛行経験者が相談しながら草案を練る。頁数が多いと複製が大変なので、項目ごとに要点を絞る。

二冊目の『我が闘病記』は技術系の職員が中心となり、『サユース計画』を中心に書く。機密保持の観点からして、設計理論のすべては載せられないので、一般市民に衝撃を与える刺激的な文言を選

り抜き、技術者や科学者が読めば研究魂に火が点つく内容に調整する。

　原稿作成にも課題があった。タイプライターを使いたくても、国内にあるすべての製品は当局の管理下に置かれており、書体などから足がつく。

　そこでレフは、コローヴィンが自宅の天井裏に隠していた外国製のタイプライターを密ひそかに運び出す。クセニアは計画が動き出したことにわくわくしているようで、「お母さんも乗り気。ちょっと怖がってるけど」と笑っていた。

　レフは巻き込んでしまっていることを謝る。

「迷惑をかけないように気をつけます」

「もう迷惑かけてる。お父さんはいつまでも寝てるし。あー、でも禁煙してくれたのだけはよかったかな」

　ひたすら苦笑いをするしかなかった。するとクセニアはレフの額をトンと指で突いた。

「なんだか頼りないなぁ。しょうがないから、あたしが代わりに命じてあげるよ」

　そう言ってクセニアは胸を張り、眉み間けんに皺しわを寄せてレフをキッと睨にらむ。

「翼竜ジラントよ！　力の限り飛べ！　彼岸花リカリスを月の大地に咲かせよ！」

　コローヴィン本人に檄げきを飛ばされたみたいに、気持ちが昂たかぶる。

「はい、チーフ！」

　レフが敬礼してみせると、彼女はニヤリと笑みを浮かべた。可か愛わいらしいが、父親と同じくらいの貫かん禄ろくがある。私たちのことは気にするな、好きにしろと、その自信に満ちた顔は物語っていた。

霜の精マロースが吹雪を巻き起こし、街全体が雪と氷に覆われるなか、原稿の制作は着々と進む。本の複製に使う写真用フィルムと印画紙も準備ができた。

レフの立てた予定では、完成した原稿を皆で確認し、議論を重ね、納得したところで二〇〇部ほど複製する。

一月半ばには各設計局や大学、科学アカデミー、そして複製に実績のある有志が活動する都市部へばらまく。その後は、通常の地下出版物やレントゲンレコードのように、人々の手で拡散されて話題になるのを待つ。

原稿を書き進める一方で表紙も用意する。

これまで共和国政府が宇宙船やロケットの写真を公開する際は、隠いん蔽ぺい工作で黒く塗りつぶしていたので、「ロケットを上半分くらい描こう」と方針が決定する。

表紙のデザインを担当するローザがレフとイリナに問う。

「本の題名はどうするの？　『我が闘病記』では意味がわからないけど」

「いちおう、イリナと考えた案がある。なあ？」

「皆に言った方がいいんじゃないかしら」

そして、レフとイリナは同志を集めると、題名の案を伝える。

「国家にとって俺たちは実験犬同然。使い捨ての猟犬ライカみたいなものだ。それなら、猟犬らしく喉のど元に噛かみついてやれ」

「そんな意味を込めたの」

イリナはわざと牙きばを剥むいて見せた。

そして、一九六六年一二月二五日。

世界中で多くの人たちが神の誕生を祝う日に、二種類の原稿を一

冊にまとめて製本した、国家を揺るがす非合法書籍が完成した。

月と猟犬　――宇宙飛行士と設計技師長の手記――

［自序］

我らの成し遂げた偉業は、この先、誰にも知られることはないかもしれない。
皆から褒めたたえられることもなく、歴史に名を残すこともないのだろう。
存在すらも闇に葬られるのかもしれない。
そこで、祖国が死に至る前に、私の瞳に映った真実をここに記す。

宇宙飛行士第〇号　ウラジミル・スホイシン

宇宙開発が危機的状況である今、『サユース計画』を提唱したい。
共和国の宇宙船『ロージナ』を連合王国のロケット『クロノスV』で打ち上げる。
両国の技術者と飛行士の団結（サユース）により、月への橋は架けられるであろう。
私の瞳には、人類が月面に偉大な一歩を踏み出す光景が映っている。

設計技師長　東の妖術師ことK・E・トゥハコフスキー

［項目］

［第一章］　宇宙飛行士の瞳　『宇宙への旅路――その嘘』
［第二章］　設計主任の瞳　『ミェチタ計画――その嘘』
［間　奏］　実験犬の瞳　『パールスヌイⅡ号――その嘘』
［第三章］　宇宙飛行士の瞳　『真ミェチタ計画――その嘘』
［第四章］　設計主任の瞳　『有人月面着陸――【サユース計画】の提案』
［終　奏］　月の瞳　『月の女神はあなたを待っている』

責任編集　ニコライ・デニーソヴィチ・カラマーゾフ

Arnack News

JANUARY 31 , 1967

スホイシン宇宙飛行士、激白!

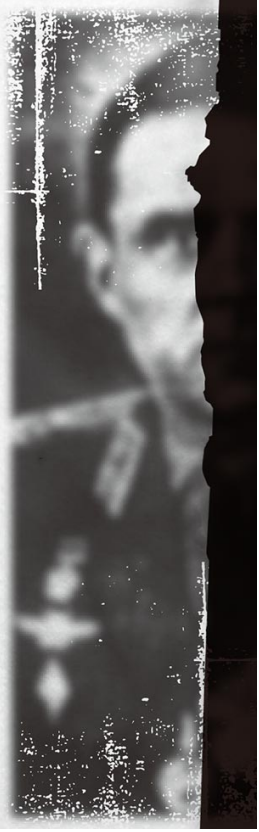
本紙の熱烈な読者ならご存じであろう、宇宙飛行士スホイシンがやってくれた。かつて共和国政府は本紙のスクープを「誤報」と糾弾したが、さて、どちらが誤報だろうか。

当社特派員が共和国内で入手した話題の書『月と猟犬』を見てみよう。

驚くなかれ。著者のひとりであるスホイシン氏曰く、「共和国の発表はウソまみれ」。

氏の入院中に何があったのか。そして衝撃はコレだけではない。

『サユース計画』。コレもまた、本紙のスクープを裏づけるものとなった。



「ザ・ビーズ」の曲は宇宙人からのメッセージ!!?

207metres

Radio RAKUS

<——いかがお過ごしですか。こちらはラクス大公国。ジミー・コープ・ショウの時間です。本日はこんなテーマでお送りしましょう。ツィルニトラ共和国連邦の宇宙開発。話題の自主出版本『月と猟犬』、ご存じですか。出回り始めたのは一月半ばで——>

< ——スタッフが複製品を入手しました。かの国では非合法なので、取り扱いに注意しないと。さて、こちらの本、なんと著者は宇宙飛行士と設計主任。しかし彼らが実在するかというと、やや怪しい。ですが、内容が衝撃的。宇宙開発の裏側が書かれてるんです。これね、びっくり。共和国政府の公式発表とまったく違う。イリナ・ルミネスク氏は実験体だったとか、レフ・レプス氏はパラシュートで着陸したとか、宇宙遊泳では死にかけてたとか——>

<——この本の内容が正しいかは、私にはわかりません。でも『サユース計画』は興味深い。連合王国と共和国の共同開発。そんなことできます？　連合王国のANSAの職員が読んだという噂もありますが——>

<——自主出版なので入手困難かもしれません。ですが、ぜひ読んでほしい。書かれている内容が嘘か真か？　判断するのはあなた自身です。それではここで一曲。『ザ・ビーズ』で——>

1967.2.1 PM9:00

第六章　猟犬たち

藍の瞳　Очи　индиго

一九六七年二月。非合法書籍『月と猟犬ライカ』は国内外で「胡う散さん臭くさいが、妙に説得力のある暴露本」として話題を呼んでいる。

レフたちは年末年始を返上して二〇〇部を複製し、予定どおり、一月半ばには協力してくれそうな者たちへ密ひそかに頒布した。宇宙開発関連の同志だけでなく、反体制集団にも送付した。

話題になった一因として、著者の実在が真偽不明という点が挙げられる。

著者のひとりであるウラジミル・スホイシンは、一九六一年四月に『アーナックニューズ』が《極秘裏に宇宙飛行をしたが墜落し、入院している！》と報じた人物だ。

実際にはスホイシンという宇宙飛行士は存在せず、入院していたのは宇宙開発とは無関係の別人で、共和国政府が金星探査機の打ち上げ失敗を隠いん蔽ぺいしたせいで生まれた誤解なのだが、今回レフはその話題性を利用した。

それに加えて、以前『アーナックニューズ』が流した悪質なデマ──《恐怖！　カイエ・スカーレットは人間を襲う吸血鬼！》に対してイリナが「吸血鬼を侮辱してる！」とひどく腹を立てていたので、その仕返しも兼ねている。

案の定、『アーナックニューズ』は大喜びで釣り針に引っかかり、連合王国を含めた全世界への広報役を自ら務めてくれた。

しかし、この三流スクープ新聞も馬鹿にしたものではなく、一〇〇回に一度ぐらいは大きな当たりを世に放つ。ハイペリオン宇宙船の事故直後に《開発請負会社の欠陥隠し》と報じたが、調査の結果、「開発を担当した航空機メーカーが納期に間に合わせるために、致命的な欠陥を隠して納品した」という疑惑が濃厚になった。

ＡＮＳＡが非難すると、航空機メーカーは「設計段階のミスとＡＮＳＡの検査漏れ」を主張し、責任の所在を巡って争い、訴訟沙汰たに。航空機メーカーは「開発から手を引く」という話にまで発展していた。

この設計ミスに気づいていたのがコローヴィン──もうひとりの著者、東の妖術師チーフデザイナーだ。偽名に使ったＫ□Ｅ□トゥハコフスキーという名は、祖国の誇る宇宙科学の父で、連合王国のクラウス博士も影響を受けたと公言している。匿名の設計技師長が明かした名がそれでは、技術者たちは妖術をかけられた気分だろう。

責任編集の名前は、誰でもない架空の人物。当局の調査を混乱させるため、適当な名前を三〇名分ほど紙に書き、くじ引きで拾い上げただけだ。

本の内容は真実でも、著者と編集者は謎なぞの人物。出所のあやふやなものほど議論の余地があり、人々の興味を引き、噂うわさは広まる。

共和国の一般市民はそのような裏など知らない。

いや、知る必要もない。

秘密主義の内幕をさらけ出した非合法書籍は、『ザ・ビーズ』が創り出した自由の風に乗り、人から人の手へ拡散される。複製に使う糊を煮込む危険な香りが、街角で闇やみ取引するヒソヒソ声が、共和国の深い夜に漂っている。

宇宙開発現場の暴露については「存在の疑わしいスホイシンではなく、同志ミハイル・ヤシン飛行士が書き残した遺書ではないか？」と市民のあいだで噂うわさされる。それに対してローザは微笑を浮かべる。「きっと彼も笑ってる」と。

ひとまず計画が上う手まくいき、レフたちは密ひそかによろこびを噛かみしめた。ＡＮＳＡにもおそらく『サユース計画』は伝わっただろう。

だがしかし、拡散されればされるほど、恐怖も同時に押し寄せてくる。

政府が騒動を放置しておくわけがない。宇宙開発は国家の威信を懸けて競ってきた計画だ。

検閲を担当する文献出版総局グラヴリートは「国家戦略を揺るがす虚偽捏造の自主出版本」として即発禁に指定し、政府は「秩序を乱す扇動」「体制の毀き損そん」と非難する。

そして真実をもみ消すための対策は迅速に行われる。

ロケットを貶けなされたロケット開発者・グラウディンは国営通信ＴＡЦＣをとおして反対意見を発表する。

『例の怪文書は、我々の宇宙開発を邪魔せんとする輩やからの策謀という疑いが強い。我らが祖国の超大型ロケットは完成間近である』

さらに、『真実』紙には否定的な論評やコメントが掲載される。

《「東の妖術師チーフデザイナーを名乗る者が書いた設計書は、お粗末な空想である」──宇宙工学者　Ｐ□イワノヴィッチ》

《「サユース計画など聞いたこともない。愉快犯のでっち上げだ」──第一設計局　上級技師　Ｎ□Ｋ□セマク》

しかし、当の学者も技師も存在しない架空の人物である。

また、宇宙飛行士スホイシンについても政府による訂正が入ったのだが。

《「スホイシンという飛行士は存在しません。同志の皆さん、扇動に惑まどわされないでください」──宇宙飛行士　レフ・レプス大佐》

《「吸血鬼は実験体という嘘うそを書かれて、私は悲しんでいます」──宇宙飛行士　イリナ・ルミネスク中佐》

《「私たち夫婦は自分たちで結婚を決めました。嘘だらけの非合法書籍を断固非難します」──宇宙飛行士　ローザ・ヤシナ中佐》

もちろん、レフたちはこんなコメントをしていない。政府に指示された新聞記者がレフたちの名を騙かたり、書いたのだ。

「まったく。この国は飛行士をマネキンか何かだと思っているの？」

　イリナは不満を口にするが、レフは我慢するように言う。

「想定の範囲内だ。国家を礼賛するコメントを勝手に出されるのは初めてじゃないだろう」

「そうだけど……」

「城塞区画ネグリンのなかに、別の人格を飼われてると思った方が楽だ」

　記者会見などでレフが顔を出してしゃべる場合は別として、文字だけの掲載ならば逐一本人に確認を取る必要もない。模範的な言葉しか載らないのだから。

　だが、政府がいくら真実を嘘うそで覆い隠しても、真実は砕けない。そして、真実は国民に浸透し始めている。

　非合法書籍の所持や複製は罰せられ、実際に逮捕者も出ているが、市民の有志は数を増やし、複製と頒布を止めない。母なる大地に封殺されていた魂が、猟犬ライカの咆吼によって解放されたのだ。

　世間の騒ぎがまるで別世界の出来事のように、『ライカ44』は森閑としている。

　証拠隠滅のため、タイプライターは分解して廃棄し、複製に使った道具も焼却処分した。『月と猟犬』は誰かが外部から持ち込んでいなければ、一冊も残っていない。『我が闘病記』は厳重に梱包して、訓練センターの裏手に埋めた。

　外の世界の情報は、新聞やラジオで入手する。

　政府は、反応を見る限りでは、『サユース計画』を否定している。

　しかし、その否定を真に受けてはいけない。非合法書籍に載っている案をすぐに受け入れるわけがない。おそらく裏では技術者や科

学者を集めて内容を検証しているだろう。そして、『Ｃ-Ｉ』の不可能性が立証されれば、ゲルギエフの気持ちは大きく揺らぐはずだ。

　敗北するより、共同開発を選ぶという方向に。

　このまま狙ねらいどおりに進めば言うことなしだけれど、レフや同志たちは当然、自分たちが無傷で終わるとは思っていない。

　今回の騒動の発端が『ライカ44』にあると政府が感づいているか否いなかはわからないが、遅かれ早かれ〔運送屋〕がやってくるだろう。

　雪に煙けぶる早朝、宇宙市民住宅に〔運送屋〕が現れることを警戒する。調査か、事情聴取か、それとも拘留か。かつて、レフの恩師である初等学校の先生は、『飛行機は空を飛ぶもので、人を殺す武器ではない』と生徒に伝えた翌日、村から消えてしまった。民衆の敵とされた恩師と同じ道を、レフも歩むのか。

　共和国の冬は暗く、長い。重苦しい乱層雲の下、降り止まない雪に包まれ、日の光が当たらず、気も滅め入いってくる。計画に参加した同志のなかには、息が詰まり、不安を吐露する者も出てくる。吹雪の向こうの赤松林を、黒革の外がい套とうを纏まとった集団に見間違え、戦せん慄りつが走る。

　そんな彼らにレフは、とある学者の言葉を告げる。

「『裁かれる私よりも、処刑を宣告したあなたたちの方が、真理の恐怖に震えているぞ』。一六世紀に地動説を唱えつづけた学者は、処刑される場でこう言い放った」

　コローヴィンの書斎にも置いてあった、常識を覆す本を書いた学者の言葉を、そのまま共和国上層部に突きつける。

レフとイリナは臨時委員会に招集され、ヴィクトール中将とともに飛行機でサングラードに向かった。招集通知が届いたときは「ついに来たか」と覚悟をしたが、通知の内容を読んでみると、罪人として吊つるし上げられるわけではなく、非合法書籍に関する意見を求められているようだった。委員ではないイリナまで呼び出されたのは、書籍に吸血鬼に関する記述があるためだ。

とはいえ安心はできない。〔運送屋〕による捜査の手はどこまで伸びているかわからない。

サングラード近郊の軍用飛行場に降りたレフたち三名は、政府が用意した送迎車に乗り、市内中心部にある城塞区画ネグリンへ向かう。『ライカ44』の位置する共和国北部に比べれば積雪量は少ないが、見渡す限り一面が真っ白に染まっている。

街へつながる大通りを走っていると、『ザ・ビーズ』風の髪型をした若い男女三人がミハイルの顔写真を胸元に掲げて歩いていた。ミハイルが宇宙飛行士になったとき発行された記念品だ。

助手席に乗っているヴィクトール中将が渋い顔で言う。

「噂うわさに聞く、『ロージナI号への抗議』か……」

非合法書籍ではロージナの不具合には触れていないが、裏読みした若者たちのあいだで、ミハイルを悼む行動が流行している。市街地を練り歩くのは、一九六一年夏、連合王国でバートとカイエたち新血種族が行った大行進から着想を得たらしい。

しかし、この国ではデモ行進と見なされたり、反政府的な言葉を

発したりすればすぐに逮捕されてしまうので、表向きはあくまでも英雄の死を偲しのぶという形で、無言で目立たないようにしている。

それでも、抗議をする彼らの想いがレフには伝わり、イリナと軽く頷うなずき合う。彼ら以外にも、きっと多くの人たちに、気持ちは届いたはずだと。

そのまましばらく大通りを走っていると、運転手が無線を取り、「はい」とだけ答えた。直後、車は交差点を曲がる。

レフは違和感を覚える。

城塞区画ネグリンとは方角が違うのではないか？

ミラー越しにヴィクトール中将の様子を窺うかがうと、険しい顔つきで窓の外を見ている。

運転手は何もしゃべらず、淡々と車を走らせ、雪帽子を被かぶった七竈リヤビーナが立ち並ぶ路地に入る。道の両側は錆びた倉庫に囲まれ、人影はない。白雪の絨じゆう毯たんに、ぼたぼたと血けつ痕こんが染みているように、真っ赤な七竈の実がそこかしこに落ちている。

どこへ連れて行くつもりだ。イリナも嫌な予感に襲われたのか、身体からだをきゅっと縮こまらせる。

路地裏へ入った車が速度を落として停車すると、倉庫の陰から、黒革の外がい套とうに身を包んだ男たち五名が湧わき出てきた。

目にした瞬間、心が慄りつ然ぜんとした。

まずい。〔運送屋〕だ。

レフは平静を装いながら、そっとイリナを庇かばう姿勢を取る。

〔運送屋〕は助手席のドアを無遠慮に開けると、冷たい声を発した。

「国家保安委員会だ。同志ヴィクトール、ご同行願おう」

ヴィクトール中将は「行ってくる」と平坦な口調で言うと、運転

手とともに車を降りる。そして刃物のような目つきの〔運送屋〕二名が、隙すきのない動きで運転席と助手席に乗り込む。

「おふたりも、ご同行願おう」

　命令に従うしかなかった。イリナを横目で窺うと、唇を固く結び、前だけをジッと見つめていた。

　城塞区画から約一キロメートル離れた国家保安委員会の本部にレフとイリナは連行される。地下には監獄、拷問室、そして処刑場がある。初めて足を踏み入れたレフは陰惨な空気に触れて、全身の血液が凍るような絶望に襲われる。どこかから悲鳴と銃声が聞こえた気がして身が震える。

　覚悟を固めたレフが連れて来られた場所は、監獄ではなく、一台の長方形の机と四脚のパイプ椅い子すがあるだけの無機質な小部屋だった。〔運送屋〕に座るように促されて、不安げに眉まゆを曇らせるイリナと並んで腰かける。すると、〔運送屋〕は無言で部屋の外に出て、扉の脇に立つ。ここまでの扱いは存外に乱暴ではなく、これから拷問が行われる雰囲気は感じない。レフは自分の身よりも、むしろヴィクトール中将の方が心配だった。彼は罪を被る首謀者を自ら買って出たのだから。

　しばらくすると、カツカツと靴音が近づいてきた。毛皮の外套を纏まとった女性が室内に入ってくる。

　リュドミラだ。

「どうも、お久しぶり」

　友人と再会したときのような調子の彼女は、扉をしっかりと閉めて、レフとイリナの正面に座る。橙花ネロリの甘く苦い香りがふわりとレフの鼻先をかすめたが、リュドミラの乾いた声が甘みをかき消す。

「君たちと個人的に話をしたくて呼んだの。嘘うそを吐つかずに素直に答えて。手荒な真ま似ねはしたくないし、ここ、寒いし早く出たいの」

　そう言って、質の悪い紙の束をパサリと机の上に置く。

複製された『月と猟犬ライカ』だ。

リュドミラは引き締まった指先でトントンと机を叩たたくと、レフとイリナを交互に見る。

「これ。君たちの仕業だよね？　ここまでくわしい内情を知る者は、ほかにはいないから」

何らかの証拠を得た上で連行したと思われるので、しらを切るのは難しい。しかも相手が相手なので、失言すれば容赦なく追及されるだろう。いかに答えるべきかレフが素早く思考を巡らせていると、リュドミラが「そうだ」と手を叩いた。

「大事な質問を忘れてた。イリナに訊きこうかな」

「なに」

冷たく応対するイリナに、リュドミラは無表情で尋ねる。

「この地下って、招待された人しか入れない、三つの特別な空間があるの知ってる？」

「……監獄、拷問室、処刑場」

「正解」

酷薄な笑みを浮かべるリュドミラは非合法書籍を指す。

「じゃあレフ君、さっきの質問に答えて。回答次第で、イリナには特別な空間に移ってもらうかも」

闇やみを帯びた深緑色の瞳ひとみがレフを貫く。わざわざイリナに答えさせた意図は、真実を素直に吐けという脅しだろう。

レフはリュドミラを強く見つめ返す。

「答える前に、ひとつ教えてください」

「いいよ」

「同志中将はどこへ連れて行かれたんですか」

「扇動の首謀者という疑惑があり、近場のホテルに監禁されてる。

証拠が揃そろい次第、最高会議幹部会で聴取を受ける。共和国刑法典に基づく行政秩序違反罪。反政府、国家を毀き損そんする行為。偽証罪は禁固刑も上乗せ。ふふっ、聞いてるだけで疲れちゃうでしょ」

　楽しげに声を弾ませるリュドミラ。彼女の話した内容は非常に厳しいものだ。レフとイリナを守ったせいで、彼は多くの罪を被かぶってしまう。

「はい、答えたよ。今度は君の番」

　リュドミラは懐ふところにスッと手を入れた。銃口を向けられるのかと警戒したが、取り出したのは飴あめ玉だまの缶だ。鮮やかな赤色の飴玉を舌で転がし、毒蛇のような目つきでレフを覗のぞき込む。

「質問を忘れちゃった？　もう一度訊くわ。地下出版サミズダートは君たちの仕業だよね？」

　レフは悩み、小考する。しかしやはり、候補生の補欠になっても見捨てず、宇宙飛行士になってからも面倒を見てくれた上官の顔を思い浮かべると、嘘うそを吐つけない。

「……首謀者は、俺です」

　アッ、と小さく声を上げたイリナをレフは制し、話をつづける。

「イリナや同志中将、そして訓練センターの同志たちに、執筆や複製の手伝いを頼みました。すべての責任は俺にあります。それで、もし誤解があるのなら解いておきたいのですが、今回の出版に反政府や扇動の目的はありません。ただ、『サユース計画』を成立させて、この国の宇宙開発を救いたかっただけです」

　瞬きもせずにレフを凝視していたリュドミラは、堪こらえきれないといった感じで失笑する。

「あははっ。君さぁ、英雄じゃなかったら三回は処刑されてるよ。君には猟犬じゃなくて愛玩犬になってほしかったんだけど無理みたいだね」

「前にも言ったはずです。俺たちは国家の駒じゃないと」

「ええ、言ってたわね」

「それに、あなたもわかっているはずです。このままでは、我らが祖国の宇宙開発は終わってしまうと」

「わかってるわよ」

　いくら訴えてもリュドミラは軽く流し、自分のペースに持ち込む。

「私ね、わかってるからこそ、こうして君たちに感謝してるんだけど」

　挑発に乗らないよう、レフは感情を抑えて声を出す。

「感謝、何を……」

「誤解してるのは、君よ」

「え？」

「今、ふつうの椅い子すに座ってるでしょ。電気椅子や拘束台じゃなくて」

　ドキッとして思わずレフとイリナは少し腰を浮かせる。そんなふたりを見て、リュドミラは鼻先でクスッと笑う。

「『サユース計画』は君の考えてるとおり、敗北必至のこの国を救うかもしれないから」

　いきなり予想だにせぬ評価をされて、レフは面食らった。いや、政府が内容を検証しているかもしれないとは思っていたが、感謝とは。混乱が収まるにつれて、好機がやってきたことを実感し、ようやく心臓が早鐘を打ち始める。

　レフはひとつ息を吐き、慎重に話を進める。

「政府は前向きに検討しているんですか？」

「検討中。ところでこの本、設計に関する大事な箇所が抜けてるけど、わざと？」

「そうです。機密を守りました。設計の理論は完成してます」

「著者の『東の妖術師チーフデザイナー』って、偽名を使ってるけど、チーフ本人でしょ。彼が意識障害になる前に、君は資料を受け取っていたの？」

　鋭い追及に一瞬ひやりとしたが、疑うような口ぶりからすると、まだクセニアに手は及んでいないらしい。レフは悟られないよう、嘘うそを混ぜながら会話をつづける。

「はい、俺がチーフの書き残した雑記帳を受け取っていました。ただ、雑記帳をそのまま委員会に提出すると、ロージナの調査報告書と同じように、無視されたり燃やされたりする危険を感じたので、今回は無視できない方法で公開しました」

「なるほどね」

　非難を含めて言ったものの、リュドミラに効いた様子はなく、瞳ひとみがうれしそうに輝く。

「もし計画が上う手まくいけば、不要な設計局や人材のお掃除が進むし、軍部の犬どもの首を切れそう」

　会話をつづけてボロが出る前に、レフは議論の核心を突く。

「同志ゲルギエフは、連合王国との共同開発を視野に入れているのですか？」

　リュドミラはこくりと頷うなずく。

「もうほかに道はないからね。連合王国の不幸につけ込んで強行した『宇宙結婚式』は大失敗で、チーフは倒れたまま目覚めない。ミハイル君の葬儀のときは我が人生の終わりみたいに放心してたよ。『国家史上最悪の指導者になってしまう……』って」

　霊れい廟びよう上部の演壇に、蝋ろう人形のように突っ立っていたゲルギエフを思い出し、レフは机の下で拳こぶしを握りしめる。あの場で、自己保身しか考えていなかったのかと。

　リュドミラはレフの怒りなどどこ吹く風という感じで話をつづける。

「そんな絶望状態だったときに、『サユース計画』が湧わいて出てきた。これは起死回生の策になる。有人月面着陸が成功すれば、宇

宙開発を推し進めた指導者として歴史に名を残す。もし成功しなくても、連合王国との冷戦を集結に導いたという実績ができる。どちらに転んでも、数々の失政は上塗りできる。計画の成否までは私もわからないし、連合王国次第の部分も大きいけど、ＡＮＳＡは本を入手したって諜ちよう報ほう員から報告が来てるしね」

「ＡＮＳＡは、どう言ってますか!?」

　一道の光明が差し、つい声の大きくなってしまったレフに、リュドミラはいささか呆あつ気けにとられたように眉まゆを上げる。

「今の反応、同志ゲルギエフと一緒。彼も、ＡＮＳＡの話を聞いた瞬間、まるで命を救われたみたいに騒いでたよ。あんな興奮した様子は、久しぶり。『ノスフェラトゥ計画』を提案したとき以来かな」

「待って」

　イリナが遮さえぎった。

「提案した？」

「そうよ、『ノスフェラトゥ計画』の発案者は私」

「あなたが……!?」

「ずいぶん驚いてるね、『Ｎ44』ことイリナ・ルミネスク」

「初めて聞いたから……」

　レフも初耳だった。国家の上層部が寄り集まって考えたのだと思っていた。

　唖あ然ぜんとしているふたりの様子がおかしいのか、リュドミラは頬ほおに笑え窪くぼを浮かべる。

「でもイリナは吸血鬼の村アニヴアルを出てよかったね。『呪われし種』だったあなたが宇宙飛行士になって、有名になっちゃって。もし人間だったら、世界中の美味や名物を楽しめたのに、味覚がないなんて残念ね」

「べつに、どうでもいい」

そっぽを向くイリナなどリュドミラは気にせず、話をつづける。

「とにかく、同志ゲルギエフは地下出版サミズダートの首謀者に感謝してる。一方で、軍部周辺の連中は激怒してるけどね。だから、もし計画を実現したいなら、君たちは私たちと同盟を組んでもらわないといけない」

ミハイルの仇と手を組むのは気分が悪いが、念願を達成するためには、受け入れるしかないだろう。

「でもね――」

一転、不愉快な顔つきになるリュドミラ。

「『宇宙飛行士の真相告白』として裏側を暴露してくれたのは余計だった。面倒な処理が発生したじゃない。君は心配しなくていいけどね。もう代役を立てて片付けたから」

彼女は違和感のある言葉を吐いた。

「……代役って、どういうことですか？」

「言葉どおり。身代わりになる者を〔運送屋〕に突き出したの」

ヴィクトール中将のことかと、レフの胸がドキッとする。

ところが。

「宇宙飛行士スホイシンを名乗ったのは、反政府発言で追放された二期生。扇動する動機はありそうでしょ。それから、東の妖術師チーフデザイナーを名乗ったのは――覚えてるかしら、元技師のフランツ・フェルツマン君」

「フランツ……!?」

六年前、訓練センターで働いていたレフの友人。『ミェチタ計画』の頓とん挫ざを狙ねらう何者かに命じられ、遠心加速器に細工を施して、イリナを殺そうとした。

リュドミラは淡々と言う。

「事件のあと、炭鉱で働かされていた彼は、宇宙開発への憎悪が膨

らみ、チーフの書いた計画を盗み出した。そして、地下出版サミズダートで国家戦略の破壊を目もく論ろんだ。こうして、宇宙開発計画に恨みのあったふたりが転覆を企てた……という設定」

「待ってください。俺は身代わりなど望んでいません」

「もう遅いの。ついさっき処理されちゃった。ここの特別な区画に招待されてね」

　リュドミラは指で銃の形を作り、自分のこめかみを撃った。

　連行されるときに聞こえた気がした悲鳴と銃声は、気のせいではなく、まさか──

　非道すぎる行為にレフは身震いする。

「どうして、俺とイリナを聴取する前に……」

「それとこれとは話が別だから」

　冷然と話すリュドミラに、眉まゆをひそめるイリナ。

「あなた、いつか殺されるわよ」

「ご指摘ありがとう。でも、とっくの昔に覚悟はできてるから。飛行士が宙そらを飛ぶのに命を懸けるのと同じ。私も夢に人生を捧ささげたの」

「夢……？」

　リュドミラはさらっと言う。

「共和国連邦の解体と再構築」

　ガリッと、舐なめていた飴あめ玉だまを噛かんで割る音がした。

　レフは聞き間違いではないかと、耳を疑う。

「今、何て……」

「解体と再構築」

　リュドミラはレフをまっすぐに見つめる。

「諜ちよう報ほう員として連合王国に留学してたとき気づいたの。連合王国がいずれ世界の覇権を握ると。それで、帰国してみたら、我が祖国は妄執的な指導者と利己主義者ばかりでしょ。政治局は権力闘争ばかりで腐敗し、経済不況で国力は低下。〔運送屋〕の幹部に『祖国はこのままでは滅ぶ』と焦ってる者がいるけど、そのとおり。三〇年も保たずに崩壊すると思うよ」

　国家批判を平然と述べる彼女に、レフは底知れぬ恐怖を覚える。

「ところで、君はどう思う？」

「ど、どうって……」

「この国は、『すばらしき楽園』だと思ってる？　素直に答えて」

　いきなり問われて、狼狽うろたえてしまう。楽園とはまったく思っていないが、そうは答えられない。

　ここは国家保安委員会の本部だ。どこに目や耳があるかわからない。彼女が口にした批判は全部引っかけで、今の問いは反乱分子を調査する試験かもしれない。フランツの件も嘘うそだという可能性もある。

　下へ手たなことを言えば消される。隣のイリナはうつむき、『月と猟犬ライカ』の表紙を無言で見つめている。

　するとリュドミラはレフの答えを待たず、真顔で話す。

「今の時代に大粛清をしようものなら、各国から非難されてますます孤立するでしょ。だから、平和的に邪魔者を排除する方法を採用したの。親愛なる同志、フョードル・ゲルギエフはすぐに暴走するけど革命的英雄になりたいみたいだから、クーデターを潰つぶして、支持者で周りを固めてあげた。この国を『真のすばらしき楽園』として建て直すの。連合王国との団結はその一歩。競争ではなく共存。東西の冷戦ではなくて、東西による支配」

　あまりにも大きな野望だ。

　しかし、その一端にレフは漠然とした疑問を持つ。「クーデターを潰した」「支持者で固めた」と彼女は言ったが、ひとりでできるわけがない。

つまり、リュドミラの周囲には、姿を見せない悪霊が多数蠢うごめいている。それが〔運送屋〕なのか、連合王国の関係者なのか、まったく別の何かなのか、正体はわからない。

恐る恐る、レフは訊たずねる。

「共和国連邦の改革が、あなたたちの目的なのか」

「あなたたちって……君は宇宙飛行士をつづけたいなら、目の検査をした方がいいよ」

リュドミラは軽く嘲笑して席を立ち、レフの横に来る。そして、飴あめ玉だまの入った缶から黒色と青色、ふたつの飴玉を取り、レフの目の前にトンと置く。

「最後にもう一度訊きくわ。この国をどう思う？　私の意見に賛成して、『真のすばらしき楽園』を目指して同盟を組む意思はある？　それなら、甘い黒蜜の飴を食べて。もし君が今の祖国を大切にしたいと言うのなら、殺さつ鼠そ剤ざい入りの青い飴を食べてここで死んで」

言い終えるとリュドミラは衣嚢ポケツトから拳銃を取り出し、銃口をレフに向ける。

「好きな方を召し上がれ」

無理やりにでも従わせようとしている。

だが、脅しには屈しない。

レフは二粒の飴玉を掴つかむと立ち上がる。

「言ったはずです。俺は国家の駒にもならないし、あなたの犬になる気もない。自分の好きな道を選ぶ」

二粒の飴玉を手のひらに載せて、リュドミラに差し出す。すると彼女は鼻で笑い、レフの手から両方の飴玉を取る。一瞬触れた彼女の指先は、氷のように冷たかった。

「君といいミハイル君といい、人の好意を突き返してくれるね。……ああ、そっか。甘い物が嫌いなんだ？　今度は苦い物を用意しておくわ」

　リュドミラは殺鼠剤入りと自分で言った青い飴を口に入れる。

「で、レフ君。祖国を守りたい連中を敵に回すってことでいいのね」

　渋々ながらレフが同意を示すと、リュドミラはさも愉快そうに口の端をつり上げる。

「共同開発を進めるならば避けられないと認識してます」

「よろしい。じゃあ設計書の伏せた箇所をあとで渡して。私のルートでＡＮＳＡに送る。それと、『月と猟犬ライカ』についての会見を用意するから、君の口からこう説明してね。『非合法の落書きを信じないでほしい。スホイシンなど存在しない。ただし、サユース計画はすばらしいと思う。私は諸もろ手てを挙げて賛成します』と」

「わかりました」

　結局、上の指示に従わねばならないという鬱うつ屈くつした憤ふん懣まんは残る。しかし、国家同士の共同事業となると、自分ひとりの考えで動けるものではない。リュドミラの言う「解体と再構築」がどの程度のものか不明だし、「東西支配」など本気かどうか疑わしい。だが、連合王国と手を取り合うことで社会が良い方向に進むと信じ、折り合いをつけるしかない……のか。

　イリナを見ると、うつむいて黙っている。彼女はリュドミラの提案を承諾したことに賛成してくれているのだろうか。

　リュドミラがイリナの横に立ち、上から話す。

「ねえ、イリナ。君も理解してくれたんだよね」

「──最後にひとついいかしら」

「なに？」

　イリナは席を立ち、リュドミラと目を合わせる。

「あなたの話をずっと聞いてあげてたけど、ローザの名前が一度も出てない」

「そうだった？　気にもしてなかった」

　ふたりは身長差があり、イリナは見下ろされる形になる。しかしイリナは強い目つきで、冷徹な視線を弾はじき返す。

「ローザに謝ってくれない？」

「どうして私が謝るの」

「あなたも宇宙での結婚式に加担したんでしょ」

「だから？」

　まったく悪びれないリュドミラに、レフは憤いきどおりを覚える。彼女にとって他人は本当に駒でしかないのだ。

　イリナの声が怒りに満ちる。

「ローザはあなたたちに人生を弄もてあそばれたのよ……！」

　リュドミラは飴あめ玉だまをころころと舌で転がす。

「ごめんね。あの子のこと、宇宙飛行中に嘔おう吐としたって印象しかない」

　いきなりイリナがリュドミラの頬ほおを思いっ切り引っぱたく。バチンと大きな音が響き、のけぞったリュドミラはぐらりと腰から崩れ、膝ひざを突いた。口から転がり落ちた飴玉が床に唾だ液えきの線を引く。唇を切ったのか、口元に一筋の血が流れる。

　イリナは軽けい蔑べつを込めた瞳ひとみでリュドミラを見下ろす。

「私の大事な親友を馬鹿にして、彼女の愛する人を殺した罰」

「……感情が昂たかぶると手を出すのは、隣の彼と同じだね」

　唇を血で染めたリュドミラはゆっくりと立ち上がる。その手に握られた拳銃の撃鉄が下ろされ、流れる動作で銃口がイリナの顔面に

向けられる。

「あっ！」とレフが声を上げた瞬間。

　タンッ──

　銃声と同時に、イリナの首筋あたりの髪が弾はじけた。千ち切ぎれた髪がはらりと舞い落ち、銃弾の当たった壁面がパラパラと崩れる。

　息を呑のむイリナ。レフは慌てて彼女の前に両手を広げて立ち、無表情で銃を構えるリュドミラの視界から隠す。

「大丈夫か!?」

「うん……」

　唖あ然ぜんとしているイリナは身体からだを微かに震わせる。

　ガチャリと部屋の扉が開き、〔運送屋〕が驚いた様子で顔を覗のぞかせるが、リュドミラが一いち瞥べつするとすぐに扉は閉ざされる。

　冷笑しているリュドミラをレフは睨にらむ。

「狙ねらったのか！」

「壁を狙ったの。覚えておいて。私は君たちをいつでも殺せる」

　リュドミラは拳銃をしまうと、これまで何百人と処刑してきたような目つきでふたりを射殺す。

「今は価値があるから生かしてあげてるだけ。『サユース計画』も同じよ。価値があるから計画を進めるだけ。わかってるかな。君たちが月へ行くのは──」

　リュドミラは唇に付いた血を舌で舐なめ取る。

「私のためよ」

　この国では権力が重要だとコローヴィンは忠告した。

　レフは身を以て知る。

最高指導者の側近で、〔運送屋〕とつながり、連合王国ともパイプを持つ彼女は、共和国連邦という広大な海を自由に泳ぐ。無論、彼女を恨み、死を願う者も多いだろうが、権力という盾が彼女を守っている。

「ついてきて。ミハイルを殺した最高指導者に好きなだけ噛かみつかせてあげる」

リュドミラは踵きびすを返し、部屋を出て行く。

硬直したままのイリナの背中をレフは優しくさする。

「ごめん。ローザのこと、俺がもっと責めるべきだった」

「いいの。言わなきゃ私の気が済まなかったの。それに撃ってくると思わなかったから、ちょっとびっくりしただけ」

イリナは小さく息を吐き、乱れた髪を手で払う。

「さあ、噛みつきに行きましょう」

部屋を出るとき、弾丸の当たった壁に目を遣り、レフは背筋が寒くなる。

一歩間違えればイリナの首に当たっていた。

この国は、命が軽すぎる。

国家保安委員会の本部を出たレフとイリナはリュドミラと送迎車に乗り、城塞区画ネグリン内にある閣僚会議館へ向かう。

道中、会話はいっさいなく、張り詰めた緊張がつづく。

閣僚会議館に着くと、悠然と歩くリュドミラにレフとイリナはつづいて、ゲルギエフの執務室へ入る。

壁に大きな世界地図が貼られた広々とした部屋で、ゲルギエフはひとりでチェス盤と向き合い、戦術的パズルを解いている。背を丸め、禿げた頭に手を置いて熟考する姿はまるで隠居した老人。「おしゃべり向日葵ひまわり」と呼ばれた面影はない。

そんなゲルギエフにリュドミラが声をかける。

「『すばらしき楽園』を守ってくれるふたりを連れてきたわ」

レフとイリナは形式的な挨あい拶さつをする。

「レフ・レプス大佐、参りました！」

「イリナ・ルミネスク中佐、参りました」

ゲルギエフはチェス盤から顔を上げて、ふたりを見る。その瞬間、彼の表情がパッと明るくなった。

「計画は上う手まくいくのか!?　残りの設計書はあるんだろうな？　成功の確率はどのくらいある？」

いきなり本題に入り、質問攻めだ。ミハイルへの悼みどころか、挨拶すらない。この態度は傲ごう慢まんというよりも、精神的に追い詰められている証あかしだ。レフはこれまでに何度も彼に会っているが、挨拶くらいは返していた。

ミハイルの仇に対する苛いら立だちを抑えながら、レフは計画について堂々と語る。

「一〇〇パーセント、成功させます。設計書もちゃんとあります」

ホッとするゲルギエフに向けて、レフは自信を持って説明していく。

「反対が予想される軍部の説得も大丈夫でしょう。ロケット開発において、我々の優位はもう覆されました。技術を盗まれるどころか、盗む側ですから。そして宇宙船ロージナですが、月へ向かう完

成品にはコンピューターを搭載する想定なので、連合王国のコンピューター技術から得られるものは非常に大きいでしょう」

　ゲルギエフは何度もうんうんと頷うなずきつつも、猜疑心を滲にじませる。

「設計書があるならば、問題はないのだろう？　そうだな？　ロージナはちゃんと完成するんだろうな？」

「問題ありません。急せかさなければ完成します」

　敗北必至になり、藁わらにもすがる思いで『サユース計画』に手を伸ばしたゲルギエフだ。レフが説得材料を並べれば並べるほど、彼の表情にじわじわと元気が蘇よみがえる。

　このままなら難なく説き伏せられるとレフが手応えを感じていると、ゲルギエフは唐突に顔を曇らせた。

「新型宇宙船の技術を無償で差し出すのは、もったいない気もする。我々のロケットを何とかできないものか？　コローヴィンが目覚めないなら、グラウディンに一任してしまうのはどうかね」

　諦あきらめが悪く、無理を言い始めた。その上、骨身を削ったコローヴィンを蔑ないがしろにしている。煮えくり返る思いでレフが反論しようとしたとき、先にリュドミラがゲルギエフの手元にあるチェス盤を覗のぞき込んだ。

「同志ゲルギエフ。もうひとつ一〇〇パーセント間違いないことがあるわ」

「なんだね」

　リュドミラはチェス盤から白色の女王の駒を取って、ゲルギエフの眼前に突きつける。

「彼の提唱した計画に乗らなければ、あなたは自分の息子よりも若いサンダンシア女王からチェックメイトをされる。国民からは『ゲルギエフは建国史上最低の指導者』と貶けなされ、歴史に汚名を残す。それでいいの？」

　脅されたゲルギエフは狼ろう狽ばいに顔を歪ゆがませ、ゴクリと唾つばを呑のむ。情味の欠片かけらも感じさせないリュドミラは、

白色の女王の駒を盤上に戻すと、今度は黒色の騎士ナイトの駒を取る。

「劣勢から覆すのは困難。勝ちに近い引き分けを選ぶ好機が到来したのなら、それを選ぶのが鉄則」

　リュドミラはチェス盤の枡目をトントンと指で叩たたき、置く場所を指示する。

「どうするか、もう答えは出たよね？」

「ああ、出たとも！」

　ゲルギエフはリュドミラの指示した枡目に黒色騎士をドンと置いた。最高指導者であるはずの彼は、危険な野望を持つ秘書官の術中に陥っている。傍目から見ていてレフはそう感じる。

　高揚した様子のゲルギエフはレフとイリナに向き合う。

「決めたぞ。『サユース計画』を正式に進める。共同開発について、連合王国への提案書を作ろう！」

　リュドミラの援護射撃はあったが、ついに共和国の最高指導者に共同開発を認めさせた。よろこびよりも安あん堵どが先にくる。いろいろと複雑な思いが胸をよぎるが、それでも一歩進んだのは事実だ。

　すると、リュドミラが「ちょっといいかな」とレフに言う。

「共同開発の提案書には載せない、君たちへの条件があるの」

「条件？」

「ロージナって、三人乗りとして開発されていると聞くんだけど、そうなんだよね？」

「重量などの問題はありますが、三人乗ることは可能です」

「じゃあ、搭乗員の三人のうち、二人をあなたたちで占めて」

「俺とイリナで？　それは……」

　イリナが口を挟む。

「連合王国よりも多く乗れってこと？」

「端的に言えばね。そうでしょ、同志ゲルギエフ」

　ゲルギエフはぎょろりとした目をレフとイリナに向ける。

「席の奪い合いで勝つ。そして最初に月面に降りる。しかもそれは吸血鬼ではなく、人間だ。以上が共同開発をする条件である」

　リュドミラはレフの前に歩み寄り、有無を言わせない目つきで言葉を放つ。

「一番手を獲りなさい、同志レフ・レプス」

　どこまでも勝利にこだわり、最後まで競争させる気か。連合王国の飛行士たちやイリナとの話し合いもなく、頷うなずいていいのか。レフが返答に迷っていると、イリナがリュドミラにはっきりとした口調で告げる。

「レフが一番手よ。私は順番にはこだわらない」

　そしてイリナはレフの方を向いて、凛りんと胸を張る。

「月へ行きましょう。連合王国の力を借りて、同志の夢を叶えるために」

「イリナ……」

「四六億年の歴史のなか、三〇億人から選ばれたひとりの宇宙飛行士は、人類を代表して月に降りる。人類が踏み出した偉大な一歩は、一〇〇年先にも、一〇〇〇年先にも残る。いつか地球が滅んでも、遠い宇宙のどこかで永遠に語り継がれる。あのとき、勇敢な宇宙飛行士がいたから、今の私たちがここにいるのって」

　彼女の真紅の瞳ひとみにレフの心が揺さぶられる。

　そうだ。

　月を目指すのは、自分のためではない。リュドミラやゲルギエフのためでも、国家のためでもない。

　重要なのは、月面着陸が夢から現実になった今、それを成し遂げ

ること。地球という揺り籠かごで見ていた夢を、夢のままで終わらせてはいけない。

　世界中の人々が望むのは、人類が月面に到達することだ。

　そして、その一歩から新しい宇宙時代が始まる。

　やがて二〇世紀は終わり、二一世紀には自分は死に、一〇〇〇年も経てば多くの国も滅びる。

　悠遠な宇宙史に残るのは、どこかの誰かが、偉大な一歩を踏み出したことのみ。刹せつ那なの一番手にこだわって、そこに何の意味があるだろうか。

　勝利や野望だけを追い求める者たちと同じ視点に立たなくていい。

　ただ宙そらを見上げ、高く飛びつづける。

　それが、我々のあるべき姿だろう。偉大なる宇宙飛行士、ミハイル・ヤシンよ。

「―同志ゲルギエフ」

　レフは一歩前に出て、ゲルギエフに威勢良く敬礼する。

「平凡な人間である私を選んでくださり、ありがとうございます。連合王国に勝ち、一番手を目指します。いえ、必ずやその席を獲得しましょう！」

甘い蜂はち蜜みつを身体からだ中に塗りたくり、今は美お味いしく食べてもらおう。胃のなかで消化できず、猛毒に変化するかもしれないが、覚悟しておけ。

誰だろうと、この魂の火を消すことはできない。

国家を利用して、史上初の宇宙飛行士という武器を使い、同志と月に到達する。そして月の女神から祝福を受けよう。

月や星に夢を見た、すべての人のため。

大地から宙そらを見る、すべての人のため。

未来に宙を目指す、すべての人のために。

レフ・レプスという名を与えられた、ひとりの人間の人生を捧ささぐ。

〈了〉

あとがき

※あとがきに本編のネタバレを含みます。先に開いてしまった方は、本編からどうぞ。

さて、共和国に戻っての新章はいかがだったでしょうか。

──と、その前に、今回はあとがきが四ページもあるので、報告と告知を。

まず、ネットで情報をチェックしている方はご存じだと思いますが、四巻と五巻のあいだに『月とライカと吸血姫・星町編』というスピンオフ小説をＷＥＢ連載してました。これは音楽グループＨ△Ｇハグとのコラボ企画で、Ｈ△Ｇの楽曲『銀河鉄道の夜を越えて』をモチーフにした物語です（※五巻との関連はないので、読んでいなくても大丈夫です）。

簡単に内容を紹介すると、年代は一九六四年。舞台は愛知県岡おか崎ざき市をモデルにした『星町』。内容は、楽曲名が示すとおり、『銀河鉄道の夜（宮みや沢ざわ賢けん治じ・著）』を下敷きにしてます。

主人公は、ごくふつうの高校生の少女ミサ。夢があるのに自信がなくて前に進めないミサと、その外見から「吸血鬼」と噂うわさされる転校生の少女アリアが、不思議な星巡りの旅をする。そして、太陽系の果てで待ち受ける結末は──という物語です。一～五巻とはまったく違う、幻想小説のような雰囲気です。

この星町編は『小説と音楽のコラボレーション』と銘打ち、Ｈ△Ｇのライブに組み込む形で、声優さんに台本を朗読してもらう声劇を上演しました。本書には『史上初』が頻出しますが、この公演形式もおそらく史上初だったと思います。

そしてなんと、一夜限りの公演だったはずが、好評だったおかげで、二〇一九年秋に再演が決まりました。ぜひお越しください（巻末に告知があるはず）。

また、ＷＥＢ連載を加筆修正した星町編の刊行も決まってます。詳細の発表までしばらくお待ちください。ちなみに、星町編はスピンオフですが、今後、本編のとあるところに絡んでくる予定です。

さらに告知で、一巻のオーディオブックも出ました。必聴です。あのシーンや、あのシーンで、レフとイリナがしゃべってます。電車内で聴くのは危ない（感涙）という噂。

では、本編の話を。

二〇一九年、アポロ一一号が有人月面着陸を達成して五〇周年という年に、本書もついに本格的に月面着陸へと向かう話となりました。

これまで『吸血鬼のいる世界』として史実を脚色してきましたが、今巻で非合法書籍が出回り、共同開発に進むなど、史実とは大きく異なる流れになりました。

史実（史）と本書（本）の違いは──

一．（史）一九六四年、ソ連の最高指導者は解任。

（本）共和国の最高指導者は秘書官の策謀によって延命。

二．（史）一九六六年、ソ連の設計主任は手術に失敗、亡くなる。

（本）共和国の設計主任はイリナのおかげで死を回避。

三．（史）一九六七年、ソユーズ一号で初の死亡事故。

（本）一九六六年、ロジーナ一号で……。

四．（史）一九六八年、ガガーリンは飛行機の墜落事故で亡くなる。

（本）　？

五．（史）一九六九年、アメリカがアポロ一一号で有人月面着陸に成功。ソ連は敗北。

（本）　？

六．（史）一九七〇年、宇宙でアポロ一三号の事故（※月着陸船があったので生還）

（本）一九六六年、宇宙でハイペリオン二号の事故（※月着陸船がなかったので……）

七．（史）一九七二年、アポロ・ソユーズテスト計画で米ソ協力。競争は終結。

（本）　？

―というところです。ところで、近々Ａｐｐｌｅ社が「もしソ連がアメリカより先に月面着陸していたら？」というＳＦドラマを配信するらしいですが、本書はどうなるのか。この先どう進むか、誰にもわかりません。ええ、五〇年前の人々も、未知への挑戦でした……。

そんな未知の共同開発を練るにあたり、科学技術面で藤とう堂どう様のお知恵を拝借させていただきました。この場を借りてあらためてお礼申し上げます。

つづけて。

担当の田た端ばた様、さまざまな展開のご対応ありがとうございます。蒸留酒はほどほどに。

かれい様、このあとの星町編もお願いします。大丈夫、『スマ○ラ』は僕たちを待っててくれる……。

そして、読者の皆様。いつも応援ありがとうございます。おかげさまで前半にあったような告知ができるほどになりました。ちなみに本書『月とライカ』は、ガガガ文庫編集部が検閲して小学館が出版した合法書籍なので、どれだけ宣伝しても逮捕されません。むしろ宣伝や布教は推奨されます。当局は感想ツイートを歓迎します。

とはいえ、今巻は何卒ネタバレ禁止でお願いします。既巻は「主人公とヒロインは最後良い感じに勝って終わるだろう」的なハリウッド王道感でしたが、今巻は「え？　あ？　あー……あ……

エ……」という感じなので。「ライトノベルのライトってなんだっけ？」的な賛否はあると思いますが、ひきつづき歴史の証人となっていただければ幸いです。

牧まき野の圭けい祐すけ

牧野圭祐

Keisuke Makino

ライトノベル以外にもゲームやドラマなど執筆。最近引っ越しをして執筆環境が改善されたんですが、積み本と積みゲーは増える一方。

小学館ｅＢｏｏｋｓ

月とライカと吸血姫　5

２０１９年８月21日　電子書籍版発行

著　者　牧野圭祐

発行人　立川義剛

編集人　星野博規

編　集　田端聡司

発行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

底　本　２０１９年８月26日　初版第１刷発行

©KEISUKE MAKINO 2019　ISBN978-4-09-451804-7

※製品版の巻末についている『ガ報』の情報は底本発行日時点のものです。

※ご注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信する

こと、および有償無償にかかわらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製など違法行為、もしくは第三者への譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。

GAHO

ガ報

No.148

GAGAGA BUNKO
AUGUST

ガガガ文庫
8月刊
絶賛発売中
!!!

アツい新作&人気沸騰の続刊も発売!

ガガガの夏はまだまだ続く!

一寸の虫にも五分の魂。それはヒトも同じ。

定価:本体630円+税

著者コメント
昆虫と青春の話です。よろしくお願いします。

そこは虫の魂が漂う不思議な町。
時に虫の魂は未熟な思春期の若者の魂にひきよせられ、憑いてしまう。
そんなとき、町の老人たちは、若者に告げるのだ。
「悪い虫に憑かれたら山の上の姫宮さんの所に行きなさい」と。

[むしめづる姫宮さん]

著:手代木正太郎 イラスト:Nagu

ひとり物思いに耽ることが多くなるハル。イリナはそれが恋の病なのではないかと言いだし――。アニラの恩返しと、初めてのおつかい。突如として現れた頬傷のある白髪少女。終末を生きぬくAIと少女の物語は佳境へ。

定価：本体667円＋税

著者コメント

テスタの子育て日記もついに第三巻。恋多き(?)乙女の巻だったり、なかったりです。

[ハル遠カラジ3]

著：遠藤柳一　イラスト：白味噌

元カノ、極悪スポンサー、
かつてない試練！
［クズと天使の二周目生活5］
著：天津 向 イラスト：うかみ
ついに始まった新番組
『あおばラジオ』！
だが、ポンコツな元カノADに、
極悪スポンサーと、
桃也をかつてない
試練が待ち受ける。
一方で、天使エリィは
桃也の目の前から姿を消す……。
人生やり直しコメディ第5弾！
定価：本体593円＋税
クズと天使の二周目生活5
著者コメント
新しいラジオと新しいスタッフ。桃也の二周目生活は新たな局面を迎えます。是非見守ってください！

誰がために、月を目指すのか
［月とライカと吸血姫5］
著：牧野圭祐 イラスト：かれい
共和国の宇宙開発が停滞するなか、上層部の人命軽視と隠蔽体質が現場に重くのしかかる。憤るレフとイリナだが、その先に「史上初の悲劇」が待ち受けていて……。宙と青春の物語、新章「月面着陸計画編」始動。
定価：本体630円＋税
著者コメント
新章「月面着陸計画編」開始です。超大国が競争した結果…… とんでもない事態になってしまいました。

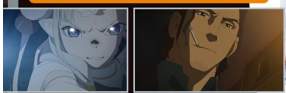
アナタはもう見たカナ？

ガガガくんが行く！ アニメ[コップクラフト] 先行上映会 潜入レポート

ガガガくん、7月に開催されたアニメ『コップクラフト DRAGNET MIRAGE RELOADED』先行上映会の様子はどうだったかな？

――イベント会場の様子は？

会場は新宿バルト9、ほぼ満席で事前期待の高さが現れていたゾ！スクリーンには「COP CRAFT 第1・2話先行上映会」の文字が映されていて、来場者は今か今かと開始を待っていたゾ！



――上映中はどうだった？

原作小説の賀東招二先生によるシリーズ構成ということで原作ファンも大満足に見えたゾ！上映会終了後には、会場は大きな拍手が沸き起こっていたゾ！

――登壇者はどんなお話をしてた？

上映会終了後に行われたトークショーには、ティラナ役の吉岡茉祐さん、原作・シリーズ構成の賀東招二先生、監督の板垣 伸さん、劇伴担当の岩崎 琢さんが登壇したんダナ！どんなお話があったか紹介するゾ！

――印象的な場面は？

板垣さん　芝居を自分の作品の中では丁寧にやったと思うので、マトバとティラナの会話も無駄がなく、丁寧に描けたと思う。

吉岡さん　（マトバとティラナが）1話の中盤で出会ってからすぐ喧嘩してるので仲がいいのか悪いのか。特に1話のエレベーターと車のシーンのティラナが可愛いです。

賀東先生　2話のお墓のシーンは自分が考えたんですけど、この手の作品でお墓参りはカッコイイですよ！

岩崎さん　主役二人の出会いのシーンは、初っ端からすれ違っているけど、希望を感じさせる曲にした。希望の種がまかれた、と伝わってほしい。

ガガガくん　途中ではOPのオーイシマサヨシさんのビデオレターや、賀東先生によるアニメでのファルバーニ語秘話も出たんダナ！

――最後に一言お願いします。

岩崎さん　サウンドトラックが発売になります。（2話での）エルバジの登場シーンの曲も是非聞いてほしい。

板垣さん　大人っぽくつくってみた。賀東さんの脚本に逆らわず、自分は絵に専念するのでこれからも面白くなるんじゃないかと。

賀東先生　客観的に見れなくなってきているので、是非感想をSNSで書いてほしい。

吉岡さん　これからもバトル、シリアス、笑えるシーンもありますので、是非最後まで見てください！

アニメ「コップクラフト」はまだまだ続くゾ！

©賀東招二・小学館/STPD

好評放送中!!　放送情報や見逃し配信は公式HPの「ON AIR」をチェックだゾ！ ▶ http://copcraft.tv/onair/

追加商品!

GAGAGASHOP ONLINE

［やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。］
描き下ろしプリマグラフィ
定価：¥27,000（税込）

［弱キャラ友崎くん］
描き下ろしプリマグラフィ
定価：¥27,000（税込）

さらに! 夏季キャンペーン開催!!!

5000円以上お買い上げの肩に、マメ本アクリルキーホルダー（全5種）がついてくる!

他にもグッズ盛りだくさん!!!!! コチラからアクセス!!

https://www.pal-shop.jp/gagagabunko/

ガガガ文庫の人気作がぞくぞく

「オーディオブック」に!

「聴く本」として話題のオーディオブックに、ガガガ文庫が参戦!声優さんたちが朗読する物語の世界を体感してみよう!詳しい情報は小学館オーディブックの公式twitterを要チェック! ▶ https://twitter.com/audio_sho

オーディオブックとは? 書籍を朗読したものを録音した音声コンテンツの総称。アメリカで主流だったが、近年日本でも拡がりを見せている。

ガガガ文庫の「最新刊」が電子書籍でもすぐ読める!!

ガガガ文庫「イラスト完全版」電子書籍 同日発売してます!

「Amazon Kindleストア」「紀伊國屋kinoppy」「BOOK☆WALKER」「楽天kobo」「iBooks」などで配信中!! 今後もどんどん取扱店拡大予定です!

作品内のカラー口絵イラストやモノクロイラストを全点再現!

ガガガ文庫最新刊の電子書籍も毎月18日頃に発売!! 気になる続刊や話題の新刊が、紙版発売と同時にお楽しみ頂けます。

GAGAGA headline

ガガガ文庫作品は「本」を飛び出し原作とは異なる魅力を発信中! このコーナーはガガガのメディアミックスニュースを毎月ご紹介!

TVアニメ コップクラフト DRAGNET MIRAGE RELOADED

物語を彩る劇中曲がいよいよ発売!!

TVアニメ『コップクラフト』オリジナル・サウンドトラック

【発売日】2019／8／21
【価格】3,000円+税

©賀東招二・小学館/STPD

イベント 月とライカと吸血姫

「H△G」コラボ声劇の再演が決定!

大好評を博した声劇「銀河鉄道の夜を越えて 月とライカと吸血姫(星町編)」が10月12日(土)恵比寿CreAtoにて再演が決定!

原作・脚本:牧野圭祐　イラスト:かれい　演奏:H△G

【チケット情報】8／24(土)より一般発売開始
前売り:3,500円(税込)／当日:4,500円(税込)

特設サイト:http://hag-official.jp/gingatetsudo/index.html

コミックス 物理的に孤立している俺の高校生活

コミカライズ連載が9月スタート!

青春未満な異能力者たちを描く漫画版がウェブマンガサイト「MAGCOMI」にて連載開始! 第1話は最新7巻発売に合わせて9／18スタート予定! どうぞご期待!

原作:森田季節
キャラクター原案:
Mika Pikazo　漫画:らま

イベント 弱キャラ友崎くん

大宮にて物販イベント&サイン会が開催決定!!!

10/18の最新⑧巻発売決定を記念して「弱キャラ友崎くん」Wイベントが開催決定! ●物販イベント「関友高校文化祭in大宮マルイ」●サイン会in「アニメイト大宮」。場所は聖地大宮! 詳報は改めて告知いたします! どうぞお楽しみに!

GAGAGA BUNKO & GAGAGA BOOKS LINE UP!

9月刊 9月18日ごろ発売!!

[妹さえいればいい。13]
著:平坂 読 イラスト:カントク
春になり、主人公たちの新しい日常が始まった。大人気青春ラブコメ群像劇、いよいよ最終章突入!!

[妹さえいればいい。13 ドラマCD付き特装版]
著:平坂 読 イラスト:カントク
なんかノリで映画を撮ることになった伊月達。クソ映画好きのアシュリー監督のもと、波乱の撮影が始まる!

[俺、ツインテールになります。18]
著:水沢 夢 イラスト:春日 歩
アルティメギル基地へと通じるゲートディスクを手に入れたツインテイルズ。ついに最終決戦の幕が上がる……。

[クラスメイトが使い魔になりまして2]
著:鶴城 東 イラスト:なたーしゃ
売り言葉に買い言葉で認めてしまった千影との婚約。おまけに監視役までつけられて…? 険悪主従ラブコメ第2弾!

[物理的に孤立している俺の高校生活7]
著:森田季節 イラスト:Mika Pikazo
生徒会のクリスマスイベントを手伝うなか、業平はついに愛河を誘う決心をする。高二の、一生で一度きりの聖夜が幕を開ける。

[プロペラオペラ]
著:犬村小六 イラスト:雫綺一生
野望を胸に秘めた天才傲慢参謀クロトと、飛空戦艦艦長の美姫イザヤ。超大国との決戦に挑む!

ガガガブックス **[北海道の現役ハンターが異世界に放り込まれてみた2]**
著:ジュピタースタジオ イラスト:夕薙
頼れるエルフ嫁との、穏やかな異世界狩猟ライフ…… とはいかず? リアルすぎるハンター事情も健在な第2巻!

単行本 **[SSSS.GRIDMAN NOVELIZATIONS Vol.1 ～もう一人の神～]**
著:水沢 夢 イラスト:bun150
『SSSS.GRIDMAN』をオリジナルストーリーでノベライズ。謎の怪獣の力により、ツツジ台に潤沌が訪れる。もう一人の神との、もう一つの戦い。

10月刊 10月18日ごろ発売!!

[きゃくほんかのセリフ!2]
――著:ますもとたくや イラスト:裕

[黒川さんに悪役は似合わない3]
――著:ハマカズシ イラスト:おつweee

[コワモテの巨人くんはフラグだけはたてるんです。～自分の恋愛には無関心のくせに～]
――著:十本スイ イラスト:U35

[弱キャラ友崎くん Lv.8]
――著:屋久ユウキ イラスト:フライ

[千歳くんはラムネ瓶のなか2]
――著:裕夢 イラスト:raemz

ガガガブックス **[死に戻り、全てを救うため最強へと至る。2]**
――著:shiryu イラスト:手島nari。

ガガガブックス **[世界最強の魔王ですが誰も討伐しにきてくれないので、勇者育成機関に潜入することにしました。2]**
――著:両道 渡 イラスト:azuタロウ

ガガガブックス **[レイロアの司祭さま4 ～はぐれ司祭のコツコツ冒険譚～]**
――著:朧丸 イラスト:野崎つばた

発売タイトル及び刊行予定は変更になることがあります。

※イラストは制作中のものです。

ここガ知りたい! ガガガ特捜部

オールタイムベスト……。それは人生のランドマークともいえる思い入れのある作品。もしかしたら読者のあなたと同じ作品の先生もいらっしゃるかも……?

質問 **先日『そして、バトンは渡された』を読んで、これは人生のオールタイムベストになるなと思いました。先生たちのオールタイムベスト本を、ぜひとも教えてほしいです!** (れいわ・福島県・22歳)

●**「きっかけ」の作品**……今慈ムジナ先生☞「すべてがFになる」ですね。読書するようになったキッカケの本です。
鶴城東先生☞乙一先生の「GOTH」です。小説を書くきっかけになった本でたまに読み返します。
裕夢先生☞好きな本が多すぎて、いまだに「この1冊だ」と断言できないんですよね。自分の読書人生に間違いなく大きな影響を与えたのは、小学校のころに読んだ江戸川乱歩の「少年探偵シリーズ」です。
ツカサ先生☞荻原規子先生の『白鳥異伝』は子供の頃から何度も読み返した作品で、一番好きな「女の子主人公」のお話です。

●**作風にあらわれている?**……草野原々先生☞デイヴィッド・リンゼイの『アルクトゥールスへの旅』です。超絶的な奇想と神秘主義が合わさったSF小説です。
手代木正太郎先生☞『世界奇聞全集』という大正七年に発行された当時の最新科学で書かれた超常現象の本。『火星に人類がいるのはもはや疑う余地がない』とかタコみたいな火星人のイラストとともにくそまじめに書いてあってすごい楽しい。辞典なみに分厚いので一生読める。

●**ライトノベル部門では**……秀章先生☞奇遇ですね! 僕も瀬尾まいこ先生の作品は大好きで、『そして、バトンは渡された』も大好きです! オールタイムベスト、色々ありますが、ラノベ部門ということで片山憲太郎先生の『紅』を挙げさせて頂きます! 興味あれば是非読んでみてくださいまし〜。
牧野圭祐先生☞選びきれなかったのでラノベに限定すると『紫色のクオリア』です。後半が(絶句)。
森田季節先生☞『イリヤの空、UFOの夏』『左巻キ式ラストリゾート』『九十九十九』『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』。

質問募集! 郵便ハガキ、Twitterで先生方に訊いてみたいことを書いて送って下さい。あなたの質問を特捜部が徹底調査致します。

その他の先生方からの回答は、編集部ログ(GAGAGAWIRE)で見られます。

第14回 小学館ライトノベル大賞

ゲスト審査員は若木民喜先生

大賞	ガガガ賞	優秀賞	審査員特別賞
賞金200万円	賞金100万円	賞金50万円	賞金50万円
&デビュー確約!!!	&デビュー確約!!!	&デビュー確約!!!	&デビュー確約!!!

締め切り 2019年9月末日(当日消印有効) 詳しくはガガガ文庫公式HP、GAGAGAWIREをご覧下さい。▶http://gagagabunko.jp/

本山らのさんとガガガくん

GAGAGA ガガガくん

ガガガ好きも要チェックのYoutubeチャンネルだゾ!

本山らのチャンネル

ラノベ好きVTuber 本山らのさん

Twitter:@Motoyama_Rano Youtube:https://www.youtube.com/channel/UCwx6UL368Zb8ruqo8aeZexA

好きなラノベを紹介したり、作家さんをゲストにお招きして生放送を配信したりしているバーチャル狐娘です!

本山らのさんのオススメ本

月とライカと吸血姫(ノスフェラトゥ)

月を目指す吸血鬼と人々の熱い想いが胸を打つ、ロマンティックな宇宙開発青春ドラマ! 感動しました……!

▶「月とライカと」をはじめ、ガガガ文庫の名作がズラッと揃っているんダナ! 後ろのほうにあるのも興味があるんダナ!

編集後記

・新しいメンバーが来て、平均年齢はたぶん変わらないが、平均体重は確実に増えたと思う。(☆)
・編集部の新しい仲間(榊)くんは超酒豪! みんな、よろしくな!(湯)
・夏があっけなく終わるけど、(榊)の夏がやって来た。(濱)
・ようこそ(榊)くん、地獄の一丁目へ…… なんて言ってたのも今は昔。クリーン&ホワイトなガガガ文庫にウェルカム!(岩)
・新しいメンバーを加えて新生ガガガ文庫がスタートだ!!(小)
・(榊)さん、いらっしゃい! ガガガ文庫はアットホームな職場だよ! 本当だよ!(田)
・百合好き元書店員編集者(若葉マーク)の(榊)です! よろしくお願いします! 頑張って生き残ります……!!!(榊)

編集部への質問もこちら!!

作家・イラストレーターへのファンレター、感想などは以下の宛先に、作者名を明記のうえ、お送りください。

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館ガガガ文庫編集部○○○(作者名)宛